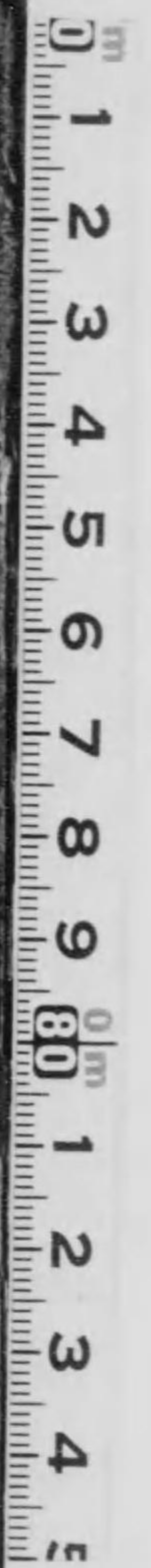


815
Y19
4④



始



9.9.29

~~322-318~~
1
815
Y19
4

山田孝雄著

日本文法講義

東京 寶文館藏版

大正
11. 9. 23
内交

東京 國文學會
日本文法講義
山田孝輔著

再版の辭

本書を世に公にしてより三ヶ月にして初版既に盡き、こゝに再版を發行せむとす。これ一に世の同情の致す所として著者の深く感謝する所なり。

本書再版に際して初版の誤脱を訂正せる所少からざるのみならず、附録として索引を加へ以て讀者の同情に報ゆる所あらむとす。なほ將來版を改むるに際しては補訂を怠らざらむことを期す。

本書にも口語法を説けりといへども、なほつくさざる所あり。委曲を知らむと欲する士は別著日本口語法講義を参考せられむことを請ふ。

敬語法も亦本書に説けりといへどもこれも大要に止まれり。著者別に敬語法の研究あり。世に公にして大方の批評を請はむと欲す。

大正十一年五月

著者識す

緒言

○本書はもと余が日本大學の切なる依頼に應じ、その高等師範部の爲に開きたる講義の草案なり。然るに聽講の諸子より之を印刷に附せむことを頻りに求められたるによりて之を公刊せるものなり。

○本書は體系を主として余が著日本文法論にとり、現代の口語文語を内容として講述せるものなるが、その内容の或部分は余が著中等文法教科書及びその別記に載せたるものをといたる處あり。かくて中等の教科よりして余が日本文法論の程度に入らむと欲する人々の爲に階梯たらしめむことを期したり。

○本書に説く所、再三同様の事を説けるが如く見ゆる點なきにあらず。これ、本書の目的既に上述の如くなれば勢止むを得ざるのみならず、同一の事項と見ゆるものも異なる方面より見れば、又再び之を説くべきこと少からざるを以てなり。

○本書は上述の如く體系を日本文法論にとりたりといへども、叙述の體は全く別様の式によれるのみならず、かの書に説かずしてここに説けるもの亦少からず。ことに句の人稱の如き、敬語の如き、音便の如きはかれに全く説かざりし點の大なるものなりとす。

○句に人稱を説くことは日本文法にては本書を以て嚆矢とすべし。この人稱の區別は敬語の用法、主格の省略等に重大なる關係を有するものなることは本文につきて見ばさとらる

べし。

○敬語をば嚴密の意義にて文法學上の説明を下したるものは從來一も之ありしを見ず。この點に於いて著者の本書の説明は少くとも世の一顧を請ふべき點ありと信ず。

○音便も亦從來合理的の説明を下したるもの稀なり。余が之を平家物語の語法に詳述せるや蓋しはじめなるべき。今この書その概要をとりて載せたり。抑も音便はもと聲音上の現象にして直接に文法上に關係なきが如くなれど、文法の變遷の研究にはこれが確實なる知識を要するのみならず、現代の口語特に俗語の研究には最も重要なる豫備知識なれば特に之を加へしなり。

○本書は往々古代文法の或るものに論及せることあり。これ

三四、稱格指示の分類 三五、第三人稱の代名詞の分類 三六、定稱の代名詞
三七、不定稱の代名詞 三八、文語口語の文法の差なし 三九、代名詞の表

第六章 數詞

四〇、數詞の特徴 四一、數詞の二類 四二、順序の數詞 四三、數量の數詞
四四、一人二羽など 四五、百圓十石など 四六、文語口語の差なし

第七章 用言概説

四七、用言 四八、用言の特徴 四九、語尾の變化 五〇、活用と語幹
五一、語幹が一言なる用言 五二、「くしき」活用、「しく、しき」活用 五三、四段活用
五四、下二段活用 五五、上二段活用 五六、上一段活用、下一段活用
五七、段の數と活用の數と 五八、三段活用 五九、變格活用 六〇、活用形
六一、終止形 六二、連體形 六三、連用形 六四、已然形
六五、未然形 六六、命令形 六七、活用形の名目と實際 六八、形式用言と實質用言
六九、形容詞と動詞 七〇、本書のとり類別 七一、複語尾 七二、數の別なし
七三、敬語 七四、謙稱と敬稱

第八章 形容詞

七五、形容詞 七六、形容詞の活用 七七、形容詞の活用形 七八、形容詞の語幹
七九、連用形の「う」 八〇、連體形の「い」 八一、口語の形容詞 八二、敬語
八三、ごとし

第九章 動詞總説

八九——一〇〇

八四、動詞 八五、自動詞他動詞 八六、動詞の活用 八七、動詞
八八、動詞の音便 八九、動詞の敬語 九〇、複語尾の作用

第十章 動詞各説

九一、四段活用 九二、四段活用の文語と口語 九三、奈行變格活用 九四、變格の口語
九五、下二段活用 九六、下一段活用 九七、口語の下一段活用 九八、上二段活用
九九、上一段活用 一〇〇、口語の上一段活用 一〇一、加行三段活用 一〇二、口語の加行三段活用
一〇三、左行三段活用 一〇四、口語の左行三段活用 一〇五、左行三段に屬する動詞の數 一〇六、「ず」
一〇九——一一五

A第十一章 存在詞

一〇七、存在詞 一〇八、「あり」の活用及び活用形 一〇九、口語の「あり」
一一〇、「をり」「侍り」 一一一、形容存在詞 一二二、口語の形容存在詞 一二三、動作存在詞
一一四、説明存在詞 一一五、口語の「なり」 一一六、口語の説明存在詞 一二七、存在詞の總括
一一八、存在の「なり」及び「かかり」「しかり」「さり」 一一九、存在詞の音便

第十二章 複語尾總説

一二〇、複語尾 一二一、複語尾と用言の活用との關係 一二二、所屬上の分類
一二三、複語尾の活用 一二四、複語尾の活用形 一二五、複語尾の活用形
一二六、複語尾複語尾を重ね用ゐること 一二七、複語尾の口語と
一二八、文語と口語と形のはれる複語尾 一二九、文語と口語にて活用形のか
一三〇、口語にのみある複語尾 一三一、「ず」の文語と口語 一二二、文語にのみ存する複語尾

第十三章 未然形所屬の複語尾

- 一三三、複語尾の性質上の分類
- 一三四、屬性の表現に關する複語尾
- 一三五、統覺の作用に關する複語尾
- 一三六、未然形所屬の複語尾
- 一三七、「る」「らる」の差異
- 一三六、「る」「らる」の
- 一三九、「れる」「られる」
- 一四〇、「す」「ます」の差異
- 一四一、「す」「ます」
- 一四二、「せる」「させる」
- 一四三、「しむ」
- 一四四、「ず」
- 一四五、「ざり」
- 一四六、「ない」「なんだ」
- 一四七、「じ」
- 一四八、「む」
- 一四九、「う」「よう」
- 一五〇、「まし」
- 一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第十四章 連用形所屬の複語尾

- 一五一、連用形所屬の複語尾
- 一五二、「き」
- 一五三、「き」と三段活用との連続
- 一五四、「けり」
- 一五五、「ぬ」
- 一五六、「つ」
- 一五七、「つ」「ぬ」の別
- 一五八、「たり」
- 一五九、「た」
- 一六〇、「けむ」
- 一六一、「たし」
- 一六二、「たい」
- 一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第十五章 終止形所屬の複語尾

- 一六三、終止形所屬の複語尾
- 一六四、「んし」
- 一六五、「べかり」
- 一六六、「めり」
- 一六七、「らむ」
- 一六八、「らし」
- 一六九、「らしい」
- 一七〇、「まじ」
- 一七一、「まじかり」
- 一七二、「まし」
- 一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第十六章 副詞概説

- 一七三、副詞
- 一七四、副詞の特性
- 一七五、副詞の職能
- 一七六、副詞の區分
- 一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第十七章 副詞各説

- 一七七、情感副詞の示す意義
- 一七八、情感副詞の職能
- 一七九、情感副詞の内容
- 一八〇、情感副詞と説明存在詞との結合
- 一八一、程度の副詞
- 一八二、體言に直に接するもの
- 一八三、陳述の副詞
- 一八四、陳述副詞の二大別
- 一八五、辯言の副詞
- 一八六、設法の副詞
- 一八七、感動の副詞
- 一八八、感動副詞の二類
- 一八九、接續の副詞
- 一九〇、副詞の文語と口語
- 一九一、助詞
- 一九二、助詞の形態
- 一九三、助詞の示す意義
- 一九四、助詞の用法
- 一九五、助詞の分類
- 一九六、助詞の文語と口語
- 一九七、格助詞
- 一九八、「の」
- 一九九、「が」
- 二〇〇、「を」
- 二〇一、「に」
- 二〇二、「と」
- 二〇三、「は」
- 二〇四、「より」
- 二〇五、「から」
- 二〇六、「で」
- 二〇七、「を」
- 二〇八、「まで」
- 二〇九、「だけ」
- 二一〇、「だけ」
- 二一一、「すら」
- 二一二、「さへ」
- 二一三、「や」
- 二一四、「ばかり」
- 二一五、「まで」
- 二一六、「など」
- 二一七、「やら」
- 二一八、「だけ」
- 二一九、「ぐらゐ」
- 二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第十八章 助詞概説

- 一九一、助詞
- 一九二、助詞の形態
- 一九三、助詞の示す意義
- 一九四、助詞の用法
- 一九五、助詞の分類
- 一九六、助詞の文語と口語
- 一九七、格助詞
- 一九八、「の」
- 一九九、「が」
- 二〇〇、「を」
- 二〇一、「に」
- 二〇二、「と」
- 二〇三、「は」
- 二〇四、「より」
- 二〇五、「から」
- 二〇六、「で」
- 二〇七、「を」
- 二〇八、「まで」
- 二〇九、「だけ」
- 二一〇、「だけ」
- 二一一、「すら」
- 二一二、「さへ」
- 二一三、「や」
- 二一四、「ばかり」
- 二一五、「まで」
- 二一六、「など」
- 二一七、「やら」
- 二一八、「だけ」
- 二一九、「ぐらゐ」
- 二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第十九章 格助詞

- 一九七、格助詞
- 一九八、「の」
- 一九九、「が」
- 二〇〇、「を」
- 二〇一、「に」
- 二〇二、「と」
- 二〇三、「は」
- 二〇四、「より」
- 二〇五、「から」
- 二〇六、「で」
- 二〇七、「を」
- 二〇八、「まで」
- 二〇九、「だけ」
- 二一〇、「だけ」
- 二一一、「すら」
- 二一二、「さへ」
- 二一三、「や」
- 二一四、「ばかり」
- 二一五、「まで」
- 二一六、「など」
- 二一七、「やら」
- 二一八、「だけ」
- 二一九、「ぐらゐ」
- 二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第二十章 副助詞

- 二〇七、副助詞
- 二〇八、副助詞の職能と特性
- 二〇九、格助詞の上に来る特性
- 二一〇、語句を受けて副詞の如くするもの
- 二一一、「すら」
- 二一二、「さへ」
- 二一三、「や」
- 二一四、「ばかり」
- 二一五、「まで」
- 二一六、「など」
- 二一七、「やら」
- 二一八、「だけ」
- 二一九、「ぐらゐ」
- 二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、三三八

第二十一章 接續助詞

- 二二〇、接續助詞
- 二二一、接續助詞の所屬
- 二二二、「ば」
- 二二四、「ど」「ども」
- 二二五、「が」「に」「を」
- 二二六、「ところが」「のに」「ものを」
- 二二七、「も」
- 二二八、「し」
- 二二九、「と」
- 二三〇、「けれど」「けれども」

第二十二章 係助詞

- 二三一、係助詞
- 二三二、その特性の一、「係結」
- 二三三、その特性の二
- 二三四、その特性の三
- 二三五、その特性の四
- 二三六、「は」
- 二三七、「も」
- 二三八、「ぞ」
- 二三九、「なむ」
- 二四〇、「こそ」
- 二四一、「や」
- 二四二、「か」
- 二四三、「な」
- 二四四、「なそ」の格
- 二四五、「さく」
- 二四六、「でも」
- 二四七、「ほか」「しか」

第二十三章 終助詞

- 二四八、終助詞
- 二四八、「が」「がな」
- 二四九、「よ」
- 二五〇、「か」「かな」
- 二五一、「かし」
- 二五二、「さ」
- 二五三、「え」
- 二五四、「ぜ」
- 二五五、「い」
- 二五六、「な」
- 二五七、「とも」
- 二五八、間投助詞
- 二五九、「よ」
- 二六〇、「や」
- 二六一、「し」
- 二六二、「と」
- 二六三、「な」
- 二六四、「ね」
- 二六五、「ぞ」

第二十四章 間投助詞

- 二五八、間投助詞
- 二五九、「よ」
- 二六〇、「や」
- 二六一、「し」
- 二六二、「と」
- 二六三、「な」
- 二六四、「ね」
- 二六五、「ぞ」

第二十五章 語の轉成

- 二六六、運用論の大綱
- 二六七、單語の轉成
- 二六八、轉成の名詞
- 二六九、轉成の形容詞
- 二七〇、轉成の動詞
- 二七一、轉成の副詞
- 二七二、接辭
- 二七三、接辭の職能
- 二七四、接辭の種類
- 二七五、接頭辭
- 二七六、實義を添ふる接尾辭
- 二七七、資格を示す接尾辭
- 二七八、合成語
- 二七九、合成語の種類
- 二八〇、連濁音
- 二八一、疊語
- 二八二、轉言の疊語
- 二八三、用言の疊語
- 二八四、動詞存在詞の疊語
- 二八五、同じ複語尾を重ね用ゐること
- 二八六、「つつ」
- 二八七、副詞の疊語
- 二八八、熟語
- 二八九、熟語に於ける轉音
- 二九〇、語句複合の方式
- 二九一、熟語の名詞
- 二九二、熟語の名詞の要素
- 二九三、熟語の代名詞
- 二九四、熟語の數詞
- 二九五、熟語の形容詞
- 二九六、熟語の動詞
- 二九七、熟語の副詞
- 二九八、熟語の助詞

第二十六章 接辭

- 二七二、接辭
- 二七三、接辭の職能
- 二七四、接辭の種類
- 二七五、接頭辭
- 二七六、實義を添ふる接尾辭
- 二七七、資格を示す接尾辭
- 二七八、合成語
- 二七九、合成語の種類
- 二八〇、連濁音
- 二八一、疊語
- 二八二、轉言の疊語
- 二八三、用言の疊語
- 二八四、動詞存在詞の疊語
- 二八五、同じ複語尾を重ね用ゐること
- 二八六、「つつ」
- 二八七、副詞の疊語
- 二八八、熟語
- 二八九、熟語に於ける轉音
- 二九〇、語句複合の方式
- 二九一、熟語の名詞
- 二九二、熟語の名詞の要素
- 二九三、熟語の代名詞
- 二九四、熟語の數詞
- 二九五、熟語の形容詞
- 二九六、熟語の動詞
- 二九七、熟語の副詞
- 二九八、熟語の助詞

第二十七章 合成語

- 二七九、合成語の種類
- 二八〇、連濁音
- 二八一、疊語
- 二八二、轉言の疊語
- 二八三、用言の疊語
- 二八四、動詞存在詞の疊語
- 二八五、同じ複語尾を重ね用ゐること
- 二八六、「つつ」
- 二八七、副詞の疊語
- 二八八、熟語
- 二八九、熟語に於ける轉音
- 二九〇、語句複合の方式
- 二九一、熟語の名詞
- 二九二、熟語の名詞の要素
- 二九三、熟語の代名詞
- 二九四、熟語の數詞
- 二九五、熟語の形容詞
- 二九六、熟語の動詞
- 二九七、熟語の副詞
- 二九八、熟語の助詞

第二十八章 語の轉用

- 二九九、語の轉用
- 三〇〇、代名詞の稱格の轉用
- 三〇一、準體言
- 三〇二、目的準體言
- 三〇三、「し」「しん」
- 三〇四、「とす」
- 三〇五、「けん」
- 三〇六、轉成の動詞
- 三〇七、轉成の副詞
- 三〇八、轉成の名詞
- 三〇九、轉成の形容詞
- 三一〇、熟語の動詞
- 三一〇、熟語の副詞
- 三一〇、熟語の助詞

第二十九章 語の位格概説及び呼格……………三二九—三三二

三〇六、語の位格 三〇七、呼格 三〇八、呼格に用ゐる語 三〇九、呼格の用

第三十章 主格……………三三二—三三五

三一〇、主格、主語 三一、主格に立つ語 三一二、主格のあらはるる状態

第三十一章 述格と賓格……………三三五—三四五

三一三、述格、述語 三一四、述格に立つ語 三一五、用言の述格

三一六、述格に立つ形容詞の語幹 三一七、賓格 三一八、「如し」の賓格

三一九、「す」の賓格 三二〇、「なり」の賓格 三二一、終止形につく「なり」

三二二、重文の述格をなす「に」 三二三、助詞にての述格 三二四、「たり」の賓格

三二五、賓格と形式用言との合一

第三十二章 補格……………三四五—三五三

三二六、補格、補語 三二七、動詞の補格 二八、形容詞の補格

三二九、副詞と「なり」の合成せる用言の補格 三三〇、補格に立つべき語

三三一、準體言の補格 三三二、述語の補格の取扱

第三十三章 受身と使役……………三五三—三五九

三三三、客語 三四四、受身の構成 三三五、自動詞にての受身

三三六、使役 三三七、使役の構成

第三十四章 連體格……………三五九—三六六

三三八、連體格、連體語 三三九、連體格に立つ語 三四〇、連體格の體言

三四一、連體格たる代名詞の特種の用法 三四二、場所方向の代名詞の連體格

三四三、連體格の用言 三四四、連體形に「の」を加へたる形のもの

三四五、連體格に立つ用言の補語 三四六、連體格の副詞

第三十五章 修飾格……………三六六—三七二

三四七、修飾格、修飾語 三四八、修飾格に立つべき語 三四九、用言の修飾格の種類

三五〇、情景の修飾 三五二、陳述の修飾

三五三、句の修飾

第三十六章 體言及び副詞の用法……………三七三—三七六

三五四、名詞の用法 三五五、代名詞の本體 三五六、代名詞の用法

三五七、數詞の用法 三五八、副詞の用法 三五九、名詞の修飾をなす副詞

第三十七章 用言の用法……………三七六—三八五

三六〇、述格 三六一、述語を下に接続したるもの 三六二、連體形の用法

三六三、連用形の用法、連用言 三六四、同格連用 三六五、修飾連用

三六六、同じ動詞を重ねるもの 三六七、形容詞の語幹の用法

第三十八章 複語尾の用法……………三八五—四〇七

三六八、複語尾の未然形	三六九、その未然形につく複語尾	三七〇、「んげむ」
三七一、複語尾の連用形	三七二、その同格連用	三七三、その修飾連用
三七四、その連用形につく複語尾	三七五、「ずて」「で」「いで」	三七六、複語尾の終止形
三七七、その終止形を受くる複語尾	三七八、複語尾の連體形	三七九、その連體形に複語尾を伴ふもの
三八〇、「まい」の用法	三八一、複語尾の已然形	三八二、複語尾の命令形
三八三、複語尾多数の連続		

第三十九章 音便

三八四、音便	三八五、音便の種類	三八六、「イ」の音便
三八七、「ウ」の音便	三八八、撥ゆる音便	三八九、音自體の鼻音化する音便
三九〇、次の音の感化による撥音便	三九一、奈行音の上にあるもの	三九二、麻行音の上にあるもの
三九三、「ン」を挿入せるもの	三九四、促むる音便	三九五、左行音の上なるもの
三九六、加行音の上なるもの	三九七、多行音の上なるもの	

第四十章 句論總説

三九八、句論	三九九、句論の範圍	四〇〇、連語
四〇一、文	四〇二、句	四〇三、句の定義
四〇四、句の二大別	四〇五、文の二大別	四〇六、句論の基礎と柱根
四〇七、喚體の句	四〇八、その二類	四〇九、希望の喚體

第四十一章 喚體の句

四一〇、その對象	四一一、感動の喚體	四一二、その對象
四一三、その句中の連體格	四一四、その成立	四一五、口語には喚體なし

第四十二章 述體の句

四一六、述體の句	四一七、その三別	四一八、説明體
四一九、説明體の述格	四二〇、同上の助詞にて終るもの	四二一、疑問體
四二二、疑問體の述格	四二三、係結	四二四、命令體
四二五、命令體の述格	四二六、述體を人稱より分つこと	

第四十三章 句の複雑なる構成

四二七、句の構成	四二八、多数の語より成る位格	四四八
四二九、多くの用言を以てする連體格及び準體言	四三〇、多くの語より成る述格	四五七
四三一、主格補格の二個以上並存すること	四三二、二個以上並び存する連體格	
四三三、副主格、副補格(副格)	四三四、同格語	
四三五、提示語	四三六、接續語	

第四十四章 句中に於ける語の配列

四三七、複語尾の位置	四三八、助詞の位置	四三九、賓格の位置
四四〇、連體格の位置	四四一、感動副詞を介する連體格	四四二、補格の位置
四四三、連體語、準體言の補格	四四四、程度の修飾格の位置	四四五、情態の修飾格の位置
四四六、主格と賓格との通常的位置	四四七、陳述の修飾格の位置	四四八、主格補格述格の特別の位置

四四九、修飾格の特別の位置
四五二、呼格の位置
四五〇、述格の下におく連體格
四五一、句の修飾格の位置

第四十五章 句中に於ける語法の相關……………四六八——四七五

四五三、語法の相關
四五六、第二人称の句の敬語
四五七、第三人称の句の敬語の第一種
四五八、同上の第二種
四五四、敬語の相關
四五五、第一人称の句の敬語

第四十六章 單文……………四七五——四八〇

四六一、單文
四六二、單文の體
四六三、説明體の用
四六四、疑問體の用
四六五、命令體の用
四六六、單文を以て條件をあらはすこと

第四十七章 複文概説……………四八一——四八六

四六七、複文
四七八、複文の三別
四七九、複文の用
四八〇、複文の體
四八一、複文の修飾格

第四十八章 重文……………四八七——四九四

四七三、重文の組織
四七五、「なり」の上句の述格なるとき
四七八、複語尾にての上句の述格
四八一、上句の述格に「て」を加ふること
四八三、下句の映體なるもの
四八四、重文の文體
四八五、重文の修飾格
四七四、形容存在詞動作存在詞を上句の述格とすること
四七六、口語の「で」にての上句の述格
四七七、「たり」の上句の述格たること
四七八、「ざり」「べかり」の場合
四八二、重文に於ける接續語
四八三、重文の修飾格

第四十九章 合文……………四九四——五〇一

四八七、合文の組織
四九〇、複雑なる合文
四九三、伴句の述格を導く修飾格
四九六、合文の句の配列
四八八、映體の伴句
四九一、伴句の末に加ふる係助詞
四九四、主句の修飾格
四八九、伴句と主句との狀態
四九二、伴句中の係助詞
四九五、合文に於ける呼格

第五十章 有屬文……………五〇一——五〇九

四九七、有屬文
五〇〇、準體句
五〇三、連體格に立つ準體句
五〇六、引用の語句の取扱
五〇九、附屬句、引用の語句の位置
四九八、附屬句
五〇一、陳述句
五〇四、修飾句
五〇七、多數の附屬句ある文
四九九、附屬句の種類
五〇二、連體句
五〇五、引用の語句
五〇八、複雑なる有屬文

第五十一章 語句の省略……………五〇九——一五四

五一〇、語句の省略
五一三、述格の省略
五一六、「の」の上の省略
五一七、「と」の上下における省略
五一八、複語尾「て」の上における省略
五一二、補格の省略
五一五、合文の主句の省略
五一八、複語尾「て」の上における省略

日本文法講義目次終

山田さんの文法はもう古い

山田さんの文法はもう古い
ふもいふもといふもいふも

形容動詞



日本文法講義

山田孝雄 著

第一章 總論

言語と文章

一 人の思想を聲音にてあらはせるものを言語といひ、之を文字にて書き綴れるを文章といふ。

凡そ言語といふものは思想を内容とし聲音を外形としたるものなり。この故にその思想のみの研究も聲音のみの研究も言語の研究には關聯する所甚だ密接なれど、しかも思想又は聲音は直に言語にあらず。この故に思想の研究及び聲音の研究の外に言語の研究の存すべきはおのづから明なりといふべし。言語の研究はかく思想の研究及び聲音の研究と同じものにあらずといへども、その間に密接なる關聯あるを忘るべからず。思想の研究には心理學、論理學あり、聲音の研究には生理學の一部、音響學、聲音學あり、言語の研究には言語學あり。

言語は聲音を以て外形とするものなれど、聲音は一時的にして永く之を有形的に保存すること困難なるを以てその聲音又は言語をば、特別の符號を以て記し留むる方法按出せられたり。この特別の符號を文字とい

ふ。ここに至りては言語の研究の一分派として文字の研究といふ一科生ず。この文字の研究は漢字の如き文字を使用する國語にありてはまた重要の一科なりといふべし。

二 言語は各國必しも同じからず。英吉利語、佛蘭西語、獨逸語、支那語等皆異なるものとす。國語とは國民が自國の言語を呼ぶ名稱にして、我等は日本語をさして國語といひ、従つて日本文をば國文と稱するなり。

さて言語といふものはその思想の發表せられたるものなる點に於いては世界中その趣を一にすといへど、これ社會的の產物なるが故に各國必ずしも換を一にせず。聲音の如きは種族的に發聲機關操縱の慣習を異にするが爲に各特色ある聲音とその組織體とを有し、その聲音を材料とする言語は又思想の運用法を異にするが故に、言語の構造及び運用法はまた種族によりて必ずしも一ならず。この故に國民又は民族によりてその用ゐる聲音又は言語に差異を生ず。これ即ち某々の國語と稱せらるるものなり。この差異の生ずる原因及びその他の詳細の事は言語學の範圍に屬するが故に今論するを要せず。かくて又文字も社會的のものなれば、國民又は民族によりて差違を生ず。

國語といふ名稱は國民が自國語をさす語なれば我等には日本語が國語なれども、支那人には支那語が國語にして、英吉利人には英語が國語なるなり。國民と國語との關係の親密なるとは英人は國語をば (Mother Tongue) 佛人は (Mère Langue) 獨逸人は (Mutter Sprache) と稱せり。共に「母語」委しくいへば「慈母のことば」の義なり。

三 言語と文章とは元來同じかるべきものなるに、國によりては、話に用ゐる

ものと、文章に用ゐるものと、多少法則の異なる場合あり。かかる時は主として話に用ゐる方の國語をば口語といひ、主として文章に用ゐる方の國語をば文語といふ。我國にては口語と文語とは稍區別あるなり。

言語といひ、文章といひ、元來同じかるべきものなれど、必ずしも然らず。抑も言語は聲音を以てその外形とするものなれど、之を記載するに文字の助をかる。然るに聲音はその形自由に變易せらるべき性質あれど、文字は固形的なり。されば、聲音のままの言語は時と共に變遷自在なりうべきに、一旦文字に記載すれば、ここに一の固形的形式的の言語を生ず。この聲音のままの言語を世に口語又は話語といひ、文字に記載せる言語をば文語といふ。元來文字はその約束を精細にせば、聲音の委曲を寫し得ざるにあらねどかくては極めて煩雜にして實用に適せず。この故に大體の範疇を定めて、多少の異同はそのいづれかに收めて之を一々區別し出すことなし。この故に文字に記載する以上嚴密にいへばすべて文語にして口語にあらず。世に言文一致といふことを主張する人あれど、極端なる一致は實用的には決して實現せらるべくもあらざるのみならず、又實際、實現したることなし。

次に口語の方は時につれて多少づつ變遷しつつ行くものなり。然るに文語として一定の形式を定むれば、この形式は固形的にして變遷すること能はず。この故に文語と口語とはおのづから、差異を生ず。一は流體の如く一は固體の如し。これを全然一致せしむるが如きことは理論上なまじうべきこととあらざると共に、事實上また爲しうるものにあらざるなり。

然れど、文語と口語との法格の甚しき差異は國民をして學習の困難に遭遇せしむ。この點に於いて昨今の

口語體の文
はなほ文語
なり

文語と口語
との差

現今の文語

言文一致又は口語體文の論は多少の利益ありとす。しかもこれ實に多少の便利に止まるものにして理論上は言文一致は存しうるものにあらず。要するにそれを百歩に止むるか、五十歩に近づかしむるかの差にすぎず。

さてわが國にては文語と口語とは法則の上に多少の差異あり。この差異は初學者の者をして學習に困難を覚えしむといふ論あり。その論の是非はここに論せず、とにかくにその差異あるは論なく、その文語の法則は社會の公準とする所なれば知らずばあるべからず。口語も亦實用上知らずばあるべからず。

さて現今文語と稱せらるるものの實體如何にといふに其のさす所殆ど一定せず。文語を以て古語の如くに説くものあり。然れども今日の文語はおのづから今の文語にして古代に未だ嘗てこのままのもの存せざりしなり。平安朝の語法によるといへども必ずしも然らず。されば現代の文語と目すべきものは大體書籍、雜誌等に於ける論説の如きもの、又所謂口語體以外の雜錄類又詔勅法令に用ゐらるる文章の如きものをさすと知るべし。これらの文章の法則は大體は平安朝の文法に則り、(用言の活用、助詞の如き)之に參ふるに漢籍訓讀の餘習を以てし、(豈、なんすれぞ、それ、然らんや等の語)更に近頃の外國譯語の感染と明治以來の新風潮とを加味したるものなれば、必ずしも古法に則るとはいふべからず。

さて又現代の口語と稱せらるるものの實體如何にといふに、大體に於いて東京語を標準とするものといふに止まりて明確にそれと指定すること難し。然れどもこの口語といひて、書籍雜誌等に載せられてあるものは多くは小説又は演説の文體に則れるものにしてこれ亦一種の文語といふべく、純粹の談話體と目せらるべきもの亦多からず。

されば、文語といふも口語といふもその法格の差は非常に大なるものにあらずして文法上にては用言の活用と助詞との大部門に差異を認むべきのみにして、その他個々の名詞副詞等の相違は文法上論すべき限にあらざるなり。

この故に余は文語と口語との二を別に説かずして必要に應じ二者を對照しつつ講述せむとす。

四 言語その者の本體又は現象につきて一般的に研究する學科を言語學といひ、特殊の一國の言語につきて研究する學科を國語學といひて、この二者また密接の關係ありといへども各範圍を異にして一を以て他に代ふること能はざるなり。

國語學は國語全般に亘りて研究するものなれば、その範圍また汎し。先その記載の方法の研究あり。これ文字及び、文章記載法の研究にして、所謂送假名法、假名遣法、その他習字、書法の研究皆之に屬す。次に聲音の研究あり。これは國語の聲音の要素及び、それ等にて言語を構成し、文句を構成する事項の研究即ち發音法朗讀法の如き皆之に屬す。次には文法學にして國語の構成及び運用の法則を研究するものなり。なほこの他に語彙の研究即ち語源及び各語の意義變遷發達等を研究する部門あり。

かく見來れば文法學の對象は文法にあるを知るべし。

五 國語を思想に應じて運用する法則を文法といひ、その文法を研究する學科を文法學といふ。

上の説明にて文法といふ概念は明なるが、なほ詳にいへば、こは一々の語につきて研究するにあらずして一般法則を研究するにあり。かくてその運用の根基はいづれにあるかといはば、これ實に思想に存す。即ち思想

國語學

文法と文法

を基として、その思想に適應すべく國語を運用する法則即ち文法たるなり。されど思想は文法にあらす、語を換へていへば、文法は思想の法その者にあらざるは明白なりといへども、思想なくして文法といふもの存すべからず。思想を離れて文法を講究すること能はざるなり。然れども思想即ち言語にあらざるが故に思想を研究して文法を研究し了せりといふべからず。

惟ふに言語は個人の思想を基礎とするが如くなれど、熟考すれば、この考の誤れるをさとるべし。小兒が語を覺ゆることを見ても、國語が民族によりて異なるを見てもその思想は個人自發のものにあらすして社會に發生したるものにしてその變遷發達の跡を見るに必ずしも自然科学的ならず、又論理的哲學的にあらすして實にその發達變遷は歴史的なり。これ言語が歴史のものにして論理的一邊のものにあらざるによりてなり。

されば、文法の背景となれる思想には個人心理學的の部分もあり、論理學的の部分もあり、民族的のものあり、又史的のものもありといふべきなり。これ文法の研究が一の獨立學科にして他の思想的學科と密接の關係を有しつつもそれらの一部にあらざる一面の證左ともいひつべし。

以上の如くなれば文法の研究には心理學論理學等の補助を受くること多大なれど、又それらの學科にも援助を與ふる學科なることを忘るべからず。

六 文法學はその研究の主點のおき所によりて二の大部門に分たる。語論と句論となり。即ち語を研究する部門と句を研究する部門となり。

一切の學問に通じて研究法に二大別あり。分析的研究と総合的研究となり。分析的研究の主とする所は對象の比較にあり。比較とは一致及び差異を確定する所以なり。総合的研究の主とする所は關係にあり。關係

とは相依り相俟つ状態なり。分析的研究に於いてはその對象の本性を發揮し得べし。然れども之を以て研究の目的達し了りたりとはいふべからざるなり。如何なる對象といへども分析のみにては未それらの關係を明瞭に認識し得ざるなり。ここに於いて分析の後には總合來らざるべからず。分析のみありて總合なき時はその研究散漫にして之を統一運用する所以を知らざるなり。しかも分析なくしては總合は起るべからざるなり。分析は總合に先たざるべからず、總合は分析の後には必來らざるべからず。この二のうち一を缺かば車の輪なきが如し。この分析的研究と総合的研究との二法は語論に於いても句論に於いても共に存すべきなり。しかも語論と句論とは又實に分析的研究と総合的研究との二大別より生じたる文法學の二大部門なり。

語論の主とする對象は單語なり。この故にこの部門に於いては、その分解せられたる單語を個々に比較してその差異一致の度を標準として分類彙集を企て、次にそれらの作用を論ぜざるべからず。これ即ちこの部門の主とする研究方法なり。

上の如くにして單語の本性は發揮せらるべしといへども、なほ思想發表の方法としてこの單語どもが如何に運用せらるるか委曲に至りては知るべからず。ここに於いてか句論の必要生ず。

句論に於いては語論に於いて分析的研究せられたる語を基礎として之を以て如何に思想をあらはすかを総合的に研究す。これ實に人間の思想と言語との交渉の状態を具體的に研究するものといふべきなり。かくて吾人は先語論を述べ次に句論に入るべし。

第二章 單語總說

七 語論は既に述べたる如く、語の性質及び用法につきて研究を試むる部門

なり。而之を更に語の性質を説く部門と語の運用を説く部門との二に大別すべし。

この語の運用を説く部門は従来の文法學に缺如せる所なり。さて語の性質論に入るにあたりて第一に顧みるべきところは一々の語即ち單語とは何かといふことなり。單語につきては

思想の發表に必要な言語が觀念の單位に分解せられたる結果なり。

といふを得べし。然れどもこれ未だ定義と目すべからず。從來諸の文法家の定義の如きは多くは「箇々の語」又は「片々の思考をあらはす語」などいふに止まりて、一も的確なる説明を下したるを見ず。概略には上の如くいふを得れど、なほ委しく定義を下さば次の如くならむ。

八 單語とは言語としては最早分つべからざる究竟的思想上の單位にして獨立して何等かの觀念を代表するものなり。

この定義につきてはなほ分解説明する必要あり。

第一 單位とは最早分解せられざる極限を示す。即ちなほその上に分解せらるる時はその物の本性作用を減却すべき點に來れる終極のものをさせり。

第二 單語は思想の單位をあらはす。しかもそれは必、言語といふ一の形に制せられたるものなるべし。「白し」といふ語は思想にては物體の光學的屬性觀念と人間精神の統覺作用とをあらはせり。この觀念と統覺作用とは心理的論理的にはば二の單位なり。然れどもそれは言語としては一なり。この故に二者は思想上の單位なることを得としても國語上單位なることを得ざるなり。

第三 思想にては一單位たりとも之が語としては兼りたるものなるときは單語と稱すべからず。例へば「梅の花」といへば思想上唯一の觀念なり。されど、語としては「梅」といふ單語と「の」といふ單語と「花」といふ單語とに分解せらるべきものなれば「梅の花」は單一の物にして隨つて單一の思想なれど言語としては單語にあらず。

この故に單語といふには思想上の單位と言語上の單位とが一致せる場合若くは思想が語の單位に制限せられたる場合に限るべきものなり。

以上は單語の分解的説明なり。次に之が總合的説明にうつらむ。

抑言語文章の目的は説話文章を組織するにあるものなれば、吾人の單語と稱するものも亦直ちにこの文の成分ならざるべからず。かく單語は文を組立つる直接の材料として相互間に相保つ關係を有し、たとひ觀念用法上の差はありとも文の構造材料として一箇體をなせるものならざるべからず。

單語の限界は一方は語根及び接辭との區別一方は單語の兼りとの區別を明にするによつてよく認めらるべし。

九 單語を更になほ小き部分に分ちて考ふることあり。しかるときはその小き部分を語根といふ。

語根は何等かの思想をあらはすには相違なけれども、文に對しては直接にその要素となるものにあらず。かく語根は單語内の一成分にして單語を理論上より分析したるものにして實地の運用上更にそれらの存在を認められざるものなり。即ち理論上抽象の結果その存在を認むるにすぎざるものなり。

一〇 接辭は單語にあらずしてしかも單語の附屬物たり。夫自身はいはば、

語根に似たるものにして、しかも既に成形せる單語に附屬してそれに何らかの意義を添へつゝなほ一の單語を構成す。

この接辭の接せる場合には接せられたる單語の意義資格に多少の變動を生ずることありといへども、之が單語たる點に於いては更に變ずることなし。これが單語と異なる處は單語は單語を助くることありとも、之は直接に文の組織の一分として助くるに接辭は語根の如く文の構造に直接に影響することなし。接辭と語根との異同は語根は單語の抽象的分析の結果あらはるものなれど、接辭は別に單語の副成分として存在するものなり。接辭は又單語のみならず、語根にも附屬して一の單語をなすことあれど、語根は一旦成形せる單語に附屬すること決してなし。

一一 單語と稱するものは既に述べし如く言語として最早分解すべからざる單位に至れるものをさすものなり。この故にたとひ思想にては單位と見らるるとも語としてはなほ分解せらるべき組織を有するものならば、單語と稱することなく之を單語の叢り、又は語の複合といひ、主として語の運用を説く部門にて論ずべき事項に屬す。

一二 單語の性質の研究に於いて便宜上諸多の單語につきて分類彙集の標準として立てたる範疇を品詞といふ。

品詞とは Part of Speech の譯語にして詞の品類の義なり。

單語の叢り

品詞

品詞は現今の文法家多くは次の十種とす。

名詞 代名詞 數詞 形容詞 動詞 助動詞

副詞 接續詞 感動詞 助詞

この名詞動詞等の名稱は(助詞を除く)もと西洋文典の範疇にして本邦に之を用ひたるは天保四年の語學新書(鶴峯戊申著)をはじめとす。然れどもその名目と説明とは必ずしも我が國語に適せざりしなり。明治時代に入りて小學日本文典(明治七年、田中義廉著)、日本文典(明治九年、中根淑著)等によりて略定まり、語法指南(明治二十二年、大槻文彦)落合小中村二氏の中等教育日本文典(明治二十三年)に至りて殆ど一定の姿をなせり。

元來品詞の区分は文法學者が便宜の爲に設けたる組織にして言語構造上絶対の區分にあらず。今日にても八品詞とする人あり、九品詞とする人あるが如きその一斑を見るべし。又その區分は漸次に進歩せしものにして文法學の起りし始めより今日の如く整備せるにはあらざるなり。

抑、今日の所謂八品詞(英文典等にていふ語)の範疇は遠く希臘にはじまれり。希臘にては Homer の文集研究の必要上文法學の基礎築かれたるものなるが、その文典上の用語の發明せられ、範圍の區別せられたるは「プラトン」、「アリストテレス」等の哲學者の手によりはじまり、ついで「ストア」學派の學者により文法學の進歩を促され遂に所謂八品詞の名目を生ずるに至れり。

この希臘語學はやくより羅馬に傳りて羅句語の研究を促し、終に羅句文典の完成をなさしめ今日の文典の基礎をすべたり。之を完成せしは實に「デオニウス、ウラツクス」(Dionysius Thrax)なり。「ウラツクス」は西曆紀元前二世紀の人、もと「アレキサンドリア」の學徒にして「アリスターカス」の門人なり。この人は

八品詞の由

じめてその希臘の八品詞を携へて羅馬に來りて一の文典を書けり。その八品詞とは「オノマ (ονομα) (名詞)」、「レーマ (λεμα) (動詞)」、「メトツヘ (μετρος) (分詞)」、「アルトロン (αυτορον) (冠詞)」、「アントヌマ (αντωνυμα) (代名詞)」、「プロテシス (προθεσις) (前置詞)」、「エピルレア (επιρρημα) (副詞)」、「メンデスモス (μενδεσμος) (接續詞) (これなり)。この八個は今日に至るまで用ゐられ、少許の修正の外殆どそのままなり。

「ツラツクス」の文典なりてより八個といふ數は品詞の區分に必要神祕なる數の如く思惟せられしが、それが實地に羅句語に適用せらるるに及び、多少の變化を來せり。即ち「メトツヘ」(分詞)は動詞に屬せしめられ、「アルトロン」(冠詞)は羅句語に之を缺くが故にその名稱の必要なし。ここに八個中二個の空位を生じければ、羅馬の學者は之を充さんとし、「オノマ」を「サブスタンチヴ」(名詞)と「アジエクチヴ」(形容詞)とに分ちてその一位を充したり。この區分は論理的には價值あれども印歐語の名詞と形容詞とは同一の變化に従ふものなれば、實用上必要なき分類なり。今一の空位は副詞中より「インタージエクシオン」(間投詞)を分ち之によりて填めたり。かくの如くにして今日の西洋文典に見ゆる八個の品詞は成立したるものなり。而して歐洲にては近世まで羅句語が雅言として標準語たりしものなれば、その八品詞は即ち文法の範疇の確定的なものと思せられて今日に至れるなり。

されば、今の文法學上に吾人が動すべからざるもの如く思惟する品詞の區分も決して絶對的のものにあらざるを知ると共に、そがいたく哲學の影響を被れるを見るべし。實際西洋文典には右の品詞以外に哲學的名目多く之が爲に無用の事を規定せりと思はるるものなきにあらず。かれの文法に倣ひて國文法を研究せむとするもの深く思をここに致さざるべからざるなり。

今日の八品詞又は九品詞論者は果してこれらの事實を十分に體認して後國語の品詞を定めしかといふに恐

本邦古來の分類

らくは然らずして漫に西洋文典にあるが故にあたりといふが如き弊あるものと思はるるなり。さて今日の品詞の名目にて西洋文典のと異なるものは一の助詞なり。これはかの前置詞のかはりに置ける名目にして從來助辭といひし辭といふ文字を他の例に合せて詞としたるまでのものなり。かの前置詞は我には全くなく、わが助詞といふものは彼には全くなし。即ち互にその空位を補ふものといひて可なり。この助詞には從來「て」をば「といひたるもの大略之に當れり。之をば後詞(中根淑)、後置詞(里見義)、關係詞(チャンペン)などいひたる人もあれど、助詞といへるが最も穩にして今人多く之を用ゐる。

單語の分類は本邦にても古來文法學上の異論の存する所にして今一々之を述ぶる迫を有せず。次にその重なるものを示すべし。

富士谷成章(あゆひ抄)

- 一 名(名詞)
- 二 裝(形容詞、動詞)
- 三 挿頭(代名詞、副詞、接續詞)
- 四 脚結(助動詞、助詞)

鈴木朗(言語四種論)

- 一 體の詞(名詞、代名詞)
- 二 てにをは
- 三 形状の詞(形容詞)
- 四 作用の詞(動詞)

富樫廣櫻(詞の玉橋)

横田直助等

- 一 言(名詞、代名詞)——體言
- 二 辭(助動詞、助詞)——助辭
- 三 詞(動詞、形容詞)——用言

これらの説は國語のすべてを網羅したる分類として富士谷氏以外のはすべて大なる缺陷あり。即ち鈴木氏の「てにをは」の如きは他の三者以外のすべてを網羅するものにあらずしてそれらの名目もそれらの歸屬する位置もなし。富樫氏のも亦いふまでもなし。

さてこれらの舊來の分類を主張する文法家は往々かくの如きはこれ本邦特有の分類にして外國人などの及ぶ處にあらずとす。いづくんぞ知らむ。かくの如きは西洋文典ことに羅旬語の文典に既にいひ古したる處なるをや。今余が有する Revised Latin Primer の品詞の條を見るに

- 1 Nouns (three kind) (體言)
- Substantives (名詞)
- Adjectives (形容詞)
- Pronouns (代名詞)
- 2 Verbs (動詞寧ろ用言に當る)
- 3 Particles (four kind) (小品詞寧ろ助辭といふべし)
- Adverbs (副詞)
- Prepositions (前置詞)

西洋にも三類あり

品詞分類の標準

Conjunctions (接續詞)
Interjections (間投詞)

とあり。即ち三類八品に分ちたるなり。之を以て考へ見るにかの體言、用言、助辭の分類の何等の本邦の詩とすに足る點なきにあらずや。されば、吾人も亦この三類八品の如くになしうるものなるを忘るべからず。以上の如く種々の分類をなしうるものなるが、然らば如何なる分類を最も適當とするかといふことは何人も問題とするに至るべし。この際に先、顧みるべきはその適否を検する標準なり。

一三 品詞分類の標準はその文法上の職能即ち單語相互の關係と文章構成上の作用關係とを主とし、之に對應する形式と意義と四者の相關状態にあり。すべて言語には意義あり。この故に意義の異同を標準として分類をなすを得べし。然れどもかかる分類はその分類する人の考へ様により如何様にもなり、一定の標準の存すべくもあらず。これ文法學の關係する範圍にあらず。この故に意義の研究は不必要といふにあざれど、文法上の分類の標準とすべきにはあざるなり。

語の形式の差異は確に語の區別を示す徴たることあり。然れども、單に語の形式のみを考へて分類するならば、其はまた單に機械的たるに止まり文法上無用の事たること多し。されば語の意義と形式とは全然無用といふにはあざれど、それらは文法上の職能といふ嚴密なる制限を加へざるべからず。

文法上の職能といふは種々の状態あれど、概括して語と語との相互の關係と文章構成上の作用關係との二に大別するをうるなり。語と語との關係とは一の語が他の語と形體上結合する場合とか、又は結合する場合に如何なる位置を占むるかの状態の意義と形式とにあらはるるをいふなり。文章構成上の作用關係とは或は

叙述をなすと叙述の主となるとかの如きをいふ。即、これらの作用関係が、その單語の意義と形式との上に如何なる關係を生じて對應するかといふなり。たとへば用言の活用の如きは形式の變化と共に意義と用法との上に變化を來すが如きこれその一例なり。

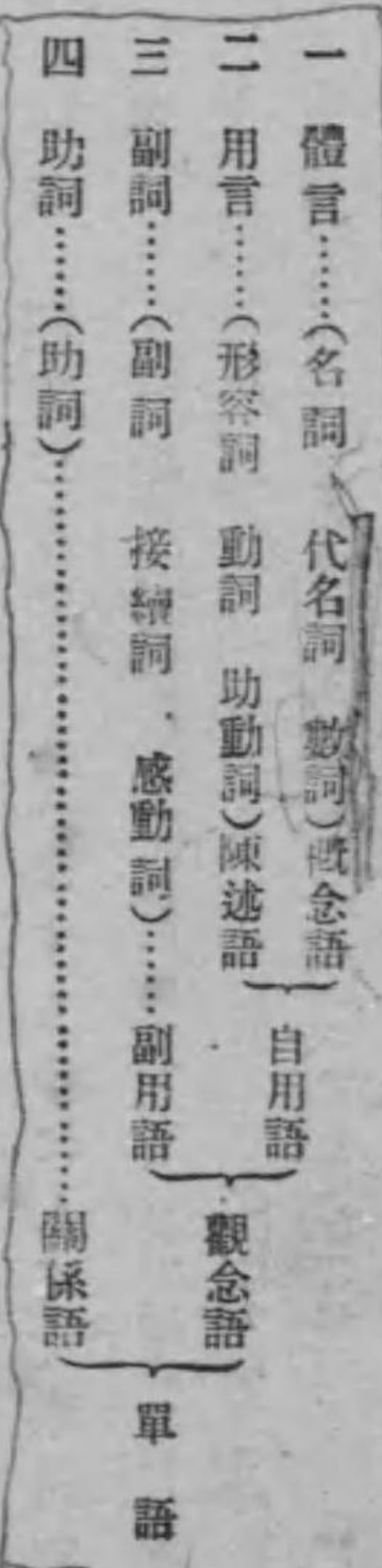
然らば、文法上の職能のみを主としてその他は問ふを要せずといふに然らず。然する時は、その論空理に馳せて國語の實際に適するか否かを顧みざる弊あり。かくの如き弊は既に西洋文典の直譯には多くあらはれたり。この故に、必ず之に對應する語の形式と意義との實地の状態を顧みざるべからず。

この故に文法上の職能と之に對應する意義と形式との變化如何といふに着眼し、之を標準として始めて品詞の分類の行はるべきものなり。

然れども、言語といふものは一定不動の死物にあらずして生々活動一日も止まざるものなれば、一の品詞より他の品詞に轉ざるもの少からず。又一の品詞と他の品詞との中間に位するが如きもの少からず。これらの事は歴史的の研究をなさば、直に知らるべきものなれば、今はただかかることの存するをいふに止まる。かくの如きものなれば、それらの分類をなす以上、多少の困難と矛盾とは免れ能はざるものと豫め覺悟せざるからず。

さて余が今講述せむとするにも亦一定の分類をとるべき必要あり。今先その點を略示すべし。

一四 先、國語の單語を大別して體言、用言、副詞、助詞の四類とす。その類別の手續次の如し。



上の四の分類は國語の單語の分類上、當然存する所の區別なり。その故を略説せむ。今先すべての單語をその文法上の職能とその獨立觀念を有するか否かの點とより見れば、これを二に大別することをうべし。一はあ、觀念をあらはす詞にして、他はそれらの觀念をあらはす詞の關係を示すものなり。この關係のみをあらはす極めて抽象的なる單語は即ち助詞なり。この關係語と觀念語との區別は單に意義形態より來るにあらずして實にその本性の文章構成上に及ぼす作用の異同より來れるものなり。

觀念語と名づくべき一類は所謂名詞、代名詞、數詞、形容詞、動詞、副詞、接續詞、感動詞なり。是皆時として一語にて一思想をあらはしうべく、又何等かの明瞭なる觀念を有す。即ち觀念語は或明瞭に指定せるものにして關係語はその觀念語に附隨してそれらの間の關係を示すものなり。

さてこの觀念語中において更に之を自用語と副用語とに大別す。この自用語、副用語とは元來用語なるを借りたるなり。自用語とは夫自身に獨立して用ゐられ、文を形成する骨子となり、陳述なるものにして所謂名詞、代名詞、形容詞、動詞にして體用二言之にあたる。副用語とは觀念をあらはることは自用語に同じけれど、直接に文の骨子となることなく、必ず他の語と結合して之に依りて存の第二次の成分となるものなり。この種の語はかの所謂副詞、接續詞、感動詞と稱せらるる類のもの國語にてこの一類と他の自用語との區別明なり。今之を假に副詞と稱す。

さて自用語中にありて之を異の方面より見れば、概念語、陳述語の二に大別す。文は實にその概念と陳述の勢力とを要す。ここに於いてその概念のみのあらはされたるものを今假に概念語とい、即ち體言にして名詞、代名詞、數詞等之に屬す。陳述の勢力の寓せられたる語之を假に陳述語とい、即ち用言にして所謂動詞、形容詞等なり。而してその體言と用言との差は意義の上のみならず、形、差あり。即ち語尾活用の有無これなり。この故にこの區別は形式上にも極めて明瞭なりとす。
 『今この概念語、陳述語、云々の名目は理論上一時の名目なればすて願はず、直に體言、用言等今それらの四者の文法上の職能を見るに關係語たる助詞は概念語たる他の三者のいづれにも附屬ものにしてしかも常にその下にありて上にあることなし。副詞は又その主たる語の上において下ることなし。體用二者の區別は既に上の如し。されば、この四者の區別は意義上、形式上、語の關係上構成上の作用關係に於いて當然區別あるべきものとす。然れど、この四大別にて是り、これ以上分類する要なきかといふに然らず。この四大別は必ず心得おくべきものなれど、これにて足れりとはいふべからず。即ちこれらを細別して更に名詞、動詞等の名目を用ゐるべきはその各條に至りて説くべし。』

第三章 體言概説

一五 體言は概念をあらはすものにして文章組立の骨子となるものなり。

體言といふこと本邦古來の分類法に於いても存し、甚だ緊要の名目なり。而して體言といふはある概念をあらはす語といふ義にして必ずしも活用せぬ語といふ義にあらざ。然れども、事實上活用せぬものなれば、或は初學者の爲にはしばらく活用せぬ語といひても可なるが如くなれども、活用せぬ語はすべて體言といふ

ことを得ざればいづこまでも體は本體又は主體の義に説くべし。これかへりて明瞭なればなり。

本邦に於いて語の性質を論ずるに用ゐし體用といふ語は恐らくは連歌に基づくものなるべし。連歌には語の體用といふ事を深く注意せり。これその作歌上甚だ必要なる事項なればなり。然れどもこの時の體用は今いふ體言用言といふものには一致せず。契沖に至りては體用といふことをいひて略今日の體言用言に似たる用法をなせり。然れども單語の分類に用ゐたるものにあらず。鈴木朗の言語四種論に用ゐたるは其のはじめなるべく、ここには明に余がいふ如き意に用ゐたり。然るに、明治時代に入りての文法家は皆體言といふは語尾の變化なき語をいふといふ如く單に形のみを説明に陥れり。この故にかの副詞、接續詞甚しきは感動詞までも體言といふべき勢に至れり。かくの如きは體言の意義を誤れるものにして沙汰の限りといふべし。

そもそも體といふ語は用に對する語にして用は作用、現象、などの義、體はその基づく實體をさすものにして支那の儒學特に宋學の盛に用ゐたる術語にして、その基づく所は佛敎にて體、相、用の三を相待的に用ゐしに如し。これらの體は英語にていふ Substance の義なり。單語分類上にては哲學にていふ如き嚴密の實體といふ程の意義はあらざれども、かの單に形のみにて語尾變化なき語といふはあたはざること勿論なり。

一六 體言は文法上の語形の變化を有せず、所謂格助詞に接して種々の關係を他の語に對してあらはすことを得べく、その中他との區別の主たる點は文の主位に立ちうるにあり。

文法上の語形の變化といへるは文法上の職能の差異に對應する語形の變化をいふ。體言にも用ゐる方により

格助詞

て音の變化なしといふべからず。「サケ」の「サカヤ」、「スゲ」の「スガハラ」、「ツキ」の「ツクヨ」となるが如きみなこれなり。されど、これらは文法上の職能には「格」なし。この故に體言には文法上の語形の變化なしとするなり。

格助詞といふは、「ガ」「ノ」「ヲ」「ニ」「ヨリ」「ヘ」又口語にては「デ」等なり。これらは體言に附屬して他の體言用言等に對する關係を明にす。この關係を格とは名づくるなり。而この格助詞の接するは體言の特性にして如何なる語もこれらに接する時は體言の資格を興へられたるなり。

既に述べたる如く體言は概念をあらはすものなれば、吾人の意識に於いて一の簡體として認識せらるるものは之を單語にてあらはす時皆體言の資格を有す。されば用言にても副詞にても、助詞にても之を吾人の思想の對象とする場合には直に體言の資格を具す。たとへば、「花咲く」の「咲く」は動詞なり」といふ時「咲く」は體言の取扱をうく。又「梅の花」といふ場合の「の」は格助詞なり」といふ時「の」は體言の取扱をうく。かく如く、何にても體言の取扱をうくるをうるなり。これは他の用言副詞助詞には見るべからざる現象なり。さてかく體言の取扱を受くることを外形にて認むることを得るは格助詞の附屬によるなり。

さてその文法上の職能上より見て體言の資格の最も重要な點は文の主格に立ちうる點にあり。體言の用法は種々ありて、その用法によりて用言にも副詞にも似たる用法をなしうれど、この主格に立つことのみは體言のみの特性にして用言副詞には存せぬものなり。

一七 體言は先これを名詞と形式體言とに分ち、形式體言は更に之を代名詞と數詞とに分つ

體言の概念を示すものなるは既にいひたる所なるが、その語が、具體的なる概念を直接にあらはすか、

體言の分類

況なる形式的概念を間接にあらはすかによつて先二に大別す。名詞は即ち實質體言ともいふべくある一定の實質ある概念を言語にあらはしたるものなり。

形式體言とはその意義に對しての一定の實在は存在せず、吾人の思想によりて或は甲をも乙をも丙をも丁をも思惟しうる一の形式を抽象的に發表したるものなり。これを代名詞と數詞との二に分つ。

代名詞は主體的のものにして說話者自身の主觀と特別の關係を生じたる場合に於いて客觀その者を區別して指示するものなり。而してその實質は說話者の觀察の場合によりて任意に補填せらるべきものなり。

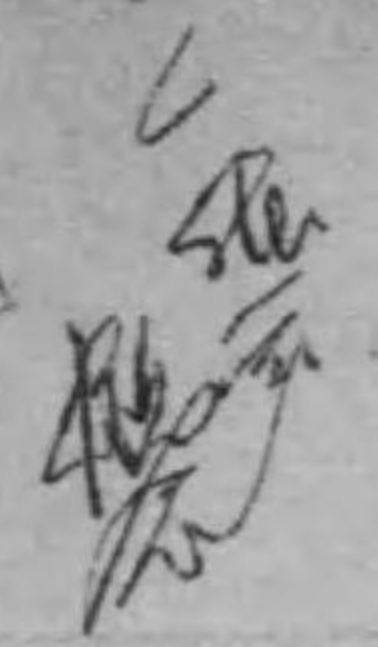
數詞は専ら客觀その者の存在の形式即ち事物存在の形式を計算したる結果をあらはす一の形式體言なり。これもそのさす實質は存在するものにあらずして如何なるものにも應用せらるることは形式體言たる一般の通性を有す。

第四章 名詞

一八 名詞とは名目の詞といふ義にして事物の概念を直接に代表せる體言なり。

名詞をば名をあらはすと説明すること往々行はるゝと誤解を招き易し。即ち名又は名稱といふは國語にては多くは地名人名物名など所謂固有名詞に限らるる傾あり。されば、名目の詞といひたる方よかるべし。夫に「體言なり」といへるは特に意を用ひたるものにして之を以て體言中の一類なるを示すと共に「梅の花」、「豊臣秀吉」などいふ連語にてなれる名稱との區別を明瞭にせむことを期せるなり。

名詞



一九△國語の名詞には種類を分つべき文法上の必要なし。

國語の名詞には地名人名等を特別に書記すべき規定なく又英語などに於ける冠詞といふものなし。従つて名詞を普通、固有、集合、物質、抽象、などの各種類に區別する必要なしとす。英語などの名詞には固有、普通、集合、物質、抽象等の區別をなす。これらの語法にては固有名詞(即ち人名地名及び特殊の物名)は運例詞をとり、之を書記する時は必須を花文字 Capital Letter にて記すべき法なり。普通名詞及び集合名詞は冠詞を附するを通則とし、しかも、その意義によりて如何なる冠詞を附すべきかのそれの法則あり。而して物質名詞抽象名詞は通常冠詞を附せざるものとせり。さて又名詞はその種類によりて性數の上に一定の規則あるも少からず。この故にかれらの文法にてはかくの如く區別して研究することは文法上必要なることなり。されど、我國語には一切かくの如きことなし、故にかくの如き分類は文法上全く要なきことなり。以上は西洋文典に模倣せる分類の非なることをいへるものなるが、その他にも或は有形名詞と無形名詞との別、具體名詞と抽象名詞との別、又居名詞、略名詞、單名詞、合名詞、轉成名詞など種々の名稱を用ゐて區別をなすもの往々存するを見る。然れどもこれらは意義の研究又は語の成立の研究などには必要あるか知らずといへども文法上には何等の必要なものなれば、畢竟徒勞に屬すといふべきなり。

性數の別を
なす要なし

二〇△國語の名詞には文法上の性數の區別を爲す必要なし。

西洋の文法にてはすべての名詞を性の區別にあてはめて、以て文法上の繁雜なる規定をなせり。即ち有生物は勿論、山川草木土石よりはじめて天地の現象、無形の人事及び抽象的概念に至るまで男女の兩性若くはなほその中間の性を與へて之を區別せり。而してその男女兩性の區別の如きは常識より見て頗不合理のもの少からず。たとへば、英語にて、

太陽 sun 死 death 戦争 war は男性
月 moon 生 spring 平和 peace は女性
なるが如きこれなり。さて又一方獨逸語を顧みれば

太陽 die sonne は女性
月 der mond は男性

なり。かく英語と獨逸語と性の反對なるものあるのみならず、獨逸語にて一二例をあぐれば、同じ女といふ語にして

die Frau 女、婦 女性
das Weib 女、妻、カカア 中性
der Mensch 男性
なるが如きあり。又殆ど、同様と思はるる無生物に

der Tisch 卓 男性
die Thür 戸 女性
das Fenster 窓 中性

の如き區別あるが如き、自然の状態と文法上の性の區別とは大體一致する所あるが如くにして又矛盾する所甚多し。而してその性の區別をなせる文法上の必要は奈邊にありやと考ふるには少くとも實に代名詞と關係を有する者なり。即ち男性の名詞は男性の代名詞にて代表せしめ女性名詞は女性の代名詞にて代表せしめ、

中性の名詞は中性の代名詞にて代表せしめざれば、文法上破格となる。この故にかれらの名詞の性の區別はかれらの文法にては必要なる一事件にして漫然と區分するものにあらず。なほいはば、英語などには名詞にいふ性の區別は殆ど、意義上に止まれど、獨逸語などには語形の上にも多少關係あるのみならず、代名詞は勿論冠詞、形容詞にも相當するものを用ひて語形の變化をなす規定あるなり。なほいはば英語、獨逸、羅旬、希臘の諸語は男、女、中の三性を區別すれど、佛蘭西語、丁抹、那威等の語は二性に區別す。その性の區別の甚しきは亞弗利加のバンツ語にして實に十二以上の性を區別すといへり。されば、性の區別の有無多少は國語の文野には何の關係もなきことなり。

わが國語の名詞にても性の區別をあらはさむとせば、性に關する名詞を上冠せしめて熟語をなすを要す。たとへば、

をうし　めまつ　をんどり　めんどり

などの如し。而、又別に名詞自身が性の一方をあらはせるもあり。

ちち　はは　あに　あね　夫婦

などの如し。されど、これらは性に關する名詞にして名詞の文法上の性にあらず。

世には往々上例の如きを以て名詞の性なりといふものあれど、これらは性に關する名詞にして名詞の性にあらず。この性に關する名詞と名詞の性といふとの區別はたとへば、缺乏の感情と感情の缺乏との區別の如く思想上明に區別せらるべきものなるに從來の文法家往々かくの如き略易き區別を混同して上掲の如きを名詞の性として説きて得々たるものあり。然れども、これが、冠詞にも形容詞にも代名詞にも其他文法上一切何の必要もなきに區別を立てたりとて何程の利益あるべきか。即ちこれ文法學の範圍外の事に屬す。

國語の名詞には文法上の数の區別なし。この故に特に多數なるを示さむとせば、疊語となし、若くは多數をあらはす接辭を添へざるべからず。

世の國文法家又名詞の數といふものを説けり。これ亦英文法心酔の餘弊なり。英文法にては單に名詞が多數をあらはすか單數をあらはすかを區別するに止まらずして實に代名詞及動詞と關係あるものなり。即單數名詞は單數代名詞にて代表せしめ、これを主とする述語は動詞の單數形を用ひ、複數名詞は複數代名詞にて代表せしめ、これを主とする述語は動詞の複數形を用ひる規定なり。この故に文法上これ亦必要なる事件の一なりとす。然れども、この名詞の數といふものは古來單數複數の二に止まれりやといふに然らず、サンスクリット及び古代の希臘語には兩數(Dual)といふもありて、單兩複の三數に分てり。これ亦文法上それの規定あるなり。わが國文法にはこれらの事全くなし。故に之を區別するはただ語の成立及び、意義の區別によるのみにして文法上何等の必要なきなり。これららの事は文法上徒勞に屬し、漫に子弟を苦むるに止まれり。

二一 國語の名詞には稱格を形式にあらはして區別することなし。然れども、敬語にありては稱格に關係するもの少からず。

稱格とは西洋文典の Person の譯語にして之を分ちて第一人稱 First Person 第二人稱 second Person 第三人稱 third Person の三とす。第一人稱は話者自身をさし、第二人稱は對者をさし、第三人稱は話題に上れる一切の事物をさす。この第三人稱に至りては從來の國文法家甚しき誤をなせり。その委しき事は代名詞の條に至りて説くべきが、ここには名詞に關して必要なる點のみを論ずべし。

さてこの稱格といふものは言語ある以上は必ず存すべき事項にしてこの國語にありてかの國語、

いふべき性質のものにあらず。たとへは人名の如きも、山田といふものが、手紙をさし出して自署すれ第一人称なり、他より山田に宛てたる時宛名の山田は第二人称なり、又他の手紙中に山田の事を述る場合には第三人称なり。この故に名詞にも稱格あるは明白の事なり。然るに従來の文法家之を説かさりしは如何。これ文法上さまで必要なしと認めたるによるか、若くは文法上の區別をなす由なしと認めたるによるものなるべし。然れども、談話演説書簡等には常にこの區別をなす必要ありて、世人は文法學の教を待たずして明に區別し來れるなり。

さて又西洋文法上の所謂稱格は名詞以外、代名詞、動詞等にも一致すべき文法上の必要ありて之が研究は又甚必要なこととせられたり。わが動詞には稱格によりて語形の變化あることなきが如くなるによりてこの點より見て必要なきが如く見ゆ。然るにここに従來の文法研究に於いて殆ど棄擲せられたる如くに見えてしかも稱格上の問題として國語獨特の現象あり。敬語これなり。

二二 敬語は稱格に關聯するものにして之を敬稱と謙稱との二に大別す。
二三 謙稱とは第一人稱に立てる者が自己をさし、又は自己に附屬連關するものをさして他に對して謙遜する意をあらはす語なり。

從來この謙稱を文法書に説けるもの二三なきにあらずといへども、その説く所ただ意義のみに止まりて文法上の位置を指定するものを見ざりき。余は種々之を研究したる結果その第一人稱及び第一人稱の主格が使用する語に限るものなるを明にするを得たり。今この種に屬する語の例を少しくあげべし。
自己をさすもの

生 拙生 愚生 小生 野生 迂生
愚 拙者 小弟 小妹 下名 不肖

以上の如きものは従來代名詞と稱せられたるものなり。然れども、之を名詞といひて何等の差支なし。されども代名詞と主張する人はそれにてよかるべし

己が身内をさして

愚父 愚母 愚兄 愚弟 愚妻 やど 愚息
おやち 拙母 舍兄 舍弟 荆妻 豚兒 せがれ

己が居る土地をさして

弊國 弊地 弊郷 弊村 弊所
弊邦 拙地 弊邑

己が住居等につきて

弊宅 弊家 弊居 弊園 弊店 弊舗
拙宅 拙家 弊舍 拙店 弊社
茅屋

己が手紙につきて

寸書 寸簡 愚札
寸楮 寸札 愚翰

第一人称の敬語
第二人称の敬語
第三人称の敬語
謙稱の二大別

敬語の二大別

己が筆蹟につきて

愚筆 拙筆

己が製作につきて

拙歌 拙吟

己が心につきて

寸懷 鄙懷

微衷 愚衷

微志 愚見

己より人に贈る物につきて

粗膳 粗飯

粗膳 粗飯

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 粗飯

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

薄膳 薄儀

粗葉 粗景

粗茶 粗品

敬稱の二大別 對稱の敬稱

己が筆蹟につきて
愚筆 拙筆
己が製作につきて
拙歌 拙吟
己が心につきて
寸懷 鄙懷 微意 鄙見 愚說
微衷 愚衷 微志 愚見 鄙說
己より人に贈る物につきて
粗膳 粗飯 粗茶 粗品 薄膳 薄儀 不儀
薄膳 粗飯 粗葉 粗景 寸志

二四 敬稱とは對者又は第三者に關する者をさして尊敬の意をあらはすものにして更に之を對稱の敬稱と一般の敬稱との二に大別す。
二五 對稱の敬稱とは第二人稱に立てる者をさし、又その第二人稱者に附屬連關するものをさす時に尊敬する意をあらはす語なり。

從來謙語と敬語との區別をなせるものもその狹義の敬語中に更に區別すべきを唱へたるもの殆どなく況んやそれが文法上の位置を説けるもの全くなし。ここに對稱の敬稱といへるものは第二人稱をさし、又は第二人稱者に對してそれに附屬關聯するものをさす場合に限るものなれば、一般の敬稱と別にするべきものなるは明なり。

對者をさすもの
貴兄 貴所 貴殿 貴君 貴女 貴官 貴僧 貴下
尊兄 貴邊 尊公 尊君 尊臺
諸賢 諸君 諸彦 諸子 方方

對者の身内をさして
尊父 北堂 尊兄 令妹 令弟 令閨 令息
尊大人 令兄 令姉 令夫人 賢息
令娘 令婿 令孫

對者の居る土地をさして
貴國 貴地 貴郷 貴所
貴郡 錦地 貴村

對者の住居等につきて

貴家 貴宅 貴館 貴店 貴社 貴園

尊家 尊宅 貴邸

對者の手紙につきて

貴札 貴翰 貴墨 貴書 采箋

尊札 尊翰 芳墨 尊書 花牘

對者の製作につきて

玉詠 玉韻 芳吟 玉稿 高作 高著

芳詠 芳韻 芳情 貴著

對者の身につきて

尊體 尊顏 尊容

對者の姓名につきて

尊姓 尊名 芳名

對者の名聲につきて

高名 芳聲 雷名

對者の心につきて

尊慮 尊意 尊見

貴慮 貴意 貴志 貴見 貴説

一般の敬稱

高慮 高意 高見 高説
芳慮 芳意 芳志 芳情
對稱の敬稱は對者に關してのみ用ゐるものにして一般の敬稱には流用せぬものなり。この故にこの區別は用法上極めて必要なりとす。

二六 一般の敬稱は主として第三人稱に用ゐらるるものにして場合によりては對者の敬稱に流用せらるることあるものなり。

この一般の敬稱語につきては從來の文法書等に説けるうち、上の謙稱及び對稱の敬稱以外のすべての屬するものにして今一々例をあぐる必要を見ず。なほこの敬語中には尊敬といふよりは上品又は丁寧にいふを主とするものもあり。

この敬稱と對稱の敬稱との區別はその名詞の用法上の區別に於いて必要なるが、之を一括して敬稱とするなり。この一括したる敬稱は動詞の敬語と用法上の一致を要するものなれば、文法上これ亦重要なことを忘るべからず。詳細は句論の條に至りて説くべし。

二七 國語の名詞には文語と口語とによりて用ゐる單語に差あることあれど文法上何等の差なきものなりとす。

第五章 代名詞

二八 代名詞とは名目をいふ代りに用ゐる詞の義にして事物をさすに用ゐる

文語口語文法上の差別なし

代名詞の特徴

敬稱

敬稱

三〇

る體言なり。

代名詞の定義は注意を要す。注意せざるときは名詞も亦事物をさしてその代りに用ゐるにあらざるかの疑を起さしむ。これその説明の不可なるに基づく。この故に先その名目をさすときはその詞は名詞なれどもその名目をいふ代りに用ゐるものは代名詞なるを注意するを要す。即名目の明なる場合にも明ならぬ場合にもいふことをうるものなり。

元來代名詞といふ語は英語 pronoun の譯語にして pronoun は羅句語の pronomen(for name)より出でたるものなりといふ。その語の義は「名目の代り」といふにあり。從來名詞の代りなりとやうにいひたれど、さにあらず。名詞は名目として (as name) 用ゐられ、代名詞は名目の代りに (for name) 用ゐられ、兩者の契合點は名目にありて代名詞は名詞の代にあらず。この故に上にいへる如く、名の明ならぬものにも用ゐらるるなり。

代名詞の性質は既に前の一七節に述べたる如く主觀的のものにしてそのさす實體は說話者の觀察點の置き所によりて任意に補填せらるべきものなり。而して代名詞の代名詞としての特徴即ち名詞と異なる點は、これが、ただ概念たるに止まらずしてその内容が主觀によりて如何様にも變更せらるべき點にあり。この作用は即ち「さす」といふ語にて表はされてあり。たとへば甲といふ特定の人、そのさし方によりて第一人稱ともなり、第二人稱ともなり、第三人稱ともなるなり。又第一人稱第二人稱には何人がなりても差別なく、第三人稱には人、事物、場所、方向を種々にさし示すことをうべし。この「さす」といふ作用即心の働きによりて種々のものをさしうる點は明に普通の名詞と區別せらるべき特徴なり。これ本節に「さす」といふ語を用ゐて説明したる所以なり。この故に代名詞にありてはそのさせる物につきて考ふるよりもそのさし方如何と

さすこと

代名詞の二大別

反射指示

いふことを考ふるを以て研究上の主眼點とす。この事は前に主觀的なりといひし所以にして、又下の數詞と比較する時にいよく明なるべし。

二九 國語の代名詞は其の指示の性質によりて二類に分つべし。一は、**反射指示**、一は**稱格指示**なり。

前節に述べたる如くなれば、代名詞の類別につきても主としてさし方如何といふことを以て主點とせざるべからず。この點よりして先づ之を上二類に分つ必要を見る。

三〇 反射指示とは說話者の意向を離れて實體其の者をさすなり。即實體その者を**絶對的に指示するものにして多くは一旦あらはれたる體言につきて其の本體をさすに用ゐらる。**

この反射指示に屬するものは「おのれ」の唯一語あるのみ。この「おのれ」といふ語は稱格に關係せぬものなるが故に第一者にて第二者にて第三者にてそれが指示として立ちうべく隨つてその指示せる實體は必ずその處に明に存在すべき筈のものなり。之を反射といふは實體その者の本體を射光的に特示するが故に吾人と其の者との思想上の關係は恰も物影の反射するが如き性質を有するを以てなり。

この「おのれ」に似たるものに「みづから」といふ語あり。こはまき指示の代名詞と混同して用ゐらるるが、そは轉用にして本來は副詞たるなり。しかして其の類似たるを以て「おのれ」に混同して考へらるれども否なり。この詞は「ロヅから」「手づから」などと同じ構成による語にして下なる用言を支配す、「おのれ」の上なる體言をさせるとは意義性質全く異なり。或は又「みづから」と意義の類似あるよりして「おのれ」を



副詞の類と誤認せられたる事もあれど、體言たる性質を有するは明なり。

紅葉せぬときはの山に住む鹿はおのれなきてや秋をしるらむ。(後撰集)

かくて又「おのれ」は説話者自體をもさすが故に自稱の代名詞に轉用せらるること多く、口語にては専ら稱格に轉用せられたるものみの如く思はる。なほ轉用の事は用法の條に説くべし。

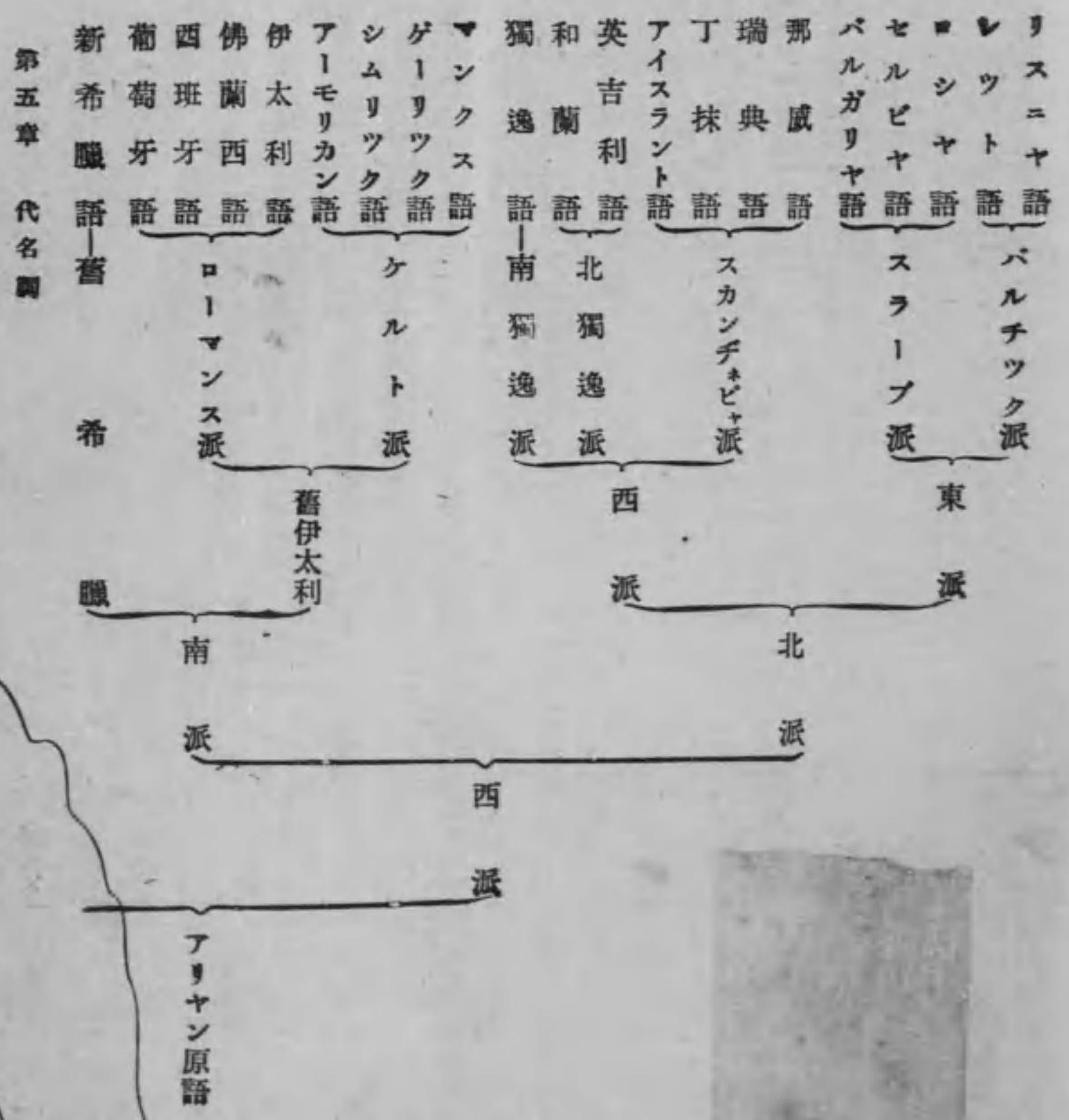
三二 稱格指示とは説話者の意向によりて區別せられたる指示の方法をいふ。

稱格の事は既に二節に略説せり。この指示に屬するものは上の「おのれ」以外の代名詞一切なり。即ち「われ」「汝」「これ」「それ」「かれ」「たれ」「いづれ」の如き皆稱格指示たるなり。

三三 國語の代名詞には上の二種類のみありて物主(又は所有)關係、疑問、形容などの區別なし。

英語の代名詞には人稱代名詞、物主代名詞、關係代名詞、疑問代名詞などの區別をなすによりて、國語の文法にても之に準じて分類を企つるものなきにあらず。人稱代名詞の事は次にいふべし。物主代名詞と形容代名詞とは國語にては「の」「が」等の助詞にて示さるる連體格の用法にすぎず。疑問代名詞といふも下にいふ如く不定稱の代名詞の一の用法にすぎずして代名詞の特別の種類にあらず。

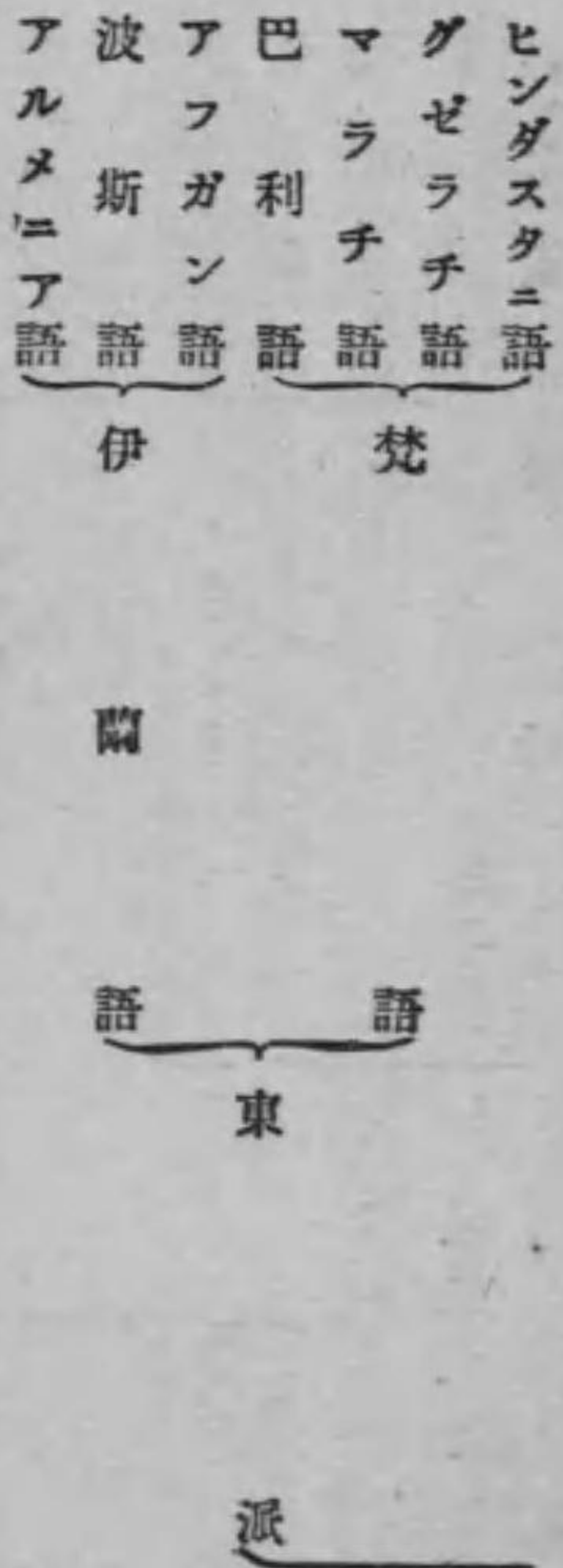
關係代名詞と稱するものは國語には全くなきものにして關係代名詞の有無は即世にいふ印歐語族とウラル、アルタイ語族との差異の一大要點とせるものなりとす。茲に序を以てこの二大語族の事を略説すべし。印歐語族(Indo-europian Group)とは大略左の如き系統のものをいふ。



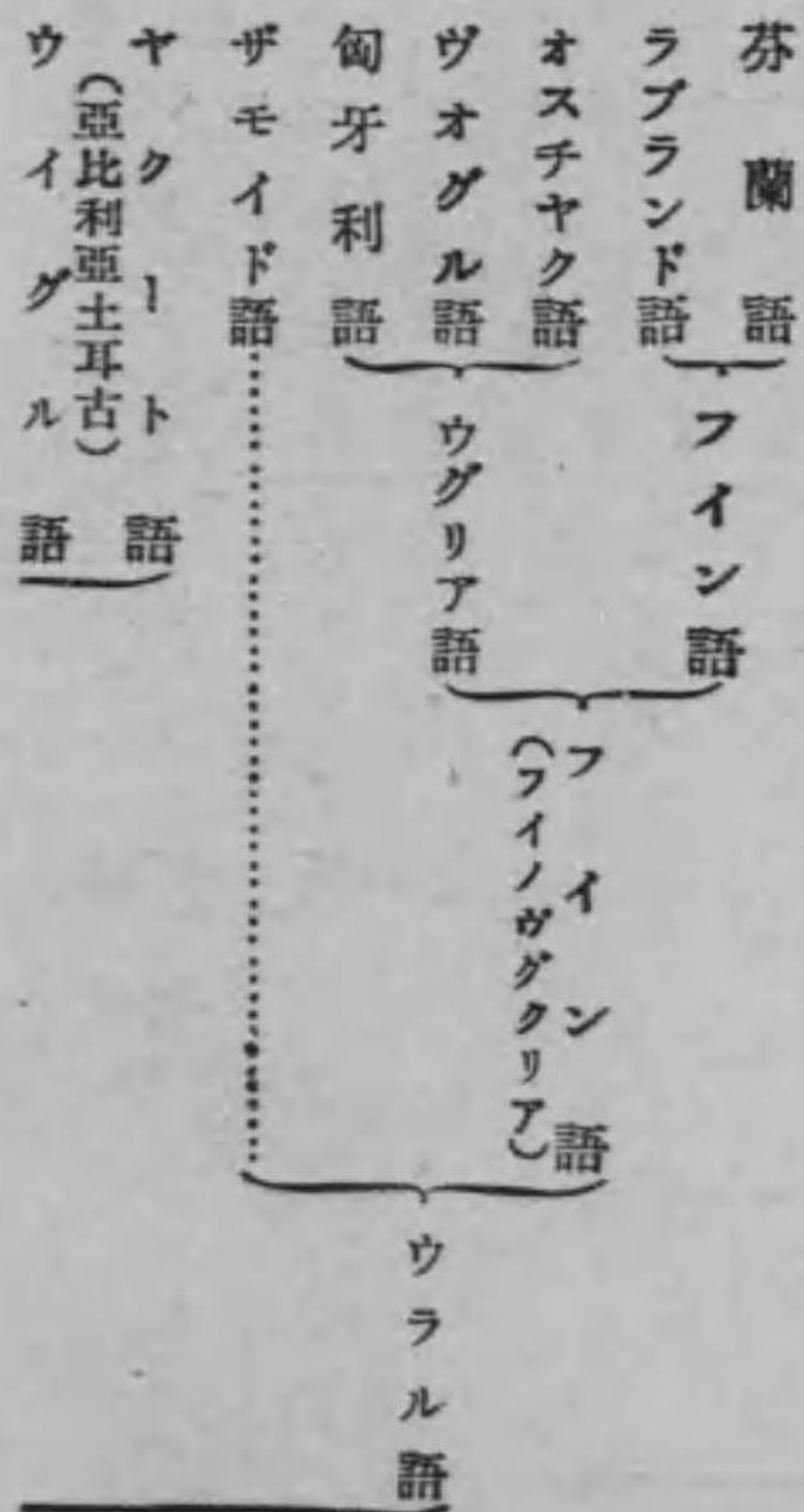
第五章 代名詞

物主關係の類別なし

稱格指示



ウラル、アルタイ語族 (Ural-Altaic group) はウラル山アルタイ山脈地方の地に行はるる語族といふ義にして、大別してウラル語族、アルタイ語族の二とし、又一括してチュラニアン語族 (Turanian) ともいふ。この語族は大略共通の特質あるを以て一類とせられたれど實は未儼然たる系統を有せるものにあらず。されど大略を次にかかぐ。



日本語のうちに琉球語は入る。琉球語は日本語の古代の方言といひて可なり。朝鮮語は日本語と同義なり。

以上アルタイ語族の分類は「グルンツェル」の分類によりて、少しく略せるなり。

- さてウラルアルタイ語族の特質として従来言語学者のあぐるものは次の數項なり。
- 一、子音組織に於いて清音ははじめに發達して濁音がのちに發達したること。
 - 二、文法上の形式は屈折を以て示すことなく、大抵語尾を以て示すこと。
 - 三、文章に於いて主語第一に來り、述語最後に至り、限定詞は被限定詞の前にあること。
 - 四、語根は決して變化することなく、形式上變化するものは語根に附したる形式なること。

Handwritten notes in Japanese at the bottom of the page, including the name '松本 清次郎' (Matsumoto Seijiro) and other illegible characters.

性数の區別なし

五、關係代名詞の存在せぬこと。
右に示せるところによりて關係代名詞の國語に存せぬことは偶然にあらざるをさとるべし。

三三 國語の代名詞には性数の區別なし。若多數をあらはさむとせば疊語にてあらはすか、若くは接尾辭を添へざるべからず。

疊語にて多數をあらはせるものは

われわれ これこれ なになに たれたれ

接尾辭「ら」「ども」を添へたるものは

われら 汝ら 彼れら これら それら たれども

英語の代名詞には名詞の如く性数等の變形あり。而その區別は名詞に於けるものよりも一層緻密なりとす。然れども、わが代名詞にはさることなし。たゞ多數をあらはす方法あるのみ。この方法とても名詞に於ける如くに疊語にてあらはすか接尾辭を加ふるかの二方法よりなきものなり。而、普通の形は單數にもあらず複數にもあらずして、いづれをもあらはせるものなりとす。

三四 稱格指示の代名詞はその稱格によりて第一人稱、第二人稱、第三人稱の三種に分つ。

第一人稱は又自稱といふ、「われ」「余」の類なり。第二人稱は又對稱といふ、「汝」「君」の如きこれなり。第三人稱は又他稱といふ。これには「彼」「誰」の如く專人をさすに用ゐるものあり。又「これ」「それ」の如く人にも事物にてもいづれをもさすをうるものあり。自稱と對稱とは人若くは人に擬せられたるものに限れども、

稱格指示の分類

他稱は人にも事物にても場所にてもさしうるものなり。

代名詞を分類して自稱、對稱、他稱といふことは今は殆ど全般に通じて用ゐらる。されどそのさす所は少しく疑を挿むべき餘地あり。先この三別を人へのみ用ゐることこれなり。この區別は西洋文典の直譯より來れるものなるが、之を轉用して國語を説明せむとせし時に誤解ありて永く流弊を後に殘せるなり。この弊を殘しし原因は *Person* を人稱と譯するによりて專ら人をさすと誤解せる點にあり。先、第一人稱は話者自身をさし、第二人稱は説話の對者をさし、第三人稱は話題に上れる人をさすとせる、この第三人稱の説明に於いて誤れるなり。第一人稱、第二人稱は必ず人なるべきことは自明の事にして、若第二人稱に人ならぬものを置くときは、これ吾人の對話を聽受するに足るものと認めたるもの即ち人格を擬し與へたるものに限るべきなり。然るに、第三人稱は人に限らず何れにても話題に上るものすべてをさすをうべきなり。今英語の例にていはゞ第三人稱の代名詞には次の如き種類を含めり。(單數主格のみをあげ)

He (男性 單數 主格)

she (女性 單數 主格)

It (中性 單數 主格)

而して性に三性あり、格に三格あり、數に單複の二あり、頗る複雑なるものなり。今、之をふと見たるのみにては何等の事なきが如しといへどもこの第三人稱に性の區別ある所以は(第一人稱及第二人稱には性の區別なし)これ即ちあらゆる名詞を代表する所以を示すものなり。即ち西洋の文法にては既に述べたる如くすべての名詞を性の區別にあてはめて以て文法上の繁雜なる規定をなせり。第三人稱はこれらすべてを代表するものにして男性の名詞は男性の代名詞にて代表し、女性の名詞は女性の代名詞にて代表し、中性の名詞は

中性の代名詞にて代表せしむるが故にかく三性を區別する必要あるなり。而かくの如く有象無象あらゆるものに性の區別をあたふるが故にこれらのものをも Person 即人稱と稱するに於いて少しも差支なく、寧、かく稱せざるべからざる必要あるなり。しかるに譯語の面のみを辿る日本文法家は、その Person 又は人稱といふ字面にのみ心を奪はれて第三人稱は彼、誰の二なりなどいふに至りては噴飯の極といふべし。さて余が説明にては自稱對稱は人又は人に擬せられたるものに限れど、他稱は話題に上れるものならば、人、事物、有情、非情、有象、無象すべてをさすものとせり。これかへりて西洋文典の真相に近づけるものなりとす

さてかく「彼」「誰」を人代名詞とする人は「これ」「それ」「あれ」「いづれ」などをば指示代名詞とせり。抑も指示代名詞とは英語の Demonstrative pronoun の譯語に用ひしを國語にもありとして用ひたるなり。この英語の指示代名詞とは

this, that, these, those.

等の語にして又形容代名詞 adjective pronoun とよばれ、人によりては形容詞のうちにて説明せるものなり。これはかの物主代名詞と同じくかれのはその形と用法との上より一類を立つべき必要あるけれどもわれにありては「の」「が」にて示せる連體格の用法にあらはるる一の現象にすぎず。日本文法家の人代名詞の不合理なること既に述べたる如くなれば、「これ」「それ」等を指示代名詞とするの不都合なることも亦明なり。くれぐれも西洋文典の範疇を借用せむにはその真相を十分に究めての後にすべきことなり。

三五 第三人稱即ち他稱の代名詞はそのさす事柄の定まれる定まらざることによりて定稱と不定稱との二に分つ。「これ」「それ」「かれ」「あれ」等は定稱にして「たれ」「なに」「いづれ」等は不定稱なり。

第三人稱の代名詞の分類

定稱の代名詞

三六 定稱の代名詞は又そのさし方によりて近稱、中稱、遠稱の三に區別す。近稱は「これ」「こゝ」「こちら」の如きをいひ、中稱とは「それ」「そこ」「そゝ」の如きをいひ、遠稱とは「あれ」「かれ」「あそこ」「あちら」の如きをいふ。

定稱の代名詞をかく三種に分つことは國語文典の特別の現象なるが、これは明瞭なることなれば、分類するも不可なし。この分類は單に意義上の分類に止まるが如くなれど、之を第一人稱、第二人稱に轉用する場合などにこの區別おのづからあらはるものなれば、多少文法上の要用ありとすべし。而してその近、中、遠の區別は單に場所の上の意義のみに止まらぬを忘るべからず。即ち人、事物、場所、方向等につきて對者よりも說話者に空間的に近きか、又精神的に親しきものは之を近稱といひ、說話者よりも對者に近き親しきかの關係にあるものを中稱といふ。これ說話者より見れば、近稱よりも遠きか疎かしてしかも次の遠稱よりも近きか親しきかの關係にあるが故なり。說話者、對者に共に近きか親しきかの關係を離れて指示するものを遠稱といふなり。この區別はこれを使用し試みて、**親疎**の感に差異あるを實際に認めうべし。

三七 不定稱の代名詞はそのさす所、全く不明なることあり、又全く不明に心ならずして疑問に屬するものあり、又いづれと定めずして漠然とさすに用ひらるものあり。

この類に屬する代名詞は人にては「誰」、事物にては「なに」「いづれ」、場所にては「どこ」「いつ」「いつか」等これなり。

不明又は疑問の場合

不定稱の代名詞

かしこに談話してあるは誰なるか。
漠然とさすもの
誰にもあれ疾く來れ。

さて又この不定稱の代名詞を疑問代名詞とする人あれど、その意義は上の如く疑問に限らざるなり。英語などにて疑問代名詞といふ一類を立つる必要は單に意義の上よりのみ來れるものにあらずして句法上の必要あるなり。然るに我にはこれらの上に何等の特別の必要を認めず。この故にこの名も亦必要なしとす。

三八 國語の代名詞には文語と口語とによりて用ゐる單語に差あることあり。文法上何等の差なきものなりとす。

三九 次に代名詞を分類表示す。

おのれ	反 射 指 示		格	人 稱	指 示
	稱人一第 (稱自)	稱人二第 (稱對)			
わ(わ) れ			近 稱	中 稱	遠 稱
(な)					
(こ) これ					
(そ) それ			不定稱	(他稱)	
(か)(あ) かれ					
な いづれ	(た) たれ(だれ)				
事物	人				

代名詞の表
文語口語の
文法上の差
なし

數詞の特徴

(わたし)	なむぢ		ここ	そこ	かしこあしこあ そこ(あそこ)	いづく いづら(どこ)	場所
	(おまへ)	こちち					
(わたし)	こちち	そちち	あち(あちち)	あなた	いづか(どこ)	いづかた(どなた)	方向

右の表中括弧()を加へたるは主として口語に用ゐらるるものを示し、括弧()を加へたるものは「TO」が「格助詞」に附屬する場合の形を示す。なほ委しきは用法の條に説くべし。

第六章 數詞

四〇 數詞とは數量又は順序をはかり又は數ふるに用ゐる語言なり。

數詞が單に數量の名目をあらはすに止まるものならば、それは單に名詞といひて可なるなり。然るに之を普通の名詞とせず、體言中の一類と立つる所以はこの「量り」又は「數ふ」といふ點に存す。數詞の性質は既に七節の注に述べたる如く客觀的のものにしてそのさす所は客觀その者の存在の形式にあり。而その存在の形式を數ふといふこと、これ即ち數詞の根本なり。この數といふ現象は勿論主觀の作用なれど數へらるるものは客觀に存して主觀を以て任意にあらはしうべきものにあらず。即ち一定の數には必ず一定の數詞をあてざるべからず。この點は如何なる人の主觀を以てしても同一たらざるべからざるなり。而この數といふ思想上の作用が數詞の概念の根柢たり。これ本文に「數量又は順序をあらはす」とはいはずして「計り」又は「かぞふる」といへる所以なり。この點數詞の特徴の主眼にして代名詞の「さす」といへると同じ趣意なるなり。

数詞

数詞の二類

数詞は上の如く單に數量の名目たるに止まらず、同時に「數へ」又は「はかる」といふ作用をあらはすものなれば、到底普通の名詞と同一に説き去るべからざるなり。この故に數詞をば體言中名詞代名詞と別なる一種と立てざるべからざる根柢あるを示せり。

西洋文典などには數詞を形容詞中の一類とし、又は獨立の品詞とするものあり。これその語の性質上然るべき理由ありてなり。たとへば英語などの數詞は名詞よりも寧ろ形容詞に近きものなれば、之を形容詞中に説けるもの少からず。されど普通の形容詞とはその屈折の有無によりて文法上區分を與ふべき必要あり。さりとして名詞にはあらぬものなれば、これを一の品詞とするも説明上まさに然るべきこととなす。吾にありても單に數量の概念をあらはすといふに止まらば、これ概念語の本體たる名詞として止むべきのみ。然るにその用例を見れば、普通の名詞とは異なる特別の現象あり。この事は後章用法の條に説くを見て知るべし。而この用法上の特別の現象はこれ即ち計り又はかぞふといふ作用の外形なりとす。これを以て見てもまた名詞と區別を立つることの當然たるをさとるべし。

四一 數詞には事物の分量をはかるものと事物の順序をかぞふるものとの二様あり。

數詞には本文の如く數量に關するものと順序を示すものとあり。而、普通には數量を示すものを基本とし、順序を示すものを副次的のものとせり。然れども、これは數學に用ゐる數が、専ら數量を示すに馴れたるより來れる誤想なるべし。言語の發達の上より見、又數ふといふ點より考ふるに、數詞の起源はもと順序を數ふるよりはじまれるものなるが如し。然れどもその數の漸く多くなるに隨ひて一々別の語を以て順序を立て數へつくすべきにあらざるを以てここにある數を一括する必要生じて分量をあらはす數詞を生じたるものなる

順序の數詞

數量の數詞

べく、この數量をあらはす數詞の發達ありて更に順序をかぞふることは一段と進み、且容易になれるるべし。而、嚴密にいへば「かぞふ」といふ語は順序の數詞に適し、數量の方は「はかる」といふ語にてその作用をあらはすべきものなるべし。

四二 順序を數ふるには數詞そのままを用ゐることもあれど、多くは「第一」「二番」「三號」「五つ目」の如く、上又は下に順序を示す接辭を伴ふものなり。

順序をかぞふるものは普通には本文の如く「第」「番」「號」「め」の如き語を加ふるに限る如くに説けり。然れども必ずしも之にかぎらず。たとへば、

明治二十三年十月三十日教育勅語を下したまふ。

と云へる時の「二十三」「十」「三十」の如きは數量にあらすして明に順序を示せるものなり。而、これ實に數詞の本源たるべきこと前節述べたるところなり。

さてここに上下に添へて用ゐたる「第」「番」「號」「め」の如き語を從來或は助數詞といふ名稱を設けて説けるもあれど、これらは寧ろ一種の接辭とすべし。

四三 數量をはかるものに「一」「二」「十」「百」などの如く明に數を示せるものと、「あまた」「すこし」などの如く漠然と量を示すものと、「いくつ」などの如く數量の不明なるを示せるものとあり。「だ」「す」の如く數の集團を示せる詞も亦數詞なり。

數の集團を示せる詞も亦數詞たるなり。何となれば、數詞といふものは「一」の外は皆數の集團をあらはすものなればなり。即ち、「二」は「一」の二個集まれる集團、「五」は「一」の五個集まれる集團、「十」は「一」

の十個集まれる集團、「二十」はその「十」の更に二個集まれる集團、「百」は「十」の十個集まれる集團、「二百」はその「百」の二個集まれる集團なり。されば一以外はいづれの數詞も數量をあらはすものは皆數の集團にあらざるはなし。これを以て見れば、「だす」は「一」の十二個集まれる集團にして明に數詞といふべきなり。

さて「あまた」「すこし」の如き漠然と量をあらはすもの「いくつ」の如き不明の數量をあらはすものはかぞふることなきが如くなれど、その用法より見て他の明確に數をあらはす數詞と同一の法則によるのみならず、數量といふ以上はその數の明不明によりて區別を立てうべきにあらざることなほ代名詞に定稱不定稱の二様あるが如き關係なり。この故にこれらは順序をかぞふる方には關係なきもあれど、分量をはかる方には關係ありといふべきなり。

四四 數詞が一定の事物の數に關するものなるを示さむには、「一人」「二羽」「三匹」「四冊」「五本」の如く接辭を添ふることあり。

「一人」は「人」につきて、「二羽」は「鳥」につきて、「三匹」は獸類などに、「四冊」は書籍に、「五本」は樹木などに用ゐるなり。著者自身はこれらを具象的數といひて、「一」「二」「三」「四」「五」等を抽象的數といへり。具象數をあらはす爲に加へられたる語も亦接辭なり。

四五 數量が一定の量の單位に基く時は「百圓」「十石」「五斤」「六尺」等の如く單位を示す名詞を下に附せしめて示す。

この節の如き例は前節の「一人」「二羽」などに似て混じ易きを以て深く注意するを要す。この場合はその

一人二羽な

具象數

ど百圓十石な

文語口語の
差なし

用
言

趣は類似たりと雖もその「圓」「石」「斤」「尺」等は貨幣度量衡等の單位の名稱にして純粹の名詞なりとす。然るにこれらは本來數量に關する名目なるが故に往々數詞と誤る恐れあり。されど、これらは上にいへる如く數量の概念たるに止まり數ふる作用を含まず。即ち動的の意義なし。この故に數詞と明に區別するを得。この區別を明に識認せむには初めにいへる如く數ふるといふ作用に着眼せざるべからず。これ最初にこの點を力めて説ける所以なり。

四六 國語の數詞には口語と文語とにて文法上何等の差異なきのみならず、單語としても略同一のものを用ゐるなり。

第七章 用言概説一

四七 用言は體言に對してその屬性觀念を表明すると同時に陳述の作用をあらはす單語なり。

用言は體言と相待ちて句の組立の骨子となるものにして體言に對して何等かの説明をなして陳述をなす要素なり。用言の定義を更に簡にすれば、

用言とは事物の説明をなすに用ゐる單語なり。

といふを得べし。この説明をなすといへるうちにはその屬性觀念を表明すると共に人間の思想の統一作用をあらはすことを含めるなり。

用言の用といふ義は既に體言の條にのべたる如くこの説明陳述の用をなすをいへるなり。然るに用言には

實際に活用あるが故に活用を有する語なりとする人もあれども、これ本末をとりちがへたる説明にして活用あるものと陳述の用をなすものとは必然的に一致すべきものにあらず。ただわが國語には事實上二者一致すれば初學の徒に教ふる場合にはかくいひおきても事實上は矛盾はなきなり。ただ之をすべての言語に及ぼさむとせば、ここに衝突矛盾を起すべきなり。

用言のあらはす屬性は種々あり。

白し、黒し、赤し、青し、等は色合の説明をなし、

長し、短し、重し、輕し、太し、細し、厚し、薄し、廣し、狭し、等は分量の説明をなし、

よし、惡し、美し、穢し、甘し、辛し、貴し、賤し、鈍し、銳し、等は性質を説明し、

讀む、愛す、養ふ、走る、等は生物の動作を説明し、

鳴る、流る、咲く、肥ゆ、等は事物の作用を説明し、

劣る、勝る、似る、死ぬ、等は事物の有様を説明す。

かく種々の屬性をあらはせども、その屬性をあらはすといふことは用言のみの現象にあらざるを以て之を以て用言の特徴とすべからざるなり。

四八 用言の用言たる特徴はその陳述の作用をあらはす點にあり。この作用は人間の思想の統一作用にして主位に立つ概念と賓位に立つ概念との異同を明にして之を結合する力を有す。

凡そ人の思想を發表する機關として箇々の概念の必要なることはいふを俟たざるところなれど、箇々の概

△用言の特徴

念のみ存しても之を統一判定する作用なくば、思想の完全なる發表となることなし。かく統一判定する作用を言語にあらはしたるもの即ち用言なり。この點より見れば、用言はすべての品詞中最も重要なものにして語句文章の組立も之が存在によりてはじめてその目的を達するを得べきものなり。而その用言はその陳述の力と共に種々の屬性をあらはせるもの大多數を占むれども、もとその屬性の存在は用言の特徴と目すべきものにあらず。即ち屬性は名詞にて「赤」「青」などの如くあらはすべく、又副詞にて「ながやか」「しづか」などの如くもあらはしうべきものなれば、用言特有の現象にあらず。用言特有の現象は實にこの陳述の力に存す。この故にその屬性甚だ廣汎なる場合又は殆ど屬性の認むべからざる場合にては、陳述の力といふ用言特別の力を有するものは用言たる資格十分なりといはざるべからず。この見地より見て、

「す」 はある動作の形式のみをあらはし (英語の「to」にあたる)

「あり」 は汎く事物の存在のみをあらはす (英語の「be」にあたる)

ものなれど、用言たること明なり。更に歩を進めて考ふれば、

「如し」 はある状態の形式のみをあらはし

「なり」「たり」 は陳述の形式のみをあらはす

ものにしていづれも陳述の力を有するが故に、これ亦用言たるなり。この最後の「如し」「なり」は他の文法家は助動詞とせり。然れども、これ大なる缺點にして動詞の特徴に注意せざるに基づく弊なりとす。

元來助動詞説の大立物といふべきは廣日本文典なり。その書に助動詞といへるには二の異なるものを含めたり。一は

所謂指定の「なり」「たり」比況の「如し」

語尾の變化

にしてこれらは動詞を助くるものにあらずして自家に説明の意義を有し、體言若くは準體言につくものなり。他の助動詞といふべきものは大なる差異あり。他は所謂助動詞にしてこれらは動詞の語尾の複雑なる發展をなせるものといふべきものなり。この故に従來助動詞といへる中には、補助的動詞と動詞の補助部分とを混合せり。本書は、之を截然と區別して決して混亂なからしめんことを期せり。

四 用言が事物の説明をなすには種々のしかたあり。而その用法の差によりて語形の變化を起す。之を用言の主たる特徴とす。

今一二例をあげてこの説明のしかたを説かむ。

花の色美し。

小兒は犬と戯る。

事業を營むには資本を要す。

公園はここにあり

の「美し」「戯る」等は陳述をなして句の述語たるなり。又

櫻の花も美しく桃の花も美し。

小兒は犬と戯れ大人は花を眺む。

事業を營むには資本を要し才能を要す。

公園はここにあり學校はかしこにあり。

の「美しく」「戯れ」等は説明しつつ次の語句に重ねつづくるなり。又

美しき花の色。

犬と戯るる小兒。

資本を要する事業。

ここにある公園

の如く體言の上において之を説明する場合もあり。又

花の色美しければ人之を賞す。

小兒は犬と戯るれども之を打つことなし。

事業を營むには資本を要すれば我は之を調達せり。

公園はここにあれど我等は屢來り遊ぶ暇なし。

の如く「ば」「ども」などいふ助詞につづけて次なる語句に接続せしむる用をなすあり。かくの如く、

美し 美しく 美しき 美しけれ

戯る 戯れ 戯るる 戯るれ

要す 要し 要する 要すれ

あり あり あり あれ

語の下の部分が或は變り或は加はることあるなり。

五〇 用言の語形の變化は主として語尾に起るものにして、その起り方に種々の状態あり。一はその語尾の音を種々の形に變更するものあり。二はその語尾の音の母音の變化に止まるものあり。三はその母音の變化の外に「れ」の

二音の加はるものあり。かく用法上の差に基づく語形の變化を「活用又は「はたらき」といひ、之に對して活用せぬ部分をば語幹といふ。

語尾の音を種々の形に變更するものとは

よし[△] よく[△] よき[△] よけれ[△]
美し[△] 美しく[△] 美しき[△] 美しけれ[△]

の如きをさす。

語尾の音の母音の變化に止まるものとは

ゆく[○] ゆか(ズ)[○] ゆき[○] ゆけ(ズ)[○]
あり[○] あら(ズ)[○] ある[○] あれ(ズ)[○]

の如きをさす。

語尾の母音の變化の外に「る」「れ」二音の加はれるものとは

戯る[○] 戯れ[○] 戯るる[△] 戯るれ[△]
要す[○] 要せ[○] 要し[○] 要する[△] 要すれ[△]

の如きものをさす。

上の諸例中の活用を除ける部分、即ち

よ[○] ろるはし[○] ゆ[○] あ[○] たはむ[○] 要

を語幹といふ。これらのうち語幹として文法上重要な用法に立つものあり。然らざるものあり。

従來多くの文法家は語幹 Stem をは語根と稱せり。語根は即 Root にして語幹よりは一層根本的のものに

語幹が一言なる用言

圖して(但、Root にして同時に Stem たるものも稀にあり。)語幹をなす基たるものなり。語幹は形容詞にては特別に文法上の用法あり。動詞の語幹にはこの事なし。

五一 用言の語幹が一言なることあり。この時には語幹に母音の變化を起し、その上に更に「る」「れ」二音の加はることあり、又語幹のままにて一二の活用をなし、更に「る」「れ」二音の加はることあり。かかるときは、その語幹は同時に活用とも考へらるるものなり。

上述のうち語幹に母音の變化を起し、その上に更に「る」「れ」二音の加はれるものとは文語にある例にし

て
(經) ふ[○] ぶ[○] ぶる[△] ぶれ[△]
(寝) ぬ[○] ね[○] ねる[△] ねれ[△]

の如きものをさす。

語幹のままにて活用をかね、更に「る」「れ」二音の加はれるものとは

(着) き[○] きて[○] きてる[△] きてれ[△]
(蹴) け[○] けて[○] ける[△] けれ[△]

の如きものをさす。

五二 用言の活用に種類多し。今之を研究上の便宜の爲に種々の名目を立てて區別す。それらのうち大抵は五十音圖の一の行にて活用し、若くはそれら

くしき活用
くしき活用

に「るれ」の音の加はるものなるに、特別の現象として加行左行の二行相混じて活用するものあり。之を「く、し、き」活用及び「しく、しき」活用の二とす。

「く、し、き」活用とは上の例にあげたる

よく。よし。よき。よけれ。

の類にして「く、し、き、けれ」と活用するものをさす。「長し」「短し」「高し」「低し」など多数の語之に屬す。これを「く、し、き」活用といひたるは便宜上、その活用の主要なるをとりて名目としたるなれど、「けれ」は歴史的に見ても後世の發達に屬するものなれば、「く、し、き」の三にてこの活用を示すものとしたるなり。

「しく、しき」活用とは上の例にあげたる

美しく。美し。美しき。美しけれ。

の類にして「く、し、き」活用に似たれども「よし」に似たる用法の場合に「美し」といふ語幹そのまま用ゐて下に「し」音をとることなき例なるを異なりとす。この故に語尾としては「く、き、けれ」の三音に止まれど、便宜上わかりよきやうに從來語幹の「し」をも加へて「しく、しき」活用とよべり。「けれ」を唱へぬは上の「く、し、き」活用の例と同じ。

用言によりては文語と口語とに活用の差違あることあり。今ここには研究の標準として先文語の活用のみをあぐ。口語との相違は各條に至りて詳論する際に述べべし。

この「くしき」活用及び「しくしき」活用は従前音雜活といひたることあり。これは二行にわたりて活用すること次下のすべての活用と異なるによりてなり。

五三 五十音圖の各一行にわたりて活用するものの最も模型的なるは「ア」「イ」「ウ」「エ」の四の母韻に亘りて活用するものとす。之を四段活用といふ。

四段活用とは上の例の「行く」の類にして「押す」「待つ」「言ふ」「讀む」「取る」の如く、

行か [△]	ゆく [△]	ゆく [△]	ゆけ [△]	(加行四段)
押さ [△]	おし [△]	おす [△]	おせ [△]	(左行四行)
待た [△]	まち [△]	まつ [△]	まで [△]	(多行四段)
言は [△]	いひ [△]	いふ [△]	いへ [△]	(波行四段)
讀ま [△]	よみ [△]	よむ [△]	よめ [△]	(麻行四段)
取ら [△]	とり [△]	とる [△]	とれ [△]	(良行四段)

五十音圖の「ア、イ、ウ、エ」の四段にわたりて、活用するを名づくるなり。これに屬する語は用言中最も多きものなり。これの活用する點は實際は母韻のみなること次の如くなれば

(カ行)	yuk	(行)
(サ行)	os	(押)
(タ行)	ut	(打)
(ハ行)	musub	(結)
(マ行)	yom	(讀)
(ラ行)	tor	(取)

特に種類を立つる必要なものなれど、之を假名にてかきあらはすを以て動詞檢出の便宜の爲にその假名の

變化の點より着目して、加行四段、左行四段等と稱す。而四段活用の語は加行、左行、多行、波行、麻行、良行の六行に限り、他の四行にはなきものなりとす。

活用を命名して何段活用といふことは「詞の八衢」よりはじまれり。段とは五十音圖の横列をかぞへたるものにして活用の數をさせるものとはいふべからず。唯、四段は段も四、活用の數も四なり。その他は段の數と活用の數とは一致せず。而、以下説くものは「る」「れ」「二音の添はれるを異なりとす。

五四 四段活用に次ぎて多きは「エ」「ウ」の二の母韻に亘りて活用し、その「ウ」の母韻ある音に「る」「れ」の二の音の加はりて活用をなすものなり。これらは次の上二段に對して下二段活用と稱す。

下二段活用

下二段活用とは上の例の「戯る」「ふ」「ぬ」の類にして「得」「受く」「失す」「捨つ」「衰む」「吠ゆ」「う」の如く、

吠 ^え	衰 ^め	(經) ^へ	寝 ^ね	捨 ^て	失 ^せ	受 ^け	(得) ^え
ほ ^ゆ	ほ ^む	ふ ^ふ	い ^ぬ	す ^つ	う ^す	う ^く	う ^あ
ほ ^{ゆる}	ほ ^{むる}	ふ ^{ぶる}	い ^{ぬる}	す ^{つる}	う ^{する}	う ^{くる}	う ^{ある}
ほ ^{ゆれ}	ほ ^{むれ}	ふ ^{ふれ}	い ^{ぬれ}	す ^{つれ}	う ^{すれ}	う ^{くれ}	う ^{あれ}
(也行下二段)	(麻行下二段)	(波行下二段)	(奈行下二段)	(多行下二段)	(左行下二段)	(加行下二段)	(阿行下二段)

戯^れ たはむ^る たはむ^る たはむ^る (良行下二段)
 植^る う^う う^う う^う (和行下二段)

五十音圖の「e、o」の二段にわたり、なほ、その「u」韻の音に「る」「れ」の加はりて活用を完くするものなるにより、その「る」「れ」を姑く別として考へて「e、o」の二段をとりて四段に對せしめて二段と名づけたるなり。しかも次の上二段が同じく二段にして「i、u」の二段に亘れるに對して下二段活用と名づけたるなり。これもその眞に活用する點は「e、u」の韻以下なること次の如くなれば、

得 ^{uk}	(受)	us	(失)	sut	(捨)	kan	(兼)	sub	(總)	sam	(覺)	koy	(越)	kar	(枯)	uw	(植)
ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ								

特に種類を立つる必要なきものなれど、之を假名にてかきあらはすにより動詞檢出の便宜により、その假名の變化の點より着目して阿行下二段、加行下二段等と稱す。而下二段活用の語は五十音圖の十行にわたりて活用するなり。

五五 下二段活用に對するものは上二段活用なり。これは「イ、ウ」の二の母韻に亘りて活用し、その「ウ」の母韻ある音に「る」「れ」の加はりて活用するものなり。

上二段活用とは「起く」「こす」「くつ」「錆ぶ」「浴む」「老ゆ」「下る」などの語にして、

上二段活用

起 [△] き	お [△] く	お [△] く	お [△] く	お [△] く	お [△] く	(加行上二段)
掘 [△] じ	こ [△] ず	こ [△] ず	こ [△] ず	こ [△] ず	こ [△] ず	(左行上二段)
朽 [△] ち	く [△] つ	く [△] つ	く [△] つ	く [△] つ	く [△] つ	(多行上二段)
錆 [△] び	さ [△] ぶ	さ [△] ぶ	さ [△] ぶ	さ [△] ぶ	さ [△] ぶ	(波行上二段)
浴 [△] み	あ [△] む	あ [△] む	あ [△] む	あ [△] む	あ [△] む	(麻行上二段)
老 [△] い	お [△] ゆ	お [△] ゆ	お [△] ゆ	お [△] ゆ	お [△] ゆ	(也行上二段)
下 [△] り	お [△] る	お [△] る	お [△] る	お [△] る	お [△] る	(良行上二段)

五十音圖の「i、u」二段にわたり、なほその「u」韻の音に「る、れ」の加はりて活用を完くするものなり。而これは上の下二段と甚よく似たれども、彼は五十音圖の第三、第四の二段に活用し、是は五十音圖の第二、第三の二段に活用するを以てその區別を明にせむ爲に彼を下二段といひ、之を上二段と名づけたるなり。この活用ははじめ「詞の八衢」には中二段といひしをば、黒澤翁滿の「言靈のしるべ」に上二段活用と改めたるよりして世の通用する所となれるなり。

この活用も亦、その真に活用する點は「i、u」の韻以下なること次の如くなれば、

カ行	ok (起)	i
サ行	koz (掘)	
タ行	kut (朽)	u
ハ行	sab (錆)	
マ行	am (浴)	uru
ヤ行	oy (老)	
ラ行	or (下)	ure

特に種類を立つる必要なきものなれど、之を假名にてかきあらはすにより動詞檢出の便宜により、その假名の變化の點より着目して、加行上二段、左行上二段等と稱す。而、上二段活用の語は加行、左行、多行、波行、麻行、也行、良行の七行に亘りて存し、阿行、奈行、和行の三行には存せず。

上二段活用

下二段活用

五六 一の音とそれに附屬する「る、れ」の二音とによりて完成する活用あり。

之を一段活用といふ。そのうち「イ」韻の音に「る、れ」の加はれるあり。エ韻の音に「る、れ」の加はれるあり。前者を上一段活用といひ、後者を下一段活用といふ。

上二段活用とは上にあげたる「着る」の類にして「似る」「乾る」「見る」「射る」「居る」の如く

(着)き [△]	きる [△]	きる [△]	きる [△]	きる [△]	きる [△]	(加行上二段)
(似)に [△]	にる [△]	にる [△]	にる [△]	にる [△]	にる [△]	(奈行上二段)
(乾)ひ [△]	ひる [△]	ひる [△]	ひる [△]	ひる [△]	ひる [△]	(波行上二段)
(見)み [△]	みる [△]	みる [△]	みる [△]	みる [△]	みる [△]	(麻行上二段)
(射)い [△]	いる [△]	いる [△]	いる [△]	いる [△]	いる [△]	(也行上二段)
(居)ゐ [△]	ゐる [△]	ゐる [△]	ゐる [△]	ゐる [△]	ゐる [△]	(和行上二段)

「イ」韻の音に「る、れ」の添はりて活用を完くするものなり。これも亦動詞檢出の便宜の爲に加行上二段、奈行上二段等といふ。而、上二段活用の語は文語にてはその數甚だしく加行、奈行、波行、麻行、也行、和行の六行に存し、他の四行には存せず。然れども文語の上二段活用なるものは口語にては上二段に活用するを以て語數も活用の行も多し。これらの事は下條に詳説する際に譲る。

段の數と
活用の數

下一段活用とは上にあげたる「蹴る」の類にして文語にては普通にこの一語のみなりとす。
之を他の例に準じて加行下一段と稱す。下一段活用の語は文語にてはこの一語に限ると認めらるれども、文語の下一段活用なるものは口語にては下一段に活用するを以て、その語數も活用の行も頗る多くなれり。これらの事も亦下條に至りて説くべし。

五七 四段活用、上二段活用、下二段活用は活用の數各四あれど、上一段活用と下一段活用とは活用の數三あるのみなり。これを以て活用には段の數に異同あると共に活用の數も亦一定せぬものなりとしるべし。

五八 「來」といふ語は活用五ありて、五十音圖の「オ、イ、ウ」の三段又「エ、イ、ウ」の三段とその「ウ」韻の音に「れ」を添へて活用するものなり。之を三段活用といふ。

「く」「來」といふ語は

(來)て き く くる (加行三段)

の如く「オ、イ、ウ」の三の韻の音に活用し、その「ウ」韻の音の下に「る、れ」を添へて活用を完うするものなり。又「す」(爲)といふ語は

(爲)せ し す する (左行三段)

の如く「エ、イ、ウ」の三の韻の音に活用し、その「ウ」韻の音の下に「る、れ」を添へて活用を完うするものなり。前者を加行三段活用といひ、後者を左行三段活用と稱す。

三段活用

加行變格
左行變格

加行三段は「く」の一語左行三段は「す」の一語なり。從來「おはす」を以て左行三段の活用なりといひてあげたるものなれど、著者の研究の結果は四段と下二段との二活用を具するものなることを證し得たり。委しき事は略す。日本文法論に述べたり。

左行三段の「す」は與す、裏書す、要す、愛す等の如く名詞漢語等につきそれらを動詞とするに用ゐらるゝが故に、又その「す」の附屬せる動詞は普通文に最頻繁に用ゐらるゝが故に、普通文法にては頗る重要なものとす。

本書に三段活用と稱するものは從來加行變格、左行變格といへるものなり。元來この二活用はその性質頗る相似て、助詞「な、そ」に挟まるる場合、及複語尾「き」「し」「しか」に接する場合は共に他の動詞と趣を異にす。この故にこの點に於いて之を一括しおく方説明上甚便利なり。勿論變格と稱せらるゝはこの點によるものなれど、次にいふ變格はこれと異なる點の存するものなれば、とにかくに之を區別せざるべからず。而次の變格は四段の形を有しながら形及用法上普通の四段と異なるが故に之を變格と稱するはかへりて辨別に便なれど、本節に説明せるものは形の上には儼然たる三段活用にして、又之を三段活用と稱する方説明の上にも統一あり、又實質にも適合せり。しかのみならず、未然形附屬の複語尾に接する場合には四段と變格とは一團をなして「る」「す」の如き單形に接し、二段と一段とこの三段とは「らる」「さす」の如き複形に接するものなれば、かた／＼この三段を變格と稱して「死ぬ」「あり」と同一になす時は説明上甚手数かゝりて、しかも記憶に困難なり、なほ又、三段活用といふ名は著者が今始めてつけたるものにあらず。著者の學統にて五六十年の昔よりこの名を用ゐたるなり。而、上三段下三段等の名もありしなり。(この事は著者の日本文法論に述べおきし所なり) 近來また、かく名づくる人もなきにあらず。なほ之を上下に分つよりは

六〇 用言の活用は語によりてその形式を異にすれどもその用ゐらるる場合は略一定す。これによりてすべての用言に通じて活用の用法の方式を調整して一定の範疇を編成す。之を活用形といふ。

六一 活用形の基本の形はそのまゝ言ひて句の終りとなる形にあり。之を終止形となづく。

終止形とは終止する形の義なり。然れども終止する形には種々ありていづれをも終止形といひうべし。ここにいふ終止形とは他に何等の條件なしに、その用言單獨に用ゐらるる場合の終止に用ゐらるる形をさすなり。

終止形は「くしき」活用、「しくしき」活用にありては「し」の音に存し、四段活用にては「う」韻の音に存し、下二段活用、上二段活用、三段活用、奈行變格活用にありては「う」韻の音に存して「る」音の添加なきなり。上一段活用、下一段活用にありては添加せられたる「る」音に存し、良行變格活用にありては「い」韻の音に存す。即ち次の如き

- くしき 活用 善し
- しくしき 活用 美し
- 四段 活用 行く
- 上二段 活用 起く
- 下二段 活用 受く

上一段活用
下一段活用
加行三段活用
左行三段活用
奈行變格活用
良行變格活用

あり

（來）く
（爲）す
往ぬ

着る
蹴る

の形これなり。これらは下に複語尾をもつづける等種々の用をなすものなれど、そのうち最も普通の用法の一をとりて名目としたるなり。されば、これらの名目は一の便宜に止まれるものにして、名目には嚴密の意義ありと思ふべからず。然れどもその活用形には一定の用法ありて漫りに動すべからず。名目の便宜なるによりてその用法も漫然たるものと誤解すべからず。

この活用形は古き文典にては截斷言、終止言、終止段などいひたり。

六二 用言の活用形の一として體言の上冠してその體言の意義を修飾限定する形あり。この形を連體形といふ。

連體形とは體言に連ぬる形の義なり。この形は「くしき」活用、「しくしき」活用にありては「き」の音に存し、四段活用、良行變格活用にありては「う」韻の音に存し、その他にありては添加せられたる「る」音に存す。即ち次の如き形

- くしき 活用 善き
- しくしき 活用 美しき

行く

四段活用

上二段活用

下二段活用

上一段活用

下一段活用

加行三段活用

左行三段活用

奈行變格活用

良行變格活用

ある

すべて「人」「事」「物」などにつづけて見るべし。

起くる

受くる

着る

蹴る

来る

爲る

往ぬる

これなり。この形もその用法は或は特別の終止として用ゐることあり、又體言に準ずる形となること等ありて連體の用のみをなすものにあらず、されど、その最も目立つものにしてわかりやすきは連體の用法なればとりて名目とせるなり。而してこの形はある用言にては終止形と同じ形なるものなり。されど、すべての用言に通じて見るときはこの形を一の範疇と立つるを便とするによりてかく一の形と立てて別とせるなり。この形も古き文典にては連體言、連體段、續體段などいへり。

六三 用言の活用形の一として他の用言の上に冠して之に連ね、相合して用ゐらるる形あり。この形を連用形といふ。

連用形とは用言に連ぬる形の義なり。この形は「くしき」活用、「しくしき」活用にありては「く」の音に存し、四段活用、上二段活用、上一段活用、三段活用、變格活用にありては「イ」韻の音に存し、下二段活

用、下一段活用にありては「エ」韻の音に存す。即ち

くしき活用

しくしき活用

四段活用

上二段活用

下一段活用

上一段活用

下一段活用

加行三段活用

左行三段活用

奈行變格活用

良行變格活用

善く

美しく

行き

起き

(着)き

(來)き

(爲)し

往に

あり

受け

(蹴)け

「見ゆ、候ふ、見む、とる、なる、なす」等につづけてみるべし。

の形これなり。これらも亦、その用法之に止まらず、句を重ね、又は中止し、又は複語尾につづくる用をもなすたり。然れどもその最も認め易き點をとりて名目に用ゐたるなり。これも古き文典にては連用言、連用段、續用段などいへり。

六四 用言の活用形の一として「ば」「ど」といふ助詞を下にふみて更に下に

つづけて、已に定まれる事を條件とする意を示す形あり。この形を已然形といふ。已然形とは已に然る形といふ義なるが委しくは已然條件形といふべきを略せるなり。この形は「ば」と同

時に「ど」「ども」に接するを得る形にして「くしき」活用「しくしき」活用にては「けれ」の形に存し、四段活用、良行變格活用にありては「エ」韻の音に存し、その他にありては添加せられたる「れ」音に存す。

くしき活用 善けれ
しくしき活用 美しけれ

四段活用 行け

上二段活用 起くれ
下二段活用 受くれ

上一段活用 着れ
下一段活用 蹴れ

加行三段活用 來れ
左行三段活用 すれ

奈行變格活用 往ぬれ
良行變格活用 あれ

の形これなり。この形は上に「こそ」といふ助詞ある時はその結となることあれど、「ば」「む」「らむ」「らむ」につづくる形の方わかりやすければ、それをとりて名目とせるなり。

この形も古き文典にては已然言、已然段、已然段などいへり。

六五 用言の活用形の一として「ば」といふ助詞を下にふみて更に下につづけ、未だ定らざる事を條件とする意を示す形あり。この形を未然形といふ。

未然形とは未だ然らざる形といふ義なるが、委しくは未然条件形といふべきを略せるなり。この形は已然形に對せるものにして「ば」といふ助詞をふむ點は相似たれど、その意義は正反對なり。彼はその事の已に存在せるをいへるにこれは未だ存在せざる事を假設せるなり。而してこれは「ど」「ども」といふ助詞につづくこと全くなきなり。この形は「くしき」活用、「しくしき」活用にありては「く」の音に存し、四段活用、變格活用にては「ア」韻の音に存し、上二段活用、上一段活用にては「イ」韻の音に存し、下二段活用、下一段活用に、左行三段活用にありては「エ」韻の音に存し、加行三段活用にありては「オ」韻の音に存す。

くしき活用 善く

しくしき活用 美しく

四段活用 行か

上二段活用 起き

下二段活用 受け

上一段活用 (着)き

下一段活用 (蹴)け

加行三段活用 (來)こ

左行三段活用 (爲)せ

奈行變格活用 往な

良行變格活用 有ら

の形なり。この形は「美しく」「よく」の韻を除きたる他の類の用言即ち動詞にては「ず」といふ打消、複語

尾につづくを以て最もよく認められるれども、形容詞にはこの「ず」つくことなきを以て「ば」につづけて認むるを要す。

この形は古き文典にては將然言、將然段、未然言などいへり。

六六 「くしき」活用しくしき活用以外の用言にありてはその活用形の一として命令、希求、許容、放任等の意を表はすに用ゐる形あり。この形を命令形といふ。「くしき」活用「しくしき」活用は所謂形容詞にしてこの活用形の存せぬを特徴の一とす。さて命令形といふは單に命令にのみ用ゐらるるにあらず、本文にいへる如く希求にも用ゐる許容、放任等の用をもなすなり。

されど、その分り易き一につきて命令形とはいへるなり。この形は四段活用、下二段活用、下一段活用、左行三段活用、變格活用にては「エ」韻の音に存し、上二段活用、上一段活用にありては「イ」韻の音に存し、加行三段活用にありては「オ」韻の音に存す。而、多くは「よ」といふ助詞を添へてその用を完くするものとす。

- 四段活用 行け。
- 上二段活用 起き。
- 下二段活用 受け。
- 上一段活用 (着)き。
- 下一段活用 (蹴)け。
- 加行三段活用 (爲)せ。
- 左行三段活用 往ね。
- 奈行變格活用

馬鹿野郎、大にカッセル、死ね。
おれは、おれを人殺しやを
おれは、おれを「よ」を加へて見るべし。
(來)こ

何んか、おれを破りたれ。
おれらうらうら。

欠

欠

形式用言と
實質用言

六八 用言の分類はその意義と性質と活用の差別との上より見て施さざるべからず。先、今理論上より大別すれば形式用言と實質用言との二に大別することを得。

用言は通例動詞と形容詞との二に大別せらるるものなり。然れども、わが文法學の歴史に顧み、又國語の特性に徴するにただ現今の習慣に従ふとせば、論もなけれど、十分に考ふれば、直に従ふべからざる點あり。用言の分類をはじめて施したるは富士谷成章なるが、氏は「装」と「事」と「状」との二に分ちたり。次に鈴木朗は「作用の詞」「形状の詞」の二に分ちたり。富士谷氏の「事」と鈴木氏の「作用」とは大體今いふ動詞にあたり、「状」と「形状」とは大體今いふ形容詞に當れり。然れども二氏共に「あり」をば「状」「形状」に收めて動詞の類に入れざるなり。富樫氏は「説動用詞」と「説容體詞」に分ちたるが、かの「あり」をば説動用詞に入れたり。この説動用詞は今の動詞にして説容體詞は今の形容詞なり。即ち現今はこの富樫氏の説によれるものなり。ここに古來その所屬の不定なる「あり」といふ用言はこれ實に形容詞にも動詞にも屬すべきものにあらずして二者に共通して兼ぬる點もあり、しかもその實質極めて廣漠としてただ存在を示すのみのものなるが、その用む方によりてはただ斷言の用をなすにすぎざるものあり。この「あり」はその活用所謂動詞に似て亦一種特別の趣ありて古來良行變格と呼ばれたるものなり。上述の種々の點よりしてこの「あり」を先他の用言と區別するは研究上有利なる事なり。若、この「あり」をのみ一の品類と立つる時は存在詞と名づくべきものなり。

「あり」の外にも形式用言と名づけて可なるものあり。「如し」といふ語これなり。「如し」は形容の意明にして用言の活用と用とを有すれど、實質全く缺乏せり。この故に之を使用するには形容に供する概念を補充せ

如し

あり

ざるべからず。この補充の概念は體言又は體言の資格を附與せられたるものに限り。これこの「如し」が助動詞と目すべからざる點なり。

「あり」「如し」の外になほ形式用言と名づけて可なるものあり。「す」これなり。この語は動作作用をあらはすことは明なれど、如何なる動作作用をあらはすものなれば、そのさす所極めて汎く、一切の動作作用みなこの語にてあらはすべく、實質殆どなしといひて可なり。さればこれ亦形式用言といひて可なるものなり。今「あり」と「如し」と「す」との三を外にして考ふれば、その餘の用言は、陳述の力と共に必ず何等かの屬性觀念をあらはさざるはなきなり。この屬性觀念を具有する點を以てこれらを實質用言とはいふなり。

六九 實質用言はその意義と性質と活用との點より見て之を形容詞と動詞との二に分つことを得。

形容詞と動詞との區別の存すること一見明なることなれど、之を明に説示することは甚だ困難なり。従來の説明は多くは

形容詞とは長短、輕重、善惡、美醜の如き一切の性質を示す用言。

動詞とは行爲若くは状態を示す用言。

といふ如き説明にて之を示し得たりと思惟せる如くなれど、形容詞の示す長短、輕重、善惡、美醜の如きは性質といはゞいへ、なほ状態たるなり。殊に「淋し」「賑はし」の如きは性質といふべきものにあらず。しかも形容詞なるにあらずや。然らば、形容詞は寧ろ状態を示すといひて不可なし。これ單に不可なきのみにあらず、形容詞といふ名目は即ち状態を示す語といふ義にてあるなり。然るに動詞は動作、形容詞は状態といふを以て區別せむとすれば、「似る」「見ゆ」「成る」の如きは動作にあらずして寧ろ状態に近し。而、これ實に動

詞たり。さればかくの如き説明にては到底之を明に示すこと能はざるなり。

余はこの二者の區別は上の如き説を以てしては不可なる事を信じ、百方研究の後、日本文法論に次の如く説けり。

「動詞形容詞の區別は其の文章の構成上の職能を外にしては動作状態性質といふよりも寧ろ「時偶發性」のものと多少固定的永在性のものとの區別なるが如し。これによりて試にこの區別を立て、所謂作用言を以て偶然性屬性を顯はすものとし、形状言を以て存続性屬性をあらはしたるものとせば多少低觸する處少かるべし。之によりてかの形状言作用言に新意義を與へむと欲す。」

かくの如くにして余が日本文法論は之を基礎として二者の區別をなせり。これ實に余が本邦に於いて始めて企てたる處にして明治四十一年壹月に發刊せし中等文法教科書別記にも、その要を歸結して

形容詞は 固著的、超時間的の性質を説明し、

動詞は 發作的、時間的の性質を説明す。

といひ置きたり。これより後、之を基礎として二者の區別を説ける學者往々見ゆ。吉岡郷甫氏の「文語對照語法」の如き最もよく之を示せり。その説に曰はく、

「用言と申しますのは實體の屬性を表す語で、之に(1)變化する屬性即ち動作を表すものと(2)變化しない屬性即ち有様を表すものと二通りあります。(1)は動詞、(2)は形容詞であります。」

「物事の移動し變化する屬性を表す用言を動詞と云ひます。言葉を換へて申しますれば物事の流動的屬性を表す用言を動詞と云ひます。」

「動詞が物事の移動し變化する屬性を表すに對して靜止し、安定する屬性を表すものを形容詞と云ひます。」

言を換へて申しますれば、動詞が流動的屬性を表すに對して固定的屬性を表すものを形容詞と云ひます。」と。同氏の説の立場は余が思ふ所と略一致す。然れば、これらの説の漸次に世に行はるべきは明なり。さて以上の如く區別をなしうれども、便宜上次の如き分類を以て本書の説明を進めむとす。

七〇 本書にては説明の便宜上、用言を形容詞と動詞と存在詞との三大群に分つ。

上にいへる「如し」はその意義も性質も活用も大體普通の形容詞に似たれども、その屬性の實質の缺けたる點を異なりとす。今これを特別の形容詞として形容詞の中に攝取し、時に應じ、特種の點を説明する方説明の上に便益あるべしと思ふを以て之を形容詞の條中にて説くこととせり。又「す」はその動作作用の具體的意義こそなけれ、動作作用を示すこと明なれば、之を動詞の中に入ること必ずしも不合理ならず。然れども、その用法に至りては頗る廣汎なるものなれば、時に臨みて特別に説く必要あり。然れども、一の範疇として立つるよりは動詞中に入れおく方便なりとす。

「あり」に至りてはその性質動詞に近けれども、用法の廣きこと用言全般に影響するものなれば、之を特立せしめて説くことかへりて利益多し。この故に之を一目と立つることとせり。西洋文典の説く所に従へば、「あり」の類は明に動詞中に入れてあり。然れども、かれの *Verb* といふ概念はわが動詞の概念よりは頗る廣くして寧ろ用言と譯すべきものなり。即ちかれの形容詞は陳述の力なく用言にあらず。陳述の力あるものは即ち *Verb* に限られたるなり。されば、わが形容詞は用言たるを以てかれの *Verb* に該當するものなり。この故にわが文典にて用言の分類を施すはかれの文典の動詞の分類をなすと同じと知るべし。されば、*を* がわが普通の動詞と區別せざるにより我にも區別する用なしといふにつきてはさらば同時に動詞形容詞の區別をなす要なしといふを得む。今わが用言に内譯たる小區別をなす以上、上の三者に分つとも不合理たることはなし。その不可は要するに便利ありや否やといふ點によりて決すべきに止まれり。

複語尾

七一 従來助動詞と稱せられたるものには「如し」なり「たり」の如き單語と、「す」「ちす」「らる」「しむ」「し」「まじ」「す」「たし」「まけり」「たり」「ぬ」「む」などの如く用言の語尾の補助部分たるものとを混ぜり。「如し」なり「たり」の類は單語なれば、本書にては前説の如くに各所屬を立つ。その「す」「さす」乃至「つ」「ぬ」「む」などの如きは單語ならぬものなれば、本書は之を用言の複語尾といひて區別す。

従來助動詞といへるものは、もと、英文典などに *Auxiliary verb* の譯語よりとれるものなり。彼れらの助動詞と云へるものは *be, have, shall, will, may, can, must, ought, do*, (*do* はわが「す」にあたり) などなり。これらは、單語にして他の主要動詞を補助して *Voice* 態(受身働掛) *Tense* 時(過去現在未來) *Mood*, 法(可能條) *Form*, 形(繼續) などの意を區分するものなり。その意はわが所謂助動詞に似たりといへどもかれらは單語なり。此故に意義上にて補助するのみにして形態上それらに附屬するものにあらず。 *The ship is built. He has been. The boy will go. I am going. Do you see?* の如く形態上獨立するのみならず、語法によりて位置をかふるなり。即ちかれらにては助動詞といへるは動詞にして補助に用ゐらるる場合のものなり。これらのうち *be, have, do* などは、獨立にも用ゐられ、その時は助動詞とは稱せられざるなり。さればかれらは單語としての動詞の用法上の名目たることを知らざるべからず。わが「る」「らる」「乃至」「つ」「ぬ」「む」等の類は動詞等につきてかれらの助動詞に似たる用をなすとい

へどもこれは、もとより独立の單語にあらずして用言の語尾の複雑なる場合のものたることを示せり。次の數例を見よ。

牛馬を使役して人の勞を助けしむ。^(使役)

旗の青きは浪の印きたるを知らするなり。^(決定)

貝はうち寄せられて砂の上にある。^(受身決定)

いざ波と今日も戦はむ。^(豫定)

こを拜するに涙おちきてとどまらず。^(打消)

機敏にして忠節なる人なりき。^(回想)

日影はやうやくわがもとに來りぬ。^(決定)

名相同じからざれども事はすなはち一なり。^(打消)

彼は殆完全に日本國民の理想を代表したり。^(決定)

たゞ専念につとめ勵むべし。^(義務)

たゞ人々の多きを以て誇るべからざるなり。^(可能)

かばかりの事驚くにも當るまじ。^(打消推量)

これらはいづれも動詞を離れては全く用をなすことなく、古くはこれを活用の一と見做したり。これ國語の性質上、最も穩當の見解にして一の單語とは見做すこと能はざるものなり。この故に本書には之を複語尾と稱して助動詞とは稱せず。

かく、如くこれらは用言の語尾の複雑なるものなるを以て用言の活用と同時に説くべき性質のものなれど、

その各に又それぞれ活用を具して頗複雑なれば、これを用言の本幹たる語尾と同時に説くは混雜を來すを以て別に一括して説かんとす。

七二 用言には數の區別なし。

國語の用言は上にいへる如く英語の動詞に似たるものなるが、彼等の動詞には單複の數の別をあらはし I am, We are; I was, We were. の如く主語と動詞と數に於いて一致せしむべきを法則とす。わが用言にはこの區別なし。

七三 用言には稱格を形式にあらはして區別することなし。然れども、敬語にありては稱格に類似したる作用をなす。

英語などの動詞は人稱によつて語を異にし、又は形式を異にす。I am, Thou art, He is; I have, Thou hast, He has; I love, Thou lovest, He loves. などの如きを見て知るべし。わが國語にてはかく、主格の人稱の差によつて動詞乃至一般の用言の差別あることなきが如し。然れども、かくの如きこと全くなきにあらず、世に敬語といへるものは實に之に似たるものにして即ち既に名詞代名詞の條にいへる如く謙稱敬稱の名詞を使用するに際して之に相應する用言を使用すべきものなり。この名詞代名詞と相照應すべき點即ちかの稱格に似たり。

七四 用言の敬語も亦謙稱と敬稱とに分つ。謙稱は動詞、存在詞に存し、敬稱はすべての用言に存す。

謙稱敬稱の意義は二三節以下に説けるを見るべし。

用言に於ける謙稱は之をあらはす特別の語たとへは、「申す」「仕る」「候ふ」「侍り」等にてあらはすなり。而して謙稱は形容詞になし。

敬稱は之をあらはす特別の語を以てするものあり。敬意の複語尾を以てあらはすあり、又敬意の接頭辭を加へてあらはすあり。形容詞の敬稱は接頭辭を加へてあらはす。たとへば「おいたはしい事であります」の如きこれなり。動詞、存在詞は「遊ばす」「給ふ」「いまそかり」の如く特別の語を以てするあり。「行かる」「行かじめ給ふ」「有らせらる」の如く複語尾を添ふるあり。「お聞及び」「お出かけ」などの如く接頭辭を加ふるあり。それらの詳細は下に述べべし。

第八章 形容詞

七五 形容詞とは靜止的、固定的に時間に関することなく心内に畫かれたる事物の性質狀態を説明する用言なり。

從來形容詞といふ語を使用するに二の源あり。一は形狀言といへるを呼びかへたるにて用言の一部分とせるものなり。一は英語の Adjective の譯語を轉用したるものにしてこの方面の人の意見にては名詞を形容する詞なりといふ説明を用ひて他を顧みざるなり。これわが國語の形容詞には適當せぬ説明なるのみならず、其の説明にては「この本」「この」「活潑なる人」「活潑なる」「黒色の犬」「黒色の」なども等しく名詞を形容せるが故にこれらの區別を立つることなきのみならず、混じていづれも形容詞といふべく、これによりて國語を論ずる時は國語の性質いよく不明にならざるを得ず。かくの如きは外國文典のみを知りて國語を知らざるものなり。

余輩がここに形容詞といへるものは内容も範圍も殆ど全く從來形狀言といひたるものに相當す。ただ異なるところはその説明にあり。この説明は前章に既にいへる如く余輩苦心の結果にして何人も之を否定するものあるまじきなり。

形容詞の示す性質狀態は靜止的、固定的にして時間に関することなきものなること既に述べたる如し。今その重なるものをあぐれば、次の如し。

- | | | | | | | | |
|------|----|----|-----|-----|----|----|----|
| (色合) | 白し | 黒し | 赤し | 青し | | | |
| (分量) | 長し | 廣し | 狭し | 重し | 太し | 細し | |
| (性質) | よし | あし | 穢し | 甘し | 辛し | 貴し | 賤し |
| (有様) | 早し | 遅し | 急がし | 煩はし | | | |
- 又、無し

の如く事物の存在せぬことを説明する形容詞もあるなり。

「無し」は形容詞にして「あり」は形容詞ならぬに疑を狭む人なきにあらざるべし。然れども「あり」はその用法汎くして動詞にも形容詞にも通じて頗る汎く交渉するが故に、本書にては別に一類としたるなり。

七六 形容詞の活用には二類あり。一は「くしき」活用にして他は「しくしき」活用なり。

形容詞の活用は五〇節に所謂語尾の音を種々の形に變更するものにして、從來音雜活ともいひたるものなり。之に「くしき」活用、「しくしき」活用、二種あること五二節に既にいへり。この二種の區別はその基づくところ語幹の形と用法との差にあり。即ち「くしき」活用にありては語幹に「し」の尾音なきものにし

て之に「く、し、き、けれ」の活用を添へて形容詞をなすなり。

(あか) く し き けれ
(あま)

「しくしき」活用といふは語幹に「し」の尾音あるものにしてこの語幹は終止形としても用ゐられ、その活用としては「く、き、けれ」の三の形式を有するものなり。

(美はし) く き けれ
(樂し)

即ちこれらは終止形にて更に「し」の語尾をとることなきなり。これ即ち似たるものにして異なるなり。かく「しくしき」活用の「し」は活用にあらずして語幹なれど、説明の便宜上之を活用の名目に用ゐたるものなり。

七七 形容詞はその活用形として未然形、連用形、終止形、連體形、已然形の五ありて命令形なし。

形容詞の活用形の特徴の第一は命令形の存せぬにあり。今これらの各活用形の用例を次に示さむ。

若分量あまり多くば之を減ぜむ。(未然形)

(普通文には「くば」を「くんば」とすること多し。)

多くなくてかなはぬものは實用の材なり。(連用形)

都會ははでやかなり花やかなり娛樂多し。(終止形)

あまり多きを要せず。(連體形)

これ人多ければ、業もまた盛なるによるなり。(已然形)

形容詞の活用形

形容詞の活用形の特徴の第二はその未然形は「ば」助詞につづくのみならず、「とも」といふ接續助詞にもつづきて未然の戻續條件を示す點にあり。この點動詞と異なるなり。その例

夏引の手引の糸をくりかへしことしけくともたえむと思ふな。

(古今集、十四)

牛のあゆみのよし遅くとも。

形容詞にては未然形と連用形と同じ活用の形なり。

さてかく各の活用形のあるうち、注意すべきは前節にいへる如く、「くしき」活用と「しくしき」活用との終止形の差違にあり。次に上の二の活用の各活用形を表にして示すべし。

(くしき活用)	善	善く	善く	善し	善き	善けれ
(しくしき活用)	樂し	樂しく	樂しく	樂し	樂しき	樂しけれ

七八 形容詞の語幹に二種あること、上に述べたる如し。これらの區別は接辭「み」「げ」等を添ふるときに明に認めらる。語幹には又特別の用法あることあり。

この語幹の二種の一は

しろ	くろ	あか	あを	ほそ	ふと	なが	短か
あつ	うす	あま	から	かる	おも	たか	ひく
ふか	あさ	つよ	よわ	よ	な	にが	あま

の如くに末に「し」音を含まぬものにして、二は

形容詞の語幹

等の如く末に「し」を含めるものなり。これらの區別は主として上の「くしき」活用「しくしき」活用の區別をなすに必要なものみならず、熟語の名詞をつくる際にもあらはることあり。又特別の用法あり。それらは用法の條に述ぶべし。

七九 形容詞の活用の連用形の「くはくづれてう」となることあり。かく音のくづれて發音の便宜に従ふを音便といふ。

蘆のびて川狭う(く)なりぬ。

地は青黒う(く)暮れ人家の障子に燈火紅に見えそめぬ。

口語にても又かく「う」とすることあり。但この「く」を「う」といへる音便は關西地方の語に多くして關東地方には用ゐざるなり。

實が熟すると、味があまう(く)なります。

寒う(く)もなく暑う(く)もなく誠に心持のよい時です。

八〇 形容詞の活用の連體形の「き」は音便にて「い」となることあり。

おほいなる河づらにいでてすれば。

あなみぐるし何しにぞよしない事はきこえでといへば。

うしろめたいかたなく。

(空穂、俊蔭)

(落窪、一)

(紫、日記)

連用形の「う」

連體形の「く」

口語の形容詞

口語にては専らこの音便を用ゐるなり。

日本人のきつい(き)氣象を表した好い(き)標本である。

八一 形容詞の口語に於ける形は文語に於けるものとは形と用法とに差あり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(善) よく(ば)	善く(う)	善い	善い	善けれ
(樂) 楽しく(ば)	楽しく(う)	楽しい	楽しい	楽しけれ

このうち未然形の「く」の語尾は古き形式の傳はれるにて「ば」にのみつづきて用法頗る狭し。連用形は「く」の形は關東に多く、關西には「う」の形多し。特に敬語の動詞(ございます等)につづく時には「う」を用ゐること多し。終止形の「い」は文語には用ゐることなし。

刻苦せずしてよい(き)事の成された例は決してない(し)。

わが國の農家には小なる者が極めて多(し)。

この形はもと連體形を終止形に轉用せしより生ぜしものと考へらるるが、終止形といふ名目の下には特にあぐべきものなり。而「賤し」「樂し」等所謂「しくしき」活用の文語の終止形にては語尾に「し」を加へぬに口語にては「し」を加ふるを特色とす。連體形は専ら音便の「い」を用ゐるなり。「けれ」の形は口語にては未然の差なくただ條件を示すに用ゐるものなれば已然形といふべからずして條件形といふにて足れり。以上のうち口語の形容詞の特徴は終止形と連體形とは形を一にして共に「い」といふ形を、

ふ類の語の終止形も亦「い」の語尾をとり、已然形が、單に條件たるを示すに至れるなり。

八二 形容詞には接頭辭「お」「み」等を加へて敬語をなすは敬稱をあらはし、口語にのみ用ゐらる。

本文に説けるは次の例の如きをさす。

おうつくしい お近い お早い
おめづらしい お羨しい

これはいづれも口語に用ゐるものにして文語にはかかる形なし。

八三 「如し」は一種特別の形容詞にして事物をたとへて説明するものなり、而、これは「けれ」の活用を有せず。又口語には用ゐることなし。

「如し」は従來助動詞とせられたれども、こはもとより單語にして他の助動詞とは一ならず。これが普通の形容詞と異なる點はその觀念の補充を要する點の一なるのみ。この詞の性質につきては既に日本文法論にひたるるところにして、三矢氏の高等日本文法にも亦之を形容詞として説けり。今かく觀念の補充を要する點を見るに

人も樹木の如く教育によりて化成せらる。

咲きこぼれたる卵の花雪の如し。

塵の如き輕き物體を吸收す。

の如く助詞を介するもの多し。かくの如く助詞に媒介せらるる以上、これは少くとも助詞以上の品詞ならざるべからざるなり。これを用言の補助的部分たる複語尾と同一に説くは穩當ならざるなり。

八四 動詞とは事物の性質狀態が推移的發作的の觀念として意識内に描かれたるものをあらはす用言なり。

従來動詞といへるものには又二の由來あり。一は作用言といひたるものにして形狀言以外の用言をさし、一は西洋文典の動詞(Verbの譯語)を轉用したるものなり。而して二者そのはじめはその内容必ずしも一致せざりしものなるが、現今にては動詞といふ名目にて従來の作用言を内容とせり。然れどもなほ西洋文典のVerbの觀念を以て之に擬せむとするものなきにあらず。しかも、このVerbの觀念を以てせば、吾人の形容

第九章 ● 動詞總説

今若かくの如く、獨立に用ゐらるゝことなきが故に之を助動詞なりとせば、動詞にても「さす」「おほす」「かぬ」「あふ」「そむ」の如きはなほ所謂助動詞とすべきか。これらは「し」「す」「打おほす」「こらへかぬ」「取りあへず」「ふりそむ」の如く必ず他の動詞の連用形を受けて之と一になりてはじめてその用と意義とを完くするものなり。然れどもこれらを以て所謂助動詞とせること古來なきなり。これらを助動詞とせざる以上はそれよりも更に用法の獨立的なる「ごとし」を助動詞とすべき理由なきにあらずや。この「ごとし」といふ語の語幹は「ごと」なるが、これは今も博多など九州の方言に存し、古語には廣く用ゐられたり。

花のごと世の常ならばすぐして昔はまたもかへりきなまし。

(古今集、春、下)

秋萩の色づきぬれば蟋蟀わがねぬごとやよるは悲しき。

(古今集、秋、上)

この活用には「けれ」といふ形なし。「如けれ」などいふは破格なり。

詞も亦動詞とせざるべからざる點あること既に述べたるところにて知らるべし。余がこの書にてはその名稱は現時の通用に従ひたれど、實際は略従來作用言といひたるものにおなじ。ただ「あり」の類を別とせるのみなり。

動詞をば動作をあらはすものと釋すること普通なれど、これにて通せざるところあることこれ亦既に述べたる如し。この故に本文の如き説明を以てはじめて形容詞との區別を明にしうべし。或は簡單にいはい吉岡氏の如く

物事の移動し變化する屬性を表す用言を動詞といふ。

といひてもよかるべし。

動詞には次の如き種々の意義を有するものあるなり。

○ 讀む 愛す 養ふ 走る

一等は目的ある動作をあらはす動詞なり。

○ 鳴る 流る 咲く 肥ゆ

二等は自然の作用をあらはす動詞なり。

○ 劣る 勝る 似る 死ぬ

三等は事物の有様をあらはす動詞なり。

八五 動詞を意義の上より分ちて自動詞他動詞の二種とすることあり。

従來この自他の區別を企つるものに二の系統あり。一は本居春庭の「詞の通路」に始まりし者にして用言を

- 一、おのづから然る
- 二、物を然する
- 三、他に然する

自動詞と他動詞

四、他に然さする

五、おのづから然せらる

六、他に然せらるる

の六段に次第したるものなるが、その第三段以下は「す」「さす」「る」「らる」といふ複語尾の附屬せる形にして第一段が自第二段が他なるなり。

第一段 にくる 第二段 ながす

きこゆる きく

次いで權田直助氏に至つてはかの第一段を二に分ちたる故に自他は

第一段 おのづから然る のく

第二段 みづから然する のく ぶづる

第三段 物を然する のくる いだす

の三となれり。かくの如き説より發して種々の説行はれたり。然れどもこれらの説は要するに一種の思想上の穿鑿に止まりて文法上何等の結論をも法則をも出すことは能ざりしなり。

一は西洋文法の Transitive verb(他動詞) Intransitive verb(自動詞)の譯語より來れるものなり。これらの系統の學者の説明にては

動詞の動作の獨り自らする性質なるものを自動といふ。

動詞の動作の他の事物を處分する性質なるものを他動といふ。

といひて區分せられたれど、それらの論者の説にても既に

自動なれども其の動作の係るべき標準なければ、意を全うせざるものあり。

といひて、自家の定義を自ら破れるなり。然れどもかくの如き破綻は外國文法の名目を盲從的に國語にあて

むとせば、おのづから起るべき缺點なり。かの英語などの動詞の自他の區別は上の諸説の如き單なる意義の穿鑿によれるものにあらずしてその本旨は實に働き掛と受身との轉換の成否を以て分釋の原理とせるものなり。即ち自動詞と他動詞とはその動作のかかる目的格(獨逸語にては第四格といふ)の語の存否にあり。この目的格の語を要するは他動詞にして自動詞は絶対に之を要することなし。而してこの目的格の語はこの他動詞が働き掛の語態の時にあらはるるものにしてその他動詞が受身の語態に變ずるときはもとの目的格の語が、主格となるなり。而してかく働き掛と受身との二態をあらはしうべきこと即ち他動詞の特徴なるなり。この特徴を省みずして他動詞を論ずるが如きはかれらの文法上何等の必要な事に屬す。

然るにわが國文法家の所謂自他の區別はこれらの問題には全く關係なく、又他の點に於いて文法上の必要ありやと見るにこれ亦その必要を説けることなし。然らばこれたゞ空想を弄するに止まれり。更に翻りてわが國語にありてはこの自他と働き掛受身の轉換との間に文法上の關係ありやと見るに更にその事なし。何となれば、所謂他動詞にてはなるほど、働き掛と受身との轉換あれど、わが國語にては又所謂自動詞にも受身態は成立するなり。

子母に抱かる。

生徒教師にほめらる。

の如き例は即ち他動詞の受身態なりと云ふべし。

夫妻に病まる。

母子に泣かる。

(廣日本文典の例)

の如きは「病む」「泣く」共に自動詞なるなり。かくの如きことは西洋語には決して行はるることなき現象

なり。又古今集の長歌に

今は野山し近ければ春は霞にたなびかれ、夏は空蟬泣きくらし云々

とあるが如きはいよ／＼西洋流に説くを得ざる點なり。かくの如き現象を以て見れば西洋文典流の自動詞を以て國語にあてむとするは不可能の事に屬すべし。

されば、残る所は古來の自他の説なれど、これらは既にいへる如く文法上何等の法則も立て得らるべきものにあらねば、作文修辭の上にては必要あることなるには相違なけれども、之を文法として一定の規律を立てむことは不可能にして又不必要の事なりとす。なほ之につきては下の客語の條に説くべし。

なほ之に似たる事にして格の助詞と動詞との關係を明にするが如き事は作文修辭上甚だ必要なことなれど、文法上これ亦一定の規則ありや否や未だ之を明言する時期に達せず。

八六 動詞の活用には四段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活

用加行三段活用、左行三段活用、奈行變格活用の八種あり。

用言の活用、十一種あるうち、「くしき」、「しくしき」の二活用は形容詞にして良行變格活用は存在詞なり。その他の八種は動詞の活用なり。これらの活用は文語につきていへるものにして口語にては多少の差異あり。それらは各活用の條に説くべし。

二種又は二種以上の動詞が語幹の形と意義とを同じうして終止形も亦同じきものあり。これらの動詞はもとより各別の動詞なれども通俗的には二種又は二種以上に活用する動詞と稱す。それらのうち作用の異なるにつれて意義の異なるあり。同様の意義にて二様以上に活用するものあり。

同様の意義にて二様に活用するもの例



日本文法講義

うづむ^四 くるむ^四 みだる^四 わく^四
以上四段下二段共に他動詞

まなぶ^四
以上四段上二段共に他動詞

すたる^四 する(逸)^四 もる(漏)^四
以上四段下二段共に自動詞

しのぶ^四
以上四段上二段共に自動詞

同様の意義にて三様に活用するものの例

もみづ^四 下二

以上四段下二段上二段共に自動詞

作用の異なるにつれて意義の異なる例

あ	く	下四	自	あ	から	む	下四	自	あ	ふ	む	下四	自	
あ	ら	だ	つ	同	上	い	る	同	い	た	む	同	上	
う	く	(浮)	同	上	う	る	(實)	同	う	か	む	同	上	う
か	が	む	同	上	か	な	ふ	同	く	ぼ	む	同	上	う
く	ろ	む	同	上	く	つ	ろ	ぐ	こ	む	同	上	上	か
し	づ	む	同	上	し	ろ	む	同	し	わ	む	同	上	か

以上四段は自動詞下二段は他動詞

す	す	む	(進)	同	上	す	ぼ	む	同	上	し	り	ぞ	く	同	上		
そ	ふ	同	上	そ	む	同	上	そ	む	く	同	上	そ	ろ	ふ	同	上	
た	つ	同	上	た	が	ふ	同	上	ち	が	ふ	同	上	ち	ち	む	同	上
ち	か	づ	く	同	上	つ	く	(付)	同	上	つ	づ	く	同	上			
と	ど	く	同	上	な	つ	く	同	な	ら	ぶ	同	上	ふ	す	同	上	
の	く	同	上	ひ	そ	む	同	上	ひ	ら	む	同	上	ふ	す	同	上	
み	つ	同	上	む	く	(向)	同	上	や	む	同	上	や	す	む	同	上	
ゆ	が	む	同	上														

以上四段は他動詞下二段は自動詞

い	く	下四	自	上	三	自	よ	く	下四	他	上	三	自
を	る	(折)	下四	自	他								

以上は三様の活用又は意義を有するものなり。

八七 動詞の活用形には未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六種を具す。

この六種の形を各別なる形にて具せるものは奈行變格のみにして他は二又三の活用形を一の形にてあらはせるものなることは既に六七節に述べたるところなり。

さてこの六種の活用形のうち命令形のみは特に注意すべき現象あり。即ち四段活用及び變格にあつてはその形のままにて命令の用をなせど、他の二段一段三段活用にあつては今は必ず「よ」といふ助詞を添へてはじめて命令の用を全くするものなることなり。(古にあつては必ずしも然らず) その例

- | | | | | |
|-----|----|-----|-----|-----------|
| 行け | 來れ | 死ぬ | 有れ | (四段、變格の例) |
| 受けよ | | 寝ねよ | くれよ | (下二段の例) |
| 起きよ | | | おりよ | (上二段の例) |
| 着よ | | 見よ | 蹴よ | (一段の例) |
| こよ | せよ | | | (三段の例) |

八八 動詞にも亦音便あり。この音便は主として四段活用の連用形にあらはるるものにして「キシ」などを「シ」とするものあり。「ヒミ」を「ミ」とするものあり。「ビ」「ミ」などを「ん」とするものあり。「キシ」「ヒリ」を略して促め呼べるものあり。

この現象は文語にも口語にも存す。「キシ」「ヒリ」とするものとは次の如きものなり。

- | | |
|---------------------|--------|
| 字を書いてゐたり。 | (加行四段) |
| 彼方をさいて走りゆく。 | (左行四段) |
| 〇「キシ」を「シ」するものは | |
| 酒を飲むで酔ひ倒れたり。 | (波行四段) |
| 渚にそらであゆまず。 | (波行四段) |
| 〇「ヒリ」を「ん」とするものは | |
| あまりに遊んで歸るを忘る。 | (波行四段) |
| 〇驚き怪んで聞き見る。 | (麻行四段) |
| 「キシ」「ヒリ」を略して促め呼ぶものは | |
| ひづくみあひて勝負もつかず。 | (加行四段) |
| 之をもつて世の信用を得たり。 | (多行四段) |
| 追っかけて引き捕ふ。 | (波行四段) |
| 立あがつて引きたふす。 | (良行四段) |

これらのことはなほ下に詳に述べべし。

八九 動詞の敬語は謙稱には特別の語を用ひ、敬稱には特別の語を用ゐることあり、複語尾を以てあらはすことあり、又接頭辭を以てあらはすことあり。謙稱に用ゐる特別の動詞は次の如きものなり。

- うけたまはる
- たてまつる

さぶらふ

つかまつる

まうす

(以上文語の例)

あげる

あがる

いただく

いたす

うかがふ

(以上口語の例)

敬稱に用ゐる特別の動詞は次の如きものなり。

あそばす

おはします

たまふ

めす(以上文語の例)

いらつしやる

くださる

なさる

(以上口語の例)

敬稱に用ゐる複語尾は「る」「らる」「しむ」「す」「さす」の五なり。

敬稱の接頭辭は「お」「おみ」等なり。委しくは下條に説くべし。

九〇 國語の動詞は本來の活用の外複語尾によりて種々の陳述をなす。

複語尾の作

わが動詞は本來の活用にて種々の陳述をなす外、更に複語尾を加へて様々に陳述をなすを得るなり。かくの如き作用に該当するものは英文典などにいふ時式法等と稱せらるるものなり。

西洋の動詞にはここに上へる如く時 Tense 式 Voice 法 Mood の區別ありて各その場合によりて形を異にす。なほ不定形 Infinitive 分詞 Participle 名動詞 Gerund と稱する用法あり。之を動詞的名詞 Verbal と稱す。かれの動詞は此の如く複雑なるものなり。

我國の動詞もその用法は複雑なるが故に學習上甚困難なりといへども、之を説明するに必しも西洋文典の範疇によるを要せず。否語性異なるが故によることを得ざるなり。しひてよらんとすれば大なる不合理を生ずるに至るのみならず、説明をなすにも困難にして同時に國語の眞性を發揮すること能はざるなり。今大體の比較を次に示すべし。

動詞の時と稱するものは過去現在未來等の區別をなすものなり。この區別はかれの文典には必要なるものなるべしといへども、わが文典にては複語尾によりてあらはすをうべきが故に動詞本幹の語尾の條には説くを要せず。

動詞の式と稱するものは受身と働き掛けとの區別をいふ。普通國語文法にては受身及使役は所謂助動詞にてあらはすものとして動詞の變形とはいはず。この故にこの點も動詞本幹の條にて論ずる必要なし。

動詞の法と稱するものは直説法 Indicative mood 接續法 Subjunctive mood 可能法 Potential mood 命令法 Imperative mood の四あり。直説法は事實として斷言的に述ぶるものにして國語にていへば普通の終止形にて述語をなせる形なり。接續法とは條件を覺束なき程度にてあらはすものにして國語の文語にていへば、未然形に接續助詞「ば」を添へたるもの略之に似たり。これを接續法といふ名よりして「ば」「ど」「ども」すべてにつゞくるものにあてたるは譯語のみを見て、實を知らざるより起れる誤謬なり。可能法は必要たる事件として可能の精神を以てのべたるものにて助動詞の助にてあらはせり。我國語にても又複語尾にて之をあらはすものあり。なほその他相當の動詞につゞけてあらはすものにして動詞の本體にその形式なし。命令法は國語の動詞にも命令形あり。これは既に述べし所なり。

不定形とは動詞の原形として一定の法をも式をあらはさぬをさす。或は名詞の如く、或は形容詞の如く、

或は副詞の如くに用ゐらる。これを以て、我が所謂未然形にあてたる文法家もあれど、徒に名を等くせしめたるにすぎずして實は大に異なり。わが動詞にては或は終止形或は連體形或は複語尾「べし」の連用形を附したるものを以て代表せしむるより外の手段はなし。

分詞とは動詞にして形容詞の役目をなせるものの義にして我が動詞の連體形にて連體格に立てるものに似たり。

名動詞と稱するものは一定の形即語尾に「ぬ」をとりて名詞として用ゐらるゝものをいふ。我が動詞にていへば、準體言と稱するもの之に似たり。

かくの如くなれば、國語の動詞の用法は國語の特性に基づき説明を進むるよりも他に良法なきが故にことごとく西洋文典の名目を襲ふを要せざるなり。

第十章 動詞各説

九一 四段活用は動詞中所屬の語最も多きものにして、加、左、多、波、麻、良の六行に活用し、その活用形は

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行)か(ば)	き(給へ)	く	(人)	け	(ど)ほ

の如く終止形と連體形と形を一にし、已然形と命令形とも亦形を一にせり。而命令形はそのまゝにて命令をなすことを得るなり。

從來の文法書四段活用の命令形は「よ」助詞を添ふべからざるものにして之を添ふるは破格なりといふ如き説明をなせるもの少からず。然れどもこは僻説なり。これらの文法の典型とせる平安朝語にも四段活用の命令形に「よ」を添へたるもの少からず、参考の爲に少しく之をあぐ。

- きこえまつれよ。(空穂、菊宴)
- あひ思へたまへよ。(源、うつせみ)
- ふみはよもみたまはじ詞にて申せよ。(大 和)
- 物なんとたまへよ。(空穂、祭使)
- よしみたまへよ。(狭衣、一)
- せうとをみてのみはやまじと大納言に申せよ。(源、紅梅)
- さらば年のうちにしたまへよ。(落窪、三)
- そのおはする所にすゑ給へよ。(和泉、肥)
- 藤の花はひまなれよ、枝は折るとも。(古、春、下)
- あはれとだにおぼしおけよ。(源、藤袴)
- 宮の御前に大とのこもれよ。(狭衣、三)
- 朝露の思はむ所に猶さらばおぼししれよ。(源、夕霧)
- 天皇我詔旨良萬宣不勅令乎使人等申給倍與宣久、天皇我勅命乎聞食倍與宣。(續後紀、十九、詔)

この故に本文は、そのまゝにて命令をなすことをうといひたるまでにて止めたり。

九二 四段活用にては文語も口語も大差なし。但既に述べし如く口語にて

は未然形にて条件を示すことなく、条件を示すは已然形にしてこの已然形は寧ろ条件形といふべき様になれり。

口語の四段活用を五段活用と稱するものあり。文部省發行の口語法をその主たるものとす。こはその未然形に豫定の複語尾「う」(文語の「む」の變化したるもの)のそはりたる「ゆかう」「おさう」の類が發音上「ゆこう」「おそう」等と聞ゆるにより、この「こう」「そう」等といふを一の活用と立てむとするによるものなり。然れども、これはただ活用形と複語尾との結合せる際に起る連聲上の便宜によりたる特種の現象にすぎずして之を以て文法上の形式の一とすべき者にあらず。

奈行變格活用

九三 奈行變格活用は「死ぬ」「往ぬ」の二語之に屬し、六種の活用形を具備して用形の標本たり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(死)な(ば)	に(給)ふ	ぬ	ぬる(人)	ぬれ(ども)	ぬ

九四 「死ぬ」は文語には活用上の如く分るれども、口語にては「死ぬる」「死ぬれ」の二の活用は減びて連體形と終止形と一になり、已然形と命令形と一になれり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死(な)ば	に(給)ふ	ぬ	(人)	死ぬ(ば)	よ

これを以て奈行四段活用といひてよくなれり。良行變格活用も亦口語にて通

變格の口語

常の四段活用と同じくなれり。

奈行變格活用に屬する二語のうち「往ぬ」といふ語は現今の口語にては關西地方の方言に存すれど、普通とはいひ難くなれり。而、「死ぬ」は本文の如く普通の場合に四段といひて差支なくなれり。かくてかの「死ぬる」「死ぬれ」といへる形もその二者又は或一は關西地方に現に行はれてあれば、奈行變格は現今の口語に全く亡びたりといふにはあらねど、普通語としては用ゐられずといひてよき状態となれり。

今この奈行變格を四段活用と見なす時は口語の四段活用は奈行の一行を加へて九行に活用すといひつべきなり。

又良行變格活用も口語にては四段活用となれり。即ち終止形に「あり」といふ形なくして「ある」といひ連體終止の二用を兼ねるに到りたればなり。この事はなほ下の存在詞の條にも説くべし。

九五 下二段活用は動詞中四段活用に次ぎて所屬の語多きものにして五十音圖の十行すべてに活用し、その活用形は

未然形、連用形、命令形	終止形	連體形	已然形
(受)け(給)ふ	く	くる(人)	くれ(ども)

の如く、未然形と連用形と命令形と同じ形なるを特徴とす。而、命令形は必「よ」助詞を伴ふなり。

下二段活用

九六 文語にて下二段活用として認められたるものは「蹴る」といふ一語のみ

口語の四段活用

下二段活用

なりとす。その活用形は

未然形、連用形、命令形 終止形、連體形

已然形

(蹴)け(給ふ)

ける(人)

けれ(ば)

の如く、未然形と連用形と命令形とは一の形にてあらはし、終止形と連體形とも一の形にてあらはす。而、命令形は必ず助詞「よ」を伴ふものとす。

文語にてもこの外「給る」、「殆る」といふ語亦下一段活用なりといふ説なきにあらず。然れども、これらの用例は大略院政時代以上に溯ることなきを以て寧ろ、これらは下にいふ口語の活用の萌芽と見る方穩なりとす。なほ本文にいふ「ける」とも奈良朝より平安朝初期までは下二段活用なりしなり。この下二段活用は「こゆ」「くろ」などいひたりしなり。之を「ける」とせるは現存の文献にては落窪物語をはじめとす。

蹴散此云俱穢鏡羅羅箇須。

(書 記)

蹴鞠世間云末利古由。

(和名抄)

さと寄りて一足づつける。

(落窪)

九七 文語の下二段活用は口語にては下一段活用となれり。而文語の下一段活用はもとより口語にても下一段活用なり。この故に口語にては下一段活用は五十音圖の十行に亘りて存し、所屬の語は四段活用に次ぎて多きものとす。

口語の下一段活用

下二段活用は現今の口語にては帝國の大部分に於いて下一段活用に變ぜり。故に普通語としては本文の如くいへり。但九州の殆全部及和歌山縣の日高郡地方には下二段活用現今に用ゐられてあり。されば、これらの地方の人には本文の如く一定せらるるに至らば或は迷惑に感ぜらるべきなり。

以上いへる如く、下一段活用は文語にては「ける」の一語に限るものなれば、その以外に下一段活用を用ゐることは許されざるなり。

九八 上二段活用は所屬の動詞の數は下二段活用に次ぐものにして加行、左

行、多行、波行、麻行、也行、良行の七行に活用し、その活用形は

未然形、連用形、命令形

終止形

連用形

已然形

起(給ふ)

く

くる(人)

くれ(ば)

の如く未然形と連用形と命令形と同じ形なるを特徴とす。而、命令形は必ず助詞「よ」を伴ふものなり。

この上二段活用は本文にいへる如くその所屬の語數下二段活用に次ぎて次下の諸活用よりは所屬の語多きものなれど、その數は下二段活用に比すれば、遙に少し。そのうち、左行上二段活用に屬するものは「細ず」といふ一語のみなりとす。

九九 文語にて上一段活用たるものは、語數多からずして、加行、奈行、波行、麻行、也行、和行の六行に活用し、その活用形は

上二段活用

上一段活用

未然形、連用形、命令形、終止形、連體形
 (着) ^(ば) _(よ) きたる(人) ^(ば) _(ども) きたれ(ども)

の如く未然形と連用形と命令形とは一の形にてあらばし、終止形と連體形とも一の形にてあらはす。而、命令形は必助詞「よ」を伴ふものとす。
 文語にて上一段活用たる語を列挙すれば次の如し。

- (加行) 着る
- (奈行) 似る 煮る
- (波行) 乾る 喰る 窺る
- (麻行) 見る 試みる かんがみる 顧る うしろみる
- (也行) 射る 鑄る 沃る
- (和行) 居る 率る 縋る ひきみる 用ゐる

一〇〇 文語の上二段活用は口語にては上一段活用となれり。而、文語の上一段活用はもとより口語にては上一段活用なり。この故に口語にては上一段活用は加行、左行、多行、奈行、波行、麻行、也行、良行、和行の九行に亘りて存し、その所屬の語は下一段活用に次ぐものなりとす。
 上二段活用は現今の口語にては帝國の大部分にては上一段活用に變ぜること、下二段活用の場合に同じ。

口語の上二段活用

加行三段活用

但、九州の東部及び和歌山縣の日高郡にては上二段活用品語に存せり。さて文語にては上二段活用品語のものを一段活用とすること認められざれば、之を使用するに注意を要す。

一〇一 加行三段活用の動詞は「來く」の一語にしてその活用形は

未然形、命令形 連用形 終止形 連體形 已然形
 (來) ^(ば) _(よ) きたる(人) ^(ば) _(ども) きたれ(ども)

にして、未然形と命令形とを一形にかぬ。而、命令形なる「こ」は、助詞「よ」を添へ若くは添へずして命令の用をなすものなり。

この「く」といふ動詞は文語にても口語にても同じく三段活用なれども、形の上に少しの差あり。即文語にては

を山田の霧の中道ふみわけて人くとみしはかゝしなりけり。

の如く「く」を以て終止形とせるに口語にては「く」といふ活用全くなくして「くる」を以て終止と連體とに使用するなり。

一〇二 口語の加行三段活用の活用形次の如し。

命令形、未然形 連用形 終止形、連體形 已然形
 (こ) ^{(よ) きたる(人) ^(ば) _(ども) きたれ(ども)}

一〇三 左行三段活用の動詞は「爲す」の一語にしてその活用形は

左行三段活用

口語の加行三段活用

未然形、命令形
勉強 せ(よ)ば

連用形
し(給ふ)

終止形
す

連體形
する(人)

已然形
すれ(ども)

この動詞も亦未然形と命令形とは一にしてその命令形「よ」を添へて始めて命令の用を全くするものなり。

この活用に属するは「す」の一語のみなり。従來の説にては「おはす」もこの活用に属すといひたれど、こは四段と下二段とに活用せる語なるを混一して區別を立てざりしによりて誤り認められしなり。この事は先哲もよりく説あり、余も日本文法論に詳論し、今は既に世に認められたり。「おはす」は「おはす」に「は」を添へたるなり。

一〇四 口語の左行三段活用も亦終止形は連體形と一になれり。従つて「す」の終止形を失へり。

未然形、命令形
せ(よ)ば

連用形
し(給へ)

終止形、連體形
する(人)

已然形
すれ(ども)

一〇五 左行三段活用の「す」といふ動詞は名詞、漢語、外國語等を動詞とする力を有するものなり。即ちそれらの語を動詞とするにはそれらにこの「す」を添ふるを普通とす。而、かくの如くにしてなれる動詞は皆左行三段活用の動詞と稱するを得べく、それらを各一の動詞とするときは左行三段活用動詞はその數甚だ多し。

口語の左行三段活用

左行三段に属する動詞の數

名詞を動詞とするものとは

音す 心地す 盡きす 罪す

欲りす(ほつす)

物す

の如きをいひ、漢語を動詞とするものとは

研究す

分配す

奏上す

勉強す

安心す

依頼す

論す

利す

案す

要す

議す

觀す

の如きをいひ、外國語を動詞とするものとは

庶幾くは祝する處多くして詛する處鮮からしめよ。

の如きをいふ。而これらを各一の動詞と見做すことを得。然るときは左行三段活用に属する動詞はその數甚だ多く、下二段活用に属する動詞の數よりも或は多きほどなるなり。

一〇六 「す」は「投ず」「論ず」「命ず」「輕んず」「重んず」の如くに濁音となることあり。

この時には上にある語の尾音が「ん」なるか、若くは「イ」「ウ」の長呼音なるにあり。これ上の音の影響を受けて連濁音となれるによるなり。

第十一章 存在詞

一〇七 「あり」といふ用言は存在の義をあらはし、なほ進みてはただ陳述の義のみをあらはす。之を存在詞と名づく。

「あり」といふ語は事物につきて極めて汎き形式の下に陳述をなす語にして如何なる屬性をも豫想すること

存在詞

「ず」

なく殆一切の用言の基本的形式的部分を代表せるものなり。

「あり」の意義はかく汎きものなるが、之を更に區別すれば二様あり。一は存在を示すものなり。

昔小野篁といふ人ありけり。

われ世の中にあらん限りは

などの如きこれなり。二はただ陳述の義のみあらはすなり。これは現代の語にては「あり」の形にて用ゐるものなしといへども、古代には用ゐられしなり。

安米都知能可未奈伎毛能爾安良。婆許曾安我毛布伊毛爾安波受思仁世米。

(萬、十、五)

乾政官大臣仁者仕奉倍伎人無時波空久置氏在官爾阿利。

(續紀、二十二、詔)

人の心こそうたてあるものはあれ。

(源、葵)

とのもりつかさこそなほをかきものはあれ。

(枕、三)

何事もいけるかぎりのためこそあれ。

(源、浮舟)

この第二のものは「なり」といふ形になること古代より行はれたるが、現代にては「なり」のみ用ゐらる。「なり」のことは下に詳説すべし。

一〇八 「あり」の活用は良行變格活用にしてその活用形は未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六種共に用ゐられ、その命令形はそのまゝにて使用せらる。

「あり」の活用は大體に於いて普通の四段活用に同じけれど、その終止形は連用形と同じ形なるを異なりとす。

「あり」の活用及活用形

未然形	終止形、連用形	連體形	已然形、命令形
あら(ば)	り(難し)	る(人)	れ(ども)

口語の「あり」

一〇九 口語にては「あり」は良行四段活用にして變格と稱すべき點なし。

口語にては「あり」はその活用全く良行四段にして終止形も「ある」なれば、變格と目すべからず。然れども、存在と陳述との二の用法はなほ存す。即ち

ここに梅の樹がある。

の「ある」は存在を示し、

これは梅の樹である。

の「ある」は陳述をあらはすなり。

一一〇 「あり」に基づく用言として「有りあり」。古くは「侍り」といふものありき。

「をり」

「をり」は「居」と「あり」の熟合よりなれりと稱せらる。その義は有情の存在を示す。その終止形は「をり」にして「をる」にあらざる點良行變格たる證なり。

あるにもあらぬ身をしらすしてと思ひをり。

(伊 勢)

翁何事ぞとてかたぶきををり。

(竹 取)

現代の口語にてはこれも「をる」と終止すれば、良行四段に活用するなり。

「侍り」は「這ひ」「あり」の熟合なりと稱せらる。賤しき者が貴人の側に従ひて在る意を源とする語にして、もと「をり」の謙語なりしものなれど、中古より「あり」の一般の用法を代表する謙語となれり。

おのれが許にめでたき侍り。

(枕草子)

こよひかの宮にまゐるべく侍り。

この語は現代の文章にも口語にも用ゐることなし。

古くは「いまそかり」といふ敬語ありてこの活用なりき。今それを説かず。

一一一「あり」は上に形容詞を受けその連用形の語尾「く」と熟合して「かり」といふ形をなすことあり。今これを形容存在詞といふ。

かくの如きは現代の文章にも盛んに用ゐらる。従來の文法家は多くは之を輕視せりき。余は教科書には之を形容動詞といひてはやく之を説けり。この語の用例

産物は國々の習慣風土によりて同じからず。

封建時代には實業の輕視せられし事甚しかりき。

蛇を甚短しといへども蚯蚓よりは長かるべし。

稗を食料に用ゐるには糠を去ることなかれ。

この類の語の活用形は次の如し。

未然形 (終止形、連用形) 連體形

(多) から かり かる(人)

已然形、命令形

かれ(ども) かり(よ)

ありあり

形容存在詞

口語の形容存在詞

而してそれらの活用形の用法は範圍狭く、終止形、連用形は現代にては通常複語尾に接するのみなり。然れど、古代にては終止形の終止に用ゐられたるものあり。

はしたなめわづらはせたまふ時もおほかり。

(源 桐 壺)

文の道はすこしたじろくともそのすぢはおほかり。(空穂、俊蔭)

この形は「如し」のみには存せず。

一一二 口語にては上の「かり」の類は活用形の數僅に未然形、連用形の二に止まり、しかも用法甚狭し。

口語にては未然形の「から」は複語尾「う」につづきて「からう」といふ形にてのみ用ゐられ、連用形の「かり」は「さう」といふ語につづくる時に用ゐられ、複語尾「て」「た」につづくる時には音便にて促めて呼ぶやうになれり。

随分面白からう。

それは大分面白かりさうに見える。

それはそれはなかなか面白かつた。

これらの外には用法なし。或は

遅かれ早かれ出来るだらう。

の如き「遅かれ早かれ」の如きを以て口語に命令形の用法なほ存する如くに設ける人もあれど、これは文語より成れる熟語を轉用する特別の場合にして命令形として活動せるものにあらず。

一一三 「あり」は上に來る四段活用、左行三段活用の動詞と合併して「けり」「せり」

動存在詞

「てり」へり「めり」れり」となることあり。今これを動作存在詞といふ。

この種の語の用例次の如し。

後には青蘆さやさやとそよげり。

庭の眞砂いつしか霜置けるやうに白みぬ。

父は非常なる勤勉家にして多少の蓄財をなせり。

勤儉と慈善とによりて徳行を示せる結果なるべし。

一人の老翁こなたをながめて立てり。

板を浮べて手に持てるは泳がむとする人なり。

鶏を飼へり。一羽の牝鶏巢につぎ卵をかへし五六羽のひよつこをうめり。

彼が行へる善事は一二に止まらず。

かすめる空に月朧なり。

こゝに於いて農業はじめて世に起れり。

以上は四段の例にして次は左行三段の例なり。

魚貝を捕へてその食料とせり。

これ亦貯蓄の法に基せるものなり。

今日は社會の進歩著しくて人智開發の機關も完備せればその人の心が次第にて立身出世をなしうべし。

この類の語は文章にのみ用ゐられ、口語には用ゐず。而、その活用形は今日にては終止、連體、已然の三形のみ用ゐられると古くは未然、連用、命令の三形も用ゐられ、又それぞれの複語尾に接せしなり。

思ふ事なしたまへらばこがねの堂たてむ。

思ひしづめりくんじおもやせて。

これらとりおかせ給へれ。

上のあこめたゞ二つ奉り給へりたり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(給へ)ら	り	り	る(人)	れ(ば)	れ

この類の語は従來の文法にては輕視して多く之を説かず。偶々之を説くものも唯過去の語法として「り」といふ形なりなどいへるあり。されどこれは過去をあらはすものにあらざるは明なり。その之が爲に特に説けるものは良行變格再轉格などいへり。本書は之を動作存在詞といへり。その故は動詞のあらはす動作作用が今に繼續して存在するか、若くはその動作作用は既に存在せずともその結果が現に存在することをいへるものなる上に動詞と存在詞との結合なることを示すにも好都合なればかく命名したるものなり。

この類の語は古代には盛に行はれ、現代にも文章には甚頻繁に用ゐらるるものなれば、深き注意を要す。

一一四 助詞「に」又は「と」を伴へる名詞副詞が「あり」に接して形體融合して「なり」たりといふ用言をなす。これらは他語を伴ひて説明の用に供する働を有するが故に今之を名づけて説明存在詞といふ。

「なり」は「にあり」の約まれるもの、「たり」は「とあり」の約まれるものなり。この二語は共に必ずその上に名詞又は副詞を受け、それと合してはじめて用をなす、これ元來その「なり」「たり」の中に含まれたる「に」「と」がその名詞副詞の補助として用ゐらるべきものなればなり。今これらの例をあげむに、名詞を

伴へるものは

楠木正成は忠臣なり。

豪傑たり哲人たるを望まむはもとより不可なし。されど豪傑たらむとしてえせ豪傑となり、哲人たらむとして生物識となるは不可なり。

副詞を伴へるものは

氣候温和なり。

その生活や質朴なり儉素なり。

滿天地の氣象は一種の暢美なる感情を起したり。

茫漠たる平野至る所にあり。

この事判然たらば、後人の爲ともなるべし。

立ちて窓戸を掛けば星斗燦たり。

この類の語の活用は「あり」に同じけれども連用形は普通には用ゐず、僅に複語尾につづくのみなり。

未然形	なり	連用形、終止形	なり	連體形	なり	已然形、命令形	なれ(ば)
(豪傑)	たら	たり	たり	たる(人)	たれ(ども)		

「なり」と「たり」とはその上に來る名詞には同一なるものを用ゐることあり。この故にその意義上の差あるを知るべし。即ち「なり」は内面的にして主として斷定をあらはし、「たり」は外貌的にして主として資格又は状態をあらはせり。

我は子なり。

我は子たり。

これにて一斑を知るべし。この區別は畢竟「に」と「と」との區別に基づくものなり。副詞に於いては「に」を伴ふものは「なり」に伴ひ、「と」を伴ふものは「たり」に伴ふ。これらの事は副詞の條に説くべし。

従來はこの「なり」「たり」を助動詞と稱せり。然れどもこれらは他の語に伴ひて用を完くすること「如し」「す」の如くなれば、それらを單語と認めたと同じ程度にて單語と認めて差支なきものなるのみならず、これらを用言の補助成分たる複語尾とは決して一列にとかるべきものにあらず。

一一五 口語にては「たり」は用ゐず。「なり」は用法と活用形との上に特別の状態を呈せり。

この「なり」は口語にては前代の形の残り存せるに止まりて、その活用形の上にも用法の上にも頗る變化あり。今先その用例をあげむに、未然形の「なら」は次の如く、

英書ならば讀めるが獨逸書では讀めぬ。

雨天なら止めやう。

以上は體言につくものにして、

いやならよせ。

靜かなら寝つかれやう。

は副詞につくものなり。連用形の「なり」は體言につきて、

僕なり君なりだれか行かう。

の如くに用ゐられ、又終止形の「なり」は終止に用ゐらるる事なくして體言につきて

何なりと召しあがれ。

代人なりともよこせばいふ。

といふ形あり。これは本来終止形に「と」「とも」といふ助詞のつきたるものなれど、口語にてはかくの如く用ゐるより外に用法なし。連體形は「なる」の「る」を略きて「な」としてのみ用ゐられ、しかも、副詞にのみ附屬するなり。

おだやかな人

静かな夜

綺麗な夜

(「そんな」「それなる」「こんな」「これなる」「あんな」「あれなる」「どんな」「どれなる」などの「な」もこれなり。これは今日は連體にのみ用ゐたれど、古くは終止にも用ゐたり。

いかさまどこやらで聞いたやうな。

(狂言記、宗論)

それはあまりにきふなといへば。

(昨日は今日の物語)

已然形の「なれ」は

左様なれば頂戴いたします。

好きなばこそ上手になつた。

などいふ如き特別の場合にのみ用ゐらる。命令形はなし。今これらの活用形を一括して表示す。

副詞	體言	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
	なら(ば)	なり(重ぬる)	なり(時のみ)	なり(「と」「とも」に)	な	なれ(ば)

別村

一一六 口語にて説明存在詞と稱すべきものは「だ」ですの三語なり。

「である」は助詞の「で」と「ある」との連語にして各その固有の性質と意義とを以て用ゐらるるものにして説明陳述の用をなす。その下に「ます」といふ敬語を加ふる時は「であります」となる。

「だ」は「である」の約まりて下略せられたるものにして關西地方にては「ぢや」といふ。この「だ」は専ら終止として用ゐられ、時としては連體形としては用ゐらる。この終止形なるは

ことしは豊年だ。

楠木正成は忠臣だ。

ほんとに寒さうだ。

その連體形なるは

あの人が嫌いだものですから。

ほんとにうまそうだこと。

などなり。

「ぢや」も亦「である」の約略にして今は西國にのみ専ら用ゐらるるものなるが、恐らくは「だ」の本源の形なるべし。

高野山蓮華空院に眞田安房守の書いた豊公の肖像があるといふ事ぢや。

木村重成は紀州那賀郡猪の垣に生れた男ぢや。

「國に於いても一村落に於いても一國に於いてもその理は皆同様ぢや。

この「ぢや」は今は連體形として用ゐぬやうに考へらるるが、古くは

つれなきは尤も、賤の身ぢや程に。

かの「おやぢやもの」、「兄ぢや人」などいへるものも亦これなり。

「です」はその起源未だ詳からず。恐らくは「であります」の約まれる結果かくなれるものなるべし。これは「だ」に對して敬意を加へたるを異なりとす。これは次の如く

それはありがたい事です。

私も日本男子です。

神田祭は随分賑やかです。

もうこれで結構です。

この「です」は又稀に連體形として用ゐることあり。

それは自分の子ですもの、かあいがらぬ事はありませぬ。

近頃は少しは御ひまですか。

又「でし」といふ連用形ありて「て」「た」といふ複語尾につづくることあり。

それは外の事でした。これだけが主なる事です。

出来もみごとでしてみんなほめて居ました。

なかなか面白い事でした。

この時は海は穏かでした。

又「でせう」といひて推量をいふ形あり。

あれは松の樹でせう。

それはきつと賑かです。

これは「でせ」といふ未然形ありてそれに「う」のつけるものなるべし。さればこれが活用形は次の如くにして

未然形	連用形	終止形	連體形
でせ(う)	でして(た)	です	です

已然形は亡びたりと見ゆ。

一一七 存在詞は「あり」の一なるがその用ゐらるるにあたりては、別に形容存在詞、動作存在詞、説明存在詞の三種を生ずること上の如し。而これらは皆良行變格にして終止形が「り」なるなり。

良行變格の特徴は終止形と連用形とが一にして共に「イ」韻なるにあり。その他に於いては普通の四段活用と異なる所なしとす。されど、その活用形の用途は、種類によりて不完全のもの少からず。即、前數條に之をとけり。今便宜の爲に之を一括して次に示す。

存在詞(有)	未然形	連用形、終止形	連體形	已然形、命令形
形容存在詞(善)	ら	り	る	れ
動作存在詞(爲)	から	かり	かる	かれ
説明存在詞	せら	せり	せる	せれ
	なら	なり	なる	なれ
	たら	たり	たる	たれ

存在の「な
り」及び「か
り」「さり」

一「八」ありの複合よりなれるものに以上の外に存在をいふ「なりあり、又
「かかり」「しかり」「さり」といふあり。いづれも文語なり。

存在をいふ「なり」とは場所を示す體言の「に」助詞を踐めるものが「あり」に熟合したるものにして普通
には連體形のみ用ゐらる。

天原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。
ここなる門は誰が門。

これらの「なる」は説明存在詞の「なり」と意義異なれば混同すべからず。

「かかり」は「かくあり」の約まれるものなり。「しかり」は「しかあり」の約まれるものなり。「さり」は「さ
あり」の約まれるものなり。いづれも「あり」の性質を存して終止形は「り」なり。これ普通の動詞にあらず
して良行變格たるなれば、注意すべし。

とあればかかりあふささるさにて。
とありともかかりともよき事はありなんや。
いとかからでおいらかならましかば。

いかではたかかりけんと。
かかる人も世に出でおはするものなり。

かかれどもおぼつかなくもおもほえず。
しかりとてそむかれなくにことしあればまづなげかれぬあなう世の中。

横座の鬼しかるべし／＼といひて。
(源、帚、木) (落、鞋、一) (源、帚、木) (同、上) (源、桐、壺) (和、泉、日記) (古、雜、下) (宇、拾、一)

しかれどもひねもすになみかぜたたず。
おいさりさりとうなづきて。
さらばその宮づかひ人ななり。

さりぬべきすこしは見せむ。
水の心ばへなどさる方にをかしうしなしたり。

されどこの扇の尋ぬべき故ありて見ゆるを。
今この三語の活用形を表示すれば次の如し。
(土、佐、日記) (源、玉、葛) (源、夕、顔) (源、帚、木) (源、帚、木) (源、夕、顔)

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
かから	かかり	かかり	かかる	かかれ
しから	しかり	しかり	しかる	しかれ
さら	さり	さり	さる	され

かくの如くこれは複合せるものなれど、形體上單語と見ゆるものにして純然たる用言たるものなるに、これ
に「ば」「ど」「ども」といふ助詞のつけるものを以て接續詞なりとする説從來より盛行はる。この例を
いはば、

かからば かかれど かかれば (和田氏文典)
しからば 然れども (岡田氏文典)
さらば されど されば (和田氏文典)

の如きこれなり。これらは文章の意義上の媒介をなすには相違なきものなれど、接續詞とは稱すべからざ

るなり。況んや一の用言を種々に分ちてその本體を顧みざるが如きは文法學上甚だ不都合の事なりといふべし。本書に之を特に説くはその本體を明に示さむが爲なり。若上の如きを接續詞とすべしとせば、この外

かかりとも しかりとも さりとも

なども接續詞といふべきものとなる。かく一の用言の用法のある場合を以て別なる單語とすることはかの形容詞の連體形たとへば「よき」を形容詞、終止形「よし」を動詞、「よく」を副詞としたる舊時の直譯文法と相距る事遠からぬものなり。かくの如き僻説は文運の進める今日にありては採用せらるべき事にはあらざるなり。

一一九 存在詞にも音便あり。この現象は存在の「あり」及び形容存在詞の連用形にのみあらはる。

この音便は「し」「き」の活用「て」「つ」等(口語にては「た」にも)につづくる時「り」を略して促め呼ぶものにして

命あつての物種
なかつしこと。

カヒナキ命ノ惜カツルモ歸リ上リタルウレシサモ今一度見ヘ奉ムカ爲ニコソ有ツルニコハイツクヘツヤ

(延慶本平家、六末)

口語にて「あつた」「よかつた」などいふもの即ちこれなり。

さてかく音便は上の二種にのみ限れるやうなるが、既に例に引ける「こんな」「そんな」「あんな」も亦實

存在詞の音便

は音便たるなり。而この他には存在詞の類に音便なし。

第十二章 複語尾總説

一二〇 動詞存在詞の本來の活用のみにて十分に陳述の作用を果すこと能はざる場合にその下に附屬して種々の意義を用言に補ふ特別の語尾を複語尾とす。

この複語尾と稱するものは、普通文に用ゐるものとしては既に述べたる如く

る	らる	す	さす	しむ
む	ず	ざり		
たし	き	けり	つ	ぬ
べし	まじ	らし	らむ	めり
				たり

等なり。これらは近來の文法書には助動詞と稱せられてあれど、單語にあらずして用言の語尾の複雑に發達せるものなること既にいひし所の如し。而その助動詞といへる名稱は英文典の術語の譯語を襲用せるものなれど、その實を照すに吻合せぬものなることこれ亦既に述べし所なり。

元來これらは古くは「てにをは」のうちに入れ、「働くてにをは」又は働辭などいはれたるものなり。本居春庭の詞通路にてはこれらのうち「る」「らる」「す」「さす」等を以て用言の語尾と見たり。義門は之を用言のうちに收め、富樫廣蔭は之を動辭と稱し、大槻氏に至りて助動詞といへり。されど助動詞の名は實と吻

複語尾

合せぬが故に用ゐるを避くべきものなり。次に之を動辭と稱するものは「や」「か」「かな」「は」「も」「ぞ」「が」「の」「を」「に」「より」等を靜辭として更にそれらを一括して助辭とするものなり。この見解は助動詞説よりは國語の性質に近づきてありといへども、かの所謂靜辭なるものは吾人の助詞と稱するものにして他の種の單語の間に介在してそれらの關係を示す者なるを以て抽象的ながら單語と目せらるるにこれは用言の語尾にのみ附屬してその用言の陳述作用の委曲を盡さしむる用をなすに止まれるを以て用言の附屬物たるに止まれり。されば吾人はこれを語尾の複雑に發達せるものにして語尾に更に附屬する語尾の意を以て假にかく名づけたり。而これらはその附屬する語尾にも一定の約束ありて意義と共に動かすべからぬ規定あり。

一一一 複語尾は形體上獨立せるものにあらずしていつも用言のある活用形に附屬して離れず、中間に他の語を容るることを許さずして常に連續體をなすものなり。

ある用言の活用形とそれに附屬せる複語尾との關係は緊密にして決して離れうべきにあらず。この故にこの間に他の語の入ること決してなきものなり。即ちこの場合にはその複語尾と上の活用形とは一體となりて離れず、その附屬せるままにて一の用言と見るなり。この故に分別書法をとりて各單語を分離して記載する場合にもこの複語尾は本幹たる用言の活用形と決して分離してかきあらはすべきものにあらざるなり。これかの助動詞と全く性質を異にする點の要點なり。

かくの如く國語の複語尾と漢語英語などの助動詞とは、頗る性質を異にするを以てかれらの助動詞と同一列に説くことを得ざるものなり。これらの點を少しく説かむ。漢語にて助動詞と稱せらるべきものは

複語尾と用言の關係

- 可、宜、當、應、須、の類(「べし」の意を基として多少の異同あり。)
- 將、且の類(「む」の意を基として多少の異同あり。)
- 不、未、非、弗、勿、莫の類(「ず」の意を基として多少の異同あり。)
- 見、爲、被、所の類(受身の「らる」の意を基として多少の異同あり。)
- 使、令、命、教の類(使役の「しむ」の意を基として多少の異同あり。)

英語にて助動詞と稱せらるゝものは

shall, will, may, can, must, ought, 等にしてこの外 be, do, have は動詞としても助動詞としても用ゐらるゝものと稱せらる。これらのあるものは、又我國語の複語尾にて代表しうるものあり。たとへば豫想の shall 執意の will 許可の may 能力の can 義務の ought 必然の must 受身の be 過去の have は我が複語尾にてあらはしうることあり。これを以て助動詞といへば略同一のものやうに思惟せらるべしといへども、必しも然らず。既に述べたる如く國語の所謂助動詞と稱せらるゝものは實は語尾の複雑に發達したるものにして動詞の活用形の一部なりとす。この故にその所屬に一定の法則ありて動かすべからざるなり。未然形所屬のものは連用、終止に附屬せず。連用形所屬のものは未然、終止に附屬せぬが如し。又之を本來の用言との間を離して中間に他の語を介むこと能はざるなり。この故にこの複語尾附屬したるまゝにて一の用言とみざるべからず。漢語英語の助動詞は一の單語にしてしかも主たる動詞を助くるものなり。而主たる動詞とは形體上の連結なきものなり。この故に、次の如き形は常にあらはるゝなり。

將以求吾所大欲也、(孟子梁惠王章上)

I shall soon go.

所屬上の分類

かくの如き形は決してわが國語の複語尾にあらはるゝことなしとす。これ本節の説を要する所以なり。

一 二 二 複語尾はその附屬する本幹たる用言の活用形に一定の規律あり。即ち「らる」「す」「さす」「しむ」「す」「む」「む」等は未然形附屬の複語尾にして「き」「けり」「たり」「ぬ」「たし」等は連用形附屬のものなり。而「へし」「まじ」「へかち」の類は動詞には終止形に存在詞には連體形に附屬するなり。

複語尾は所屬よりすれば上の三種類となるなり。而してこの三種の外に複語尾の類なし。次に上の三種の用例を示さむ。

行か(未然形)

る(「らる」は四段、變格以外に)
す(「さす」同上)

未然形附屬

行き(連用形)

き
けり
たり
ぬ

連用形附屬

行く(終止形)「ある」

たし
べし
らし
まじ
らむ
めり
べかり
まじかり

終止形(連體形)附屬

從來の所謂助動詞説明の方法はそれらの意義を主題として立てたるものなり。然れども文法は語を主として理法を説く學にして理法を主として語を説く學にあらざるを以て意義を主とする方法は顛倒せるものなり。ことにこれらは單語にあらずして用言の活用形より導かるべきものなれば、本文の如く、活用形の所屬を以て分類する時は最も記憶し易くしてしかも整然と秩序を立つることをうべし。從來文法學の嫌はれたるも亦かく抽象的の空理を論じたるによれり。學者猛省せざるべからず。

一 二 三 複語尾も亦活用を有す。その活用は下二段に似たるもの最も多く、形容詞に似たるもの之に次ぎ、又奈行變格に似たるもの四段に似たるもの及び特別の形あるあり。又良行變格の形式なるあり。大略上の六種に分つを得べし。而その活用形の完備せぬもの少からず。

下二段活用に似たる複語尾とは

語尾の活

る (行か)れ る るる るれ
 らる(受け)られ らる らるる らるれ
 す (行か)せ す する すれ
 さす(受け)させ さす さする さすれ
 しむ(行か)しめ しむ しる しむれ
 つ (行き)て つ つる つれ

等なり。形容詞に似たるものとは

たし(行き)たく たし たき たけれ
 べし(行く)べく べし べき べけれ
 まじ(行く)まじく まじ まじき まじけれ

等なり。奈行變格に似たるものとは

ぬ (行き)な に ぬ ぬる ぬれ ぬ
 む (行か)む む め める めれ
 らむ(行く)らむ らむ らめる らめれ

等にしてこれは「ま」「み」の二形なし。特別の形なるものとは

す (行か)す ぬ ね
 き (行き)き し しか
 らし(行く)らし らし らし

にして用言の本幹には類なきものなり。良行變格の形式なるものとは多くは複語尾と「あり」との合併よりなれるものが後に複語尾として用ゐらるるに至りしものにして、いづれも存在詞の意義を含めり。それらは「めり」「ざり」「けり」「たり」「べかり」「まじかり」等なり。

「めり」は「べし」の語幹「べ」と「あり」との合併より來れるものなるべくして
 (行く) めり める めれ
 の三形ありて「めら」なし。

「ざり」は「す」と「あり」との合併より來れるものにして次の活用をなす、
 (行か) ざら ざり ざる ざれ
 「けり」は「き」と「あり」との合併より來れるものにして
 (行き) けり ける けれ
 の三に活用して「けら」の形今存せず。(古くは用ゐたり。)

「たり」は「つ」と「あり」との合併より來れるものにして次の活用をなす。
 (行き)たら たり たる たれ

「べかり」は「べし」と「あり」との合併より來れるものにして次の活用をなす。
 (行く)べから べかり べかる べかれ
 今は「べから」の形のみ専ら用ゐる。

「まじかり」は「まじ」と「あり」との合併より來れるものにして
 (行く)まじから まじかり まじかる まじかれ

複語尾の活用形

今多くは用ゐず。

一二四 複語尾にして六種の活用形を完く備ふるものは「らる」「す」「め」「し」「む」「ぬ」「ざり」の八にしてその他は多くは不完全なり。

六種の活用形を完く備ふる複語尾の一覽表次の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(書か)	れ	れ	る	るる	るれ	れ(よ)
(受け)	られ	もら	らる	らるる	らるれ	られ(よ)
(書か)	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)
(受け)	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ(よ)
(書か)	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ)
(書き)	て	て	つ	つる	つれ	て(よ)
(書き)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
(書か)	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ
(書か)	す	す	す	ぬ	ね	
(書き)	た	た	た	たる	たれ	
(書き)	た	た	た	たき	たけれ	

右のうち「ぬ」「ざり」の命令形はそのままにて用をなし、他の命令形は助詞「よ」を加へて用をなす。活用形の不完全なるものうち、命令形のなきもの次の如し。

(書く)	べく	べく	べし	べき	べけれ
(書く)	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ
(書く)	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ
(書く)	まじから	まじかり	まじかり	まじかる	まじかれ

右のうち「たり」は古代にては「たれ」といふ命令形用ゐられたりしなり。次には未然形と命令形とを缺けるものあり。「けり」「めり」これなり。

	連用形	終止形	連體形	已然形
(書き)	けり	けり	ける	けれ
(書く)	めり	めり	める	めれ

この「けり」は古代には未然形の「けら」も用ゐられたりしなり。次には未然形と連用形と命令形とを缺けるものあり。これには「む」「らし」「き」「らむ」等あり。

	終止形	連體形	已然形
(書か)	む	む	め
(書く)	らむ	らむ	らめ
(書き)	き	し	しか
(書く)	らし	らし	らし

一二五 複語尾の活用形的作用はなほ用言の本幹の活用形的作用に同じ。されどこれにはその作用、用言の本幹に比して自由ならざる點あり。

複語尾の活用形的作用

複語尾に複語尾を重ね用ゐること

複語尾の活用形のうちには缺けたるものあることは前節に述べたる如くなるが、この事既にその活用形の作用の存在せぬを示すものなるが、活用形の存在せらるるうちにてもある作用の缺けたるもの少からず。たとへば未然形は「ば」助詞に接する外「ず」「む」などの複語尾に接するものなるが、「れ」「られ」「す」「さす」「しむ」等にはこの作用あれど、「ず」「べし」「まじ」等の未然形にはこの作用なきが如く、又連用形は下に用言を連用ゐることをうるものなれど、「ざり」にはこの作用なし。これらの詳細は下に自然に明にすべし。

一 二六 複語尾の各活用形には又その活用形所屬の複語尾を伴ふことあるものなり。

一の複語尾を附屬せしめてもたほ意義を十分にあらはし得ぬ時は更にその下に他の複語尾を附屬せしむることあり。この時にはその複語尾の未然形には又未然形所屬の複語尾附屬し、連用形、終止形にも亦連用形、終止形所屬の複語尾附屬す。その例次の如し。

丘上の老松は行平の月見の松と名づけられたり。

かばかりの怒を忍びかねる汝とは思はざりき。

しかれどもこれらの所屬は前章にいへる如く、用言の本幹とすべて同様なりといふべからずして不完全の點少からず。それらは下に自然に説く所あるべし。

上の例は複語尾二個の連続なるが、なほ三個以上、連続せるものあり。それらも亦各活用形よりその活用形所屬の複語尾に連ぬるものにして一定の井則ありて動かすべからず。それらの例

早く母に別れ祖母の手に教育せられかりき。

殿下は御課業了らせられて雪中に還啓あらせられぬ。

語と尾の口の差文語と存在

文語と口語と形のかはれる複語尾

一 二七 複語尾は文語と口語との間に著しき差違あり。この差違の要點は次の五項なり。

- 一、意義用法のかはれるもの、
- 二、形のかはれるもの、
- 三、活用形のかはれるもの、
- 四、文語になくして口語にのみあるもの、
- 五、文語にのみありて口語になきもの、

意義用法のかはれるものは文語の複語尾を説く際に附説すべく、その他のものは以下に要領をあぐ。

一 二八 文語の複語尾の「む」は口語にては「う」となり、「まじ」は「まい」となれり。

多大なる効果あらしめざるべからざる念愈切なり。

やがて之を印に彫らせられきとなり。

この兒才ありいかにも師を擇びて學ばしめらるべし。不十分ながらも漢文を用ゐしめたりき。

人をして殆んど蕭條の氣に堪へざらしめむとす。

その勢實に當るべからざりき。

さまざま習はせられたれど何一つおぼえず。

文語の複語尾の「む」は口語にては「う」となりて、終止連體の二形に用ゐられ、その他の形を有せず。この「う」は四段及び變格の未然形に附屬する際の形にして

行かう
死なう
有らう

にしてその他の活用には「よう」といふ形にて用ゐらる。これその未然形より「う」につづくる際に「イ」「エ」の韻と「う」との混和によりて起れる現象なり。

受けよう
起きよう
着よう
爲よう

の如きこれなり。加行三段にては

来う
といふを普通とするに、まま
こよう

とすることあり。然れども音の變化より觀察すれば、「こう」といへるが正しき形なりとすべし。

文語の複語尾の「まじ」は形容詞の「しく、しき」活用に似たる形のものなるが、口語にては「まい」となりて終止連體の二形に用ゐられ、その他の形を有せず。

文語と口語
のかはれる
複語尾

とても間にあふまい。
讀むまいものでもない。

こは「まじ」より「まじい」となり、次に「まい」となりたるものなり。

一三九 文語と口語とによりて活用形のかはれる複語尾は「らる」「す」「さす」の四は口語にては下一段活用となり、「たし」「らし」の口語の形容詞の如くなれると、「たり」「た」となり、「つ」の連用形のみ残りて他の失せたる如きを主たる現象とす。

文語の複語尾の「る」「らる」「す」「さす」はいづれも下二段活用の形なるものなるが、口語にてはいづれも下一段活用の形となれること文語の下二段が口語にて下一段となれるに似たり。即ちこれらは「る」が「れる」「らる」が「られる」「す」が「せる」「さす」が「させる」となれるなり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(書か)	れ	れる	れる	れれ	れ(よ)
(受け)	られ	られる	られる	られれ	られ(よ)
(書か)	せ	せる	せる	せれ	せ(よ)
(受け)	させ	させる	させる	させれ	させ(よ)

「たし」は文語にては形容詞の「くしき」活用の形なるが、口語にては又形容詞の口語の活用の如くなれり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(行き)	たく	たく(う)	たい	たけれ

「らし」は文語にては形に變化なくして終止、連體、已然の三形の用をなせるに、口語にては形容詞の如く

に活用せり。

尾か有るらしく見える。

笛を吹くらしい。

勝つらしい様子だ。

而、上の如く、連用、終止、連體の三活用形を有するなり。然るにこの「らし」をば、文章にて次の如く用ゐること往々あり。

雨降るらしく思はる。

人あるらしき様なり。

これは「らし」をば文語の形容詞と同じ活用にしたるものなるが、これは近代の文語に見ゆるところにして平安朝語を標準とする文語の文法には認められぬものなり。然れど、現代の文語としてはこれも或は認めらるべきものなるべし。然るときはこの複語尾は

連用形 終止形 連體形
(行く) らしく らし らしき

の如き活用形となる。

この「らし」と紛れ易きは體言又は副詞等をうけて形容詞をつくる接尾辭の「らし」なり。それは

男らしい 豊年らしい

ほんとうらしい たしからしい わざとらしい

などの例によりて見るべく、この複語尾の「らしい」とは混同すべきものにあらず。

「たり」は文語にては良行變格の活用をなせるに、口語にては終止形、連體形にて「た」となり、形の上にも意義の上にも用法の上にも頗る變化を有せり。

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形
(書い) たら たり た た たれ

これを讀んだらおもしろからう。

もううちへかへつたらう。

飲んだり食つたり十分腹をこしらへた。

昨日午後三時に立つた。

昨日紹介しておいた人が来たか。

昨日行つたれば居なかつた。

「つ」は文語にては多行下二段の活用をなし、六種の活用形を完備せるものなるが、口語にてはその連用形の「て」のみ用ゐられてその他の活用形は用ゐらるることなし。

一三〇 文語になくして口語にのみある複語尾は「ない」といふものこれなり。

この「ない」といふ複語尾は口語の形容詞と同じく次の如くに活用す。

連用形 終止形 連體形 已然形
(知ら) なく ない ない なけれ

この複語尾は未然形に附屬して打消の意をあらはすものなり。

この「ない」は不存在をいふ形容詞の「ない」と混同し易し。かれは獨立の單語にしてこれは動詞存在詞

口語にのみ
ある複語尾

等の未然形附屬の複語尾なり。されば

人が居ない。

山が見えない。

よくは見られない。

等の「ない」は複語尾にして

深山なれば助けてくれる人がない。

それはよくない事だ。

そんな事は我輩は行ひたくない。

などの「ない」は形容詞なるなり。

一三二 「ず」の如き複語尾は活用の上に多少の差あれど、文語と口語との差違の甚しからぬものなり。

「ず」といふ複語尾は口語にても文語にても「ず」「ぬ」「ね」と活用するを以てこの點にては大差なきものとす。然れど、各活用形につきて見れば、相違あるなり。之を對照すれば次の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
文語(書か)ず	ず	ず	ぬ	ね
口語(書か)〇	ず	ぬ	ぬ	ね

即ち口語にては未然形なく、終止形も連體形と同じく「ぬ」の形を用ゐることとなるなり。

一三三 「しむ」「けり」「き」「だつけ」「たつけ」「け」は恐らくは「けり」の變形せるものなるべきなり。

「ず」の文語と口語

文語にのみ存する複語

語尾は文語にのみ存して口語には用ゐず。

「しむ」は口語に用ゐぬやうになるは既に久しき事と見えたり。之にかふるには「せる」「させる」を用ゐる。

「ざり」は現今土佐などの方言に「行かさつた」「知らざつた」など用ゐる點に於いて全く亡びたりといふべからねど、標準語には全く用ゐることなし。上の「ざつた」は文語の「ざりき」に相當するものなり。

「けり」「き」の二も亦口語には用ゐず。ただ關東などの方言に「さうだつけ」「面白かつたつり」「行つたつけ」「だつたつけ」「たつたつけ」の「け」は恐らくは「けり」の變形せるものなるべきなり。

「けむ」は上の「き」と「む」との結合によれるものと思はるるものなるが口語には全く用ゐることなし。

「ぬ」は全く口語に用ゐることなし。

「べし」は口語にて關東「べい」と呼ばれる「べい」として存せり。この「べい」は「べき」の音便として既に平安朝に盛に用ゐられ近世にては關東の方言として古來名高きものなれど、全國一般には用ゐられぬものなり。この「べい」は終止連體の二形に用ゐられ、一方にては又文語の「べく」「べき」も往々口語中に混用せらる。

なるべく早くお願ひます。

然るべき人に頼ませう。

遣るべきものなら早く遣りませう。

などこれなり。然れども、口語としては標準語に採用せらるること覺束なし。

「らむ」も亦口語には用ゐず。但土佐などの方言に「あるらう」「面白かつたらう」などいふ「らう」は「ら

複語尾の性質上の分類

む「つらう」は「つらむ」の變形せるものにして全然存せぬにあらず。然れど、全國に存するにもあらず、又一般に用ゐらるることもなきなり。

一三三 複語尾は之をその性質によりて分類すれば、次の二大別を生ず。

一、屬性の表現の方法に關するもの

二、統覺の作用に關するもの

複語尾をばその所屬の所用形によりて大別するを可とすること既に述べたる所なるが、個々の複語尾を論ずるに及びてはおのづからそれらの性質にも論及するを必要とす。この故にここにそれらの研究の基礎としてこの大別をなす。

さて上に示せる二大別を生ずるは素用言の本性を因とし、用言の本幹と複語尾附屬のものとの對比を緣とす。即用言の本幹たる第一語尾はその屬性の直接に作用せること又單純なる陳述をあらはすが、ここにその屬性の直接に營まれざるものをあらはし又その統覺の運用を委曲に陳述すべき必要生じ来る。この際にあたりて之をあらはすには複語尾によらざるべからず。かくて用言の所因は屬性と統覺との二者なるが故にそれらに助くるものにも亦二者の區分を見るに至る。かくの如くなれば、この二者は必然的に區分せらるべき理由あり。然るに世の語學者この大別に着眼せずして漫然助動詞を分類せるものあるは實に系統なきの甚しきものとすべし。

一三四 屬性の表現の方法に關する複語尾は「る」「らる」「す」「さす」「しむ」の五なり。これらはいづれも未然形に附屬してその屬性の表現が間接なることを示す。

屬生の表現に關する複語尾

所謂受身、使役等これなり。

用言の有せる屬性はその主者によりて直接に行はるるものと主者が直接に行ふものにあらざるものとの二種の區別を生ずべし。その主者によりて直接に行はるるものは用言の第一語尾を用ゐるものにしてその間接に行はるるものは複語尾を附屬せしめてあらはすなり。この故に屬性の表現の方法に關する複語尾は即ち間接の作用をあらはすものといふを得べし。

間接作用といふに亦二種あり。一は狀態性の間接作用にして文の主者が、その作用の主者にあらずして對者ありてその者が、實際上の作用の主者として文の主者にその作用を與へる場合、又は文の主者は其の作用に對して主者たれどもその作用は現實となりてあらず、唯行はるべき狀態にあるを示す。その甲の場合を受身といひ、乙の場合を可能といふ。而して共に主者その者の狀態を示す傾向強し。故に狀態性の間接作用といふ。これをあらはすに用ゐる複語尾は「る」「らる」の二なり。

他の一は發動性の間接作用にして文の主者その者は間接ながらその作用を起さしむべき主因となりてしかも直接に自ら作用を營まず、他の者に營ましむることを示すをいふ。所謂使役作用にして之をあらはすに用ゐる複語尾は「す」「さす」「しむ」の三なり。

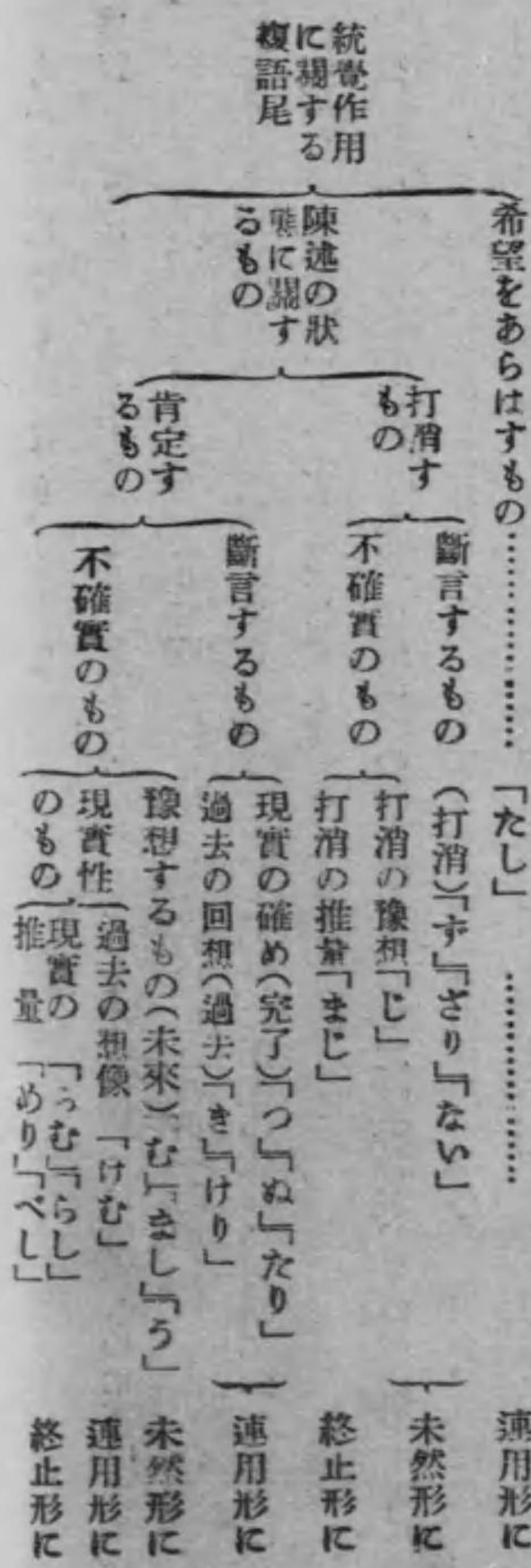
以上「る」「らる」「す」「さす」「しむ」の五は受身、可能、使役の意義上の差あれどいづれも間接の作用を表現するものとして未然形に屬する複語尾たる點に於いて一致す。

一三五 統覺の作用に關する複語尾は上の五の外すべての複語尾にして、たし「の如く希望をあらはすものあり。」「す」「さす」の如く打消をあらはすものあり。」「む」の如く豫想をあらはすものあり。」「さ」「けり」「けむ」の如く回想をあらはすものあり。」「つ」「ぬ」た

統覺の作用に關する複語尾

りの如く陳述を確むるものあり。「らむ」「らし」「めり」「べし」の如く推量をあらはすあり。

統覺の作用に關する複語尾は上の間接作用の複語尾五個以外のものすべてを含むものなるが、これには思想上おのづから分類の順序あり。即ち之を二大別して希望をあらはすものと陳述の状態に關するものとの二とし、その陳述の状態に關する者は又打消すものと肯定するものとの二大別をなす。その打消にも斷定するものと不確實のものとなり。次いでその肯定するものにも亦斷言するものと、不確實のものとなり、その確に斷言するものに亦現實の確めに關するものと過去の回想に關するものとなり。この現實の確めに關するものを世に完了といひ、過去の回想に關するものを世に過去といふ。その不確實のものとするうちにも現實ならぬを豫想するものと、現實性のもとなり。その豫想をば世に未來といへり。さてその現實性のもにして不確實のものは又過去の事實と想像するものと單なる推量との二あり。



上表のうち打消すものと豫想するものとの二は未然形に屬し、推量するものはすべて終止形（良行變格は連體形に）に屬し、その他はすべて連用形に屬す。この故にそれらの區別亦整然たり。

第十三章 未然形所屬の複語尾

一三六 未然形に屬する複語尾は間接作用をあらはす「らる」「す」「さす」「しむ」及び確に打消す「ず」「ざり」「ない」現實ならぬ事を豫想する「む」「まし」「う」豫想して打消す「じ」の十二なり。

複語尾の分類の方法は上に述べたる如く種々あれど、研究上最も便利なるはその屬する活用形によるにあり。この故にここにはこの類別によりて各複語尾につきて説くべし。さてその未然形に屬するものは本文にいふ通り、文語に用ゐるもの十個、（このうち活用形かはりて口語に用ゐるあり。）口語に專用するもの二個なり。而これら顧るにこの未然形所屬の複語尾は間接作用をあらはすものすべてと、統覺作用に關するものにては「ず」「ざり」「じ」「む」「う」「ない」等共に現實に現れをらぬ事に關するものにして自ら二種をなすべき勢にあり。

一三七 「らる」と「らる」とは共に下二段活用形を有し、意義と作用とは全く同一なり。然るにこの二者並び存する所以は「らる」は四段活用及び變格活用に屬し、「らる」は三段、二段、一段の各活用に屬するの差異あるによる。

「る」「らる」の活用の形は次の如し。

未然形所屬の複語尾

「らる」「らる」の差異

未然形、連用形、命令形	終止形	連體形	已然形
れ (ば) (給ふ) (よ)	る	る (もの)	るれ (ば) (ども)
られ (ば) (給ふ) (よ)	らる	らる (人)	らるれ (ば) (ども)

この所屬の活用之差異の關係は抽象的に見る時は頗興味あるものにして之を一括すれば次の如し。

四 段	行か(ア)る	加行三段	こら(ア)る
奈行變格	死た(ア)る	佐行三段	せら(ア)る
良行變格	有ら(ア)る	下二段	受けら(ア)る
		上二段	起きら(ア)る
		上一段	きら(ア)る
		下一段	けら(ア)る

即ち用言の本幹の末に「ア」韻あるものには「る」屬し、末に「ア」韻なきものは頭に「ア」韻ある「らる」屬す。この故に中間に必ず「ア」韻一箇あることとなる。これを以て見ても「る」と「らる」とは本來一なりしものが、音の都合によりて一方に省略若くは増加の行はれたるものならむと思はるれど、未だその起源を詳にせず。さてかく複語尾の所屬などの現象に見ても余が、三段と變格との二者を區別して説けることの便なるを知るべきなり。

一三八 「る」の意義作用は四様あり。その最も根本的なりと認めらるる普通のものを受身を表はすにあり。而それより一轉して自然にその事の現はるる勢にあるを示し、再轉して文の主體に或る能力の存する義を表はし、三轉し

「る」の意義と作用

て敬語に用ゐらる。

- 一、受身をあらはせるもの用例次の如し
人に問はるゝ時いかゞ答へむ。
自ら信する者は毀らるれども怒らず。
徴せられて士班に列せらる。
- 二、自然の勢を示せるもの用例次の如し。
坊主山の早蕨かとも怪まる。
眺めらるゝは故郷の空なり。
- 三、能力の文主に存する義をあらはせるもの用例次の如し。
その面白さ筆紙には盡されず。
我もこの問題には答へらる。
- 四、敬語として用ゐられたるもの用例次の如し。
生きては王事に勤勞せられ、死にては國家の鎮護となられしなどその功績のほど何にかたとへむ。
まづ靜まられよ。
ともかくも試みられよ。

以上の四様のうち、第一の受身には必ず、客語の存する筈なり。客語とはその動作作用の事實上の主者をあらはす語なり。一の例にいへば「人に」などこれなり。(この客語の事は下に詳に説くべし)その他の場合には客語の存すること無きを以てその區別を明にするを得べし。

「れる」「ら
れる」「ら

一三九 口語にては「る」「らる」は一段活用となり、「れる」「られる」といふ形を取れり。而、その所屬と意義作用とは大略同じ。

「れる」「られる」の活用形は次の如し。

未然形、連用形、命令形	終止形、連體形	已然形
れ	れる	れれ
られ	られる	られれ

この一段活用の形は中國四國以東すべてに行はれ、九州にてはなほ二段活用に用ゐる所多けれど、福岡、小倉、唐津、延岡等には一段として用ゐるなり。

この「れる」「られる」が、四段活用の語の本幹と結合せるものは俗語にては往々次の如き形となれり。これらは成語と見るべきものなり。

「打たれる」——「うてる」 「書かれる」——「かける」
「よまれる」——「よめる」 「勝たれる」——「かてる」

而、この形は主として能力をあらはす場合に行はるるなり。

又左行三段活用の語の本幹と結合するものは未然形よりする

せられ せられる せられれ
の外に連用形より受けて
しられ しられる しられれ

の形をなすことあり。而又更にこの「せられ」又は「しられ」の約まりて

され される されれ

の形をなして一の成語の動詞の如く用ゐらるることあり。

この「される」は受身にも能力にも用ゐらるるものなるが、又更に強めて「解せる」「譯せる」などいふ形をなすものあり。この場合のものは能力をあらはすものに限り、しかも、既に成語となれるものとすべく、複語尾の範圍を脱せるものとすべし。

「す」「さす」
の差異

一四〇 「す」と「さす」とは共に下二段活用の形を有し、意義と作用とは全く同一なり。而この二者の差は「る」「らる」の差と同じく、「す」は四段活用及び變格活用に屬し、「さす」は三段、二段、一段の各活用に屬するにあり。

未然形、連用形、命令形	終止形	連體形	已然形
せ	す	する	すれ
させ	さす	さする	さすれ

その所屬の活用の差異の關係は又「る」「らる」の場合に同じ。

四 段	行か(ア)す	加行三段	こ(ア)す
奈行變格	死な(ア)す	左行三段	せ(ア)す
良行變格	有り(ア)す	下二段	受け(ア)す
		上二段	起き(ア)す
		上一段	き(ア)す

「す」「さす」の意義と作用

一四一 「す」「さす」の本来の意義作用は主體が直接に動作作用を起すことをせずして他を使役することを示すにあり。而、一轉しては單に敬語として用ゐらる。

一、使役をあらはせるものの用例次の如し。

早くこの藥をのませよ。

茶屋に腰うちかけてラムネを扱か榮螺をやかす。

旗の青きは浪のいぎたるを知らするなり。

母子に朝早く起きさす。

二、敬語の例

我をはかるなりけりとして沓かヤ給ふ。

大に民心を得させ給ふ。

使役の場合には使役せらるるもの即ち客語を要し、敬語の場合には客語なきを以て容易に識別し得べし。

一四二 口語にては「す」「さす」は一段活用となり「せる」「させる」といふ形をとれり。而、敬語には用ゐず、その所屬と使役に用ゐることとは大畧同じ。「せる」「させる」の活用形は次の如し。

「せり」「せり」

未然形、連用形、命令形

せ

終止形、連體形

せる

已然形

せれ

させ

させる

させれ

これらの活用の實地に行はるる範圍も略「れる」「られる」の場合に同じ。さてこの「させる」を左行三段活用の語に結合せしむるときはその未然形よりして

せさせ せさせる せさせれ

といふべき筈なるが、往々連用形よりして

しさせ しさせる しさせれ

といふ形にして用ゐる所あり。(宮城縣、宮崎縣の延岡)而、殆全國一般に上の「せさせ」又は「しさせ」の形にあらすしてそれらの約される語

させ させる させれ(爲の意を含めるものにして單なる複語尾の「させ」にはあらす。)

を用いて「勉強させる」「出張させる」などいふを常とす。この約される形より誤認して文語にも「勉強さす」「出張さす」などいふことあり。これらは正しく「勉強せさす」「出張せさす」といはずれば文語の格を破るものとなる。

一四三 「しむ」は意義と作用とは「す」「さす」に同じく、活用は下二段活用にして所屬の用言に差別を附せず。而、これは口語には用ゐることなし。

「しむ」の活用形次の如し。

未然形、連用形、命令形

しめ

終止形

しむ

連體形

しむる

已然形

しむれ

一、「しむ」の使役をあらはせるものの用例次の如し、
 國民をして天を仰がしめよ。
 これを憐みて金を償ひ歸參することを得しむ。
 その幅狭く大船を出入せしむるに足らず。
 二、敬語の用例次の如し。
 この年御位に即か^{しめ}給ふ。

使役の場合には客語を要し、敬語にはこれなきこと「す」「さす」と同じ。

一四四 「ず」は打消の意をあらはし、活用形は特別の形を有す。而、文語と口語との差異は、終止形にありて文語には「ず」を用ゐる、口語には「ぬ」を用ゐるなり。

「ず」の活用形及び用例次の如し。
 未然形、連用形、終止形
 ず
 連體形
 ぬ(口語にては)
 終止形にも
 ぬ
 已然形
 ぬ
 命令形
 ぬ
 等を好むは勇に^{あらず}。眞の大勇は人ともものを争はぬものなり。
 これを想うて肅然として襟を正しうせずば^{あらず}。
 人は青蘆にかくれて見えぬと四ツ、手網は確に見ゆ。

一四五 「ぢり」は上の「ず」とありとの合併して成れるものにして良行變格の活用を有す、然れども終止形は用ゐらるるとなし。意義は「ず」と同じ。

「ぢり」の活用形次の如し。
 未然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形
 ぢら ぢり (ぢり) ぢる ぢれ ぢれ

ここに終止形の用ゐらることなきこと特に注意すべし。
 「ぢり」の用例次の如し。

これを以てたゞちにその起點といふべからざらむ。
 人物の出でざる蓋し怪むに足らざるなり。
 名相同じからされども事はすなはち一なり。
 「ぢり」は文語に用ゐるものにして、口語には用ゐず。勿論方言にはこれが跟跡を止むるものなきにあらず。たとへば、土佐、出雲、日向などにて「知らざつた」などいふ「ざつた」は「ぢりき」に相當するものなるが如し、然れど、一般に用ゐることなし。

一四六 「ない」は口語に用ゐる打消の複語尾にして形容詞に似たる活用形を有す。

「ない」の活用形次の如し。
 連用形 終止形、連體形 已然形
 なく ない なけれ
 「ない」の用例次の如し。
 日が暮れて何も見えなくなつた。

知らない事を知つた風しなうがよ。

私は父へ手紙を送らなければならぬ。

この「ない」は佐行三段活用には連用形に属して「しない」といふを普通とす。

この「ない」と形容詞の「ない」とは紛れ易きものなり。この「ない」は動詞の未然形に属すれど、形容詞の「ない」は未然形に附屬すること決してなし。然れども、次の如く動詞の連用形に接する形容詞の「ない」は往々この「ない」と混雜して考へらるることあり。

人口は多くない。

あの山は高くない。

この場合の「ない」は本來の無の意義より一轉して「あり」の否定の義をあらはせるものにして鎌倉時代より既に發達せる一種の語法なり。然れどもこの複語尾即ち未然形附屬の「ない」とは同一に取扱ふべきにあらず。この形容詞の「ない」は又

その騒動は一通の事ではなう。

あの入の處置も悪かでない。

の如く用ゐることあり。これ皆「あり」の陳述のみの意なるもの否定をあらはせるものにして單なる無の意にあらざるは論なけれど、くれぐれも複語尾の「ない」とは別なるを識別すべし。

この「ない」は本來東國の方言に發達したるものと思はれ、現今にても遠江、信濃、越後を境として専ら東國に行はれ、それより西は大抵「ぬ」即ち文語の「ず」の系統を常用とせるなり。なほ「ない」の系統と思はるるものに「なんだ」といふ複語尾あり。その由來未だ明ならず。

存在の否
定の意味の
「ない」

「なんだ」

「じ」

一四七 「じ」は豫想して打消すものにして打消す意はあるものの多少ためらふ點あるを示し、上の「ず」「ぢり」「ない」の決定的なるに比して遲疑するところありともいふべし。この複語尾は形の變化なくして終止形と連體形との用をなす。

而、口語には用ゐることなし。

「じ」の終止形の用例

君はまだ遠くは行かじ。

連體形としてのものは名詞又は「を」といふ助詞につづくる例を見る。

幾世しもあじわが身をなせもかく強のかるもに思ひ亂るる。(古今、十八)

白川の瀧の糸みまほしけれどみだりに人をよせじものをや。(後撰、十五)

雨降れど露も深じを、笠取の山はいかでか紅葉しにけむ。(古今、五)

この複語尾は文語にても普通文には殆ど用ゐず、主として和歌又は擬古文に用ゐらる。

一四八 「む」は豫定又は想定の意をあらはし、活用形は四段活用に似てしかも終止、連體、已然の三形のみを有す。

「む」の活用形次の如し。

終止形、連體形 已然形

む め

その用例次の如し。

「む」

よしさらば余は君が保護者たらむ。

兄の子に家を譲らむ志この時より起させたまへり。

よく思ひならはせる故にこそあらめ。

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにし木實なるときもがな。

(古今、物名)

この「む」は文語にのみ用ひ、口語にてはその變形せる「う」を用ひる。又同じ文語といへども、已然形は普通文に用ひること極めて稀にして和歌又は擬古文に稀に用ひらるるなり。

從來はこの「む」を以て未來と稱せり。元來、未來といふ術語は動詞の用法上ありうべきものにあらず。且、之を説明するに初心のものには殊更了解せらるべくもあらず。著者は多年教授上の實驗によりてこの術語を以て説明しうべきものにあざるを體認せり。而又一方に於いて研鑽の結果論理上に於いても動詞の未來といふこと及過去といふことの不合理なることを看破せり。委しくは日本文法論に述べたり。とにかく本文の如くするときは誰にも明に意義を認めうるものとなるべし。從來の英文典直譯流の文法家が動詞の法とか、式とか、相とか、時とかいへるものは徒に煩を益すのみにして教科の上にも研究の上にもさまでの効なきものなり。たゞに効なきのみならず、往々累を殘せるもの少なからずとす。

一四九 「う」は、もと「む」の變形せるものにして口語にては専ら之を用ひる。この「う」は四段活用及び變格に屬する時に用ひる形にして三段、二段、一段の各活用に屬する時は「よう」といふ形となる。而、この「う」「よう」は形の變化なくして主として終止に用ひられ、また連體形として用ひらるることあり。

「う」「よう」

「う」の終止の用例。

明日は雨が降らう。

彼處で死なうと思つて行つたのだ。

面白い事があらう。

「よう」の終止の用例。

行つて来よう。

これにしよう。

試験を受けよう。

花を見よう。

「う」「よう」の連體形としての用例。

行かうかかへらうかと考へてゐる所である。

いは、やうのない事である。

「う」より「よう」の生ずるに到れる過程は頗る複雑なれば、後來文法史を説く折に譲りてここに略す。

一五〇 「まし」は「む」に似て豫想するものなるが、不確定の度強さを示すものなればその意は「む」の豫定想定するに比して假想といふべきなり。これは形容詞に似たる活用を有す。口語には用ひず、文語としても古きものにして今は和歌又は擬古文ならでは殆ど用ひず。

「まし」

「まし」の活用形次の如し。

未然形	終止形、連體形	已然形
(行か)	ませ	まし
		ましか

「まし」の用例次の如し。

かゝる所に住まましければ何心ちかせまし。

梅が香を袖に移して留めてば春は過ぐともかたならまし。

うちわびて蔭穂拾ふと知らませば我もいづらに行かましものを。

第十四章 連用形所屬の複語尾

一五一 連用形所屬の複語尾は確に肯定するもの全體、即ち「きけり」「つねたり」及び過去を想像する「けむ」と希望の「たし」となり。

一五二 「き」は回想する意をあらはすものにして特別の活用形を有す。

「き」の活用形と用例と次の如し。

終止形	連體形	已然形
き	し	しか

うれしかりし事どもなり。

貧窮甚かりしかば上方に往きて身を立てむと思ひき。

一五三 この「き」の活用形は三段活用に限り所屬に特別の現象あり。

連用形所屬の複語尾

「き」

「き」と三段活用の連

その現象次の如し。

加行三段の未然形

くらべこし振分かみも肩すぎぬ。

人ふるす里を厭ひてこししかども奈良の都もうき名なりけり。

同上連用形

きしき(用みず)

きしし方行末思ひつゞけられて

きししか(これは中古には例を見ず、然れども普通には用ゐらる)

左行三段の未然形

今まで無禮せしは過なり。

やがてさぶらはむとせししかど、

同上連用形

鬼のやうなるもの出で来て殺さむとししき

(「しし」「ししか」といふ形はなし。)

かくの如く、ある形にはつき、ある形には附屬せぬなり。

一五四 「けり」も亦回想をあらはすものにして、良行變格活用に似たる活用を有す。而普通に用ゐるは終止、連體、已然の三活用形なり。

「けり」の活用形次の如し。

「けり」

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形
 (けら) (けり) けり ける けれ
 その用例

友は詞はなくてたゞ頻にうちうなづくなりけり。
 之を傳へきける將士皆王の赤心と大膽とに驚けり。
 砂漠の中に出でければその困苦いふべくもあらず。

未然形の「けら」は奈良朝時代までは用ゐられたりしなり。その例
 梅の花咲きたる園の青柳は髪にすべくなりにけらすや。(萬、五)

上述の「き」「けり」の二は回想する意をあらはせり。回想とは思ひ起すことなり。過去に経験せしことを「あゝであつた」「かうであつた」と思ひ出すことなり。而、人は経験以外の事は回想しえざる筈なり。この故にそれらの事は直説せざるべからず。所謂歴史の現在などいふ苦しき解釋は過去といふ語法上の範疇を強ひて立てて白繩自縛に陥りたるものの苦境を脱せむとする附會の説なり。

さて又「き」と「けり」とは根源一なれど、「けり」は「き」と「あり」との結合よりなれるものなれば、「き」とは意義少しく差ありて、現に見る事に基づきて回想する意をあらはせり。その意の著しくあらはれたるものは次の歌の如きものなり。

八重葎しげれる宿の淋しきに人こそみえね秋はきにけり。(百人一首)(拾遺集)

かくの如きものを普通の「けり」と別なる語として詠嘆の「けり」などいふ名目を立てたる學者あれど、それらはただ文全體の意義よりいへるに止まり、「けり」としてはかへりて本來の意義を保存せるものといふべきなり。

「ぬ」

一五五 「ぬ」は主觀的には陳述を確むる意をあらはし、客觀的にはその事の完く了れるを示す。その活用は奈行變格活用に同じ。

「ぬ」の活用形次の如し。

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形
 な に ぬ ぬる ぬれ ぬ

「ぬ」の用例次の如し。

月影はやうやくわがもとに來りぬ。
 浪うちよせなばやがて流れも失せぬべし。
 のどかに物語してかへりぬるいとよし。
 このともがらは皆歩兵にこそ侍りぬれ。

「ぬ」は古風の詞にして多くは美文に於いてし、普通文には主として終止の形のみ用ゐらる。
 「ぬ」は奈行變格の動詞には附屬することなし。

一五六 「つ」はその意殆ど「ぬ」に同じくしてその活用は下二段活用に似たり。

「つ」の活用形次の如し。

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形
 て て つ つる つれ て(よ)

その用例

梅が香を袖にうつしてとどめてば春はすぐともかたみならまし。
曙光は見えそめつ。

あさましかりつる夏もくれて秋にも既になりにけり。
鶯と吟味致しつれば雲にてありしもをかしく候ふ。

「つ」の未然形、命令形は今日の普通文には殆ど用ゐることなく和歌又は擬古文にのみ用ゐられ、終止形も亦古風を模する美文に多し。連體形、已然形とても亦殆ど然り。然るに連用形なる「て」は用法極めて廣く、單に決定の意をあらはして殆ど獨に「つ」の意義を離れて使用せらるる傾向あり。先次の如く

頭の方太く尻の方尖りて西洋の獨樂に似たり。
波瀾と上下して走る。

動詞の連用形につゞきて單に連用の意を強くするに止まり重文をなし修飾的語法をなすこと頗多し。而これより一變して形容詞の連用形につづくことあり。
柄は短くても可なり。

これは中間に「あり」を省きたるものにしてなほ連用の意を強むるものなり。而、又
花は紅にて葉は綠なり。

内地にては金澤地方にてこれを培養せり。
昔上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。
人知るまじとて欺くは妄なり。

の如く「に」「と」の下に来るべき動詞を領して之にかはること少からず。これ即「にて」「とて」といふ形な

「て」

「つ」「ぬ」の
別

一五七 「つ」と「ぬ」とはその意義は大略相似たるものなれば、往々混同し易し。然れども「つ」はその事實を直寫する場合に用ゐ、「ぬ」はその事を傍觀的に又は説明的に述ぶる時に用ゐるなり。

この二者の區別につきては古來種々の論ありて一定せず。普通には「つ」を他動に「ぬ」を自動にといふ區別を設けれどもその當らぬことは既に定論あり。又「ぬ」を状態「つ」を動作といふ區別をなせる人あれど、二者共に動作にも状態にも通じて用ゐるものなればこの別も亦通ずるところなし。今本文の如くに見れば、最も當れるに似たり。次に一二の用例をあげて説かむ。

我心慰めかねつ更科や姫捨山にてる月を見て。
待つ人もこぬものゆゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな。
谷川のうち出づる浪も聲たてつ鶯さそへ春の山風。

以上「つ」の例なり、いづれもその文の主者の地位より直寫的に見たるものなり。

谷川の流れも清くすみぬれば隈なき月の影もうかひぬ。
秋きぬと目にはさやかに見えぬども風の音にぞおどろかれぬる。
春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ。

以上「ぬ」の例いづれも説者の傍觀的に説明せるをみるべし。なほ一層明なる例は次の如きにて見るべし。
をし鳥のつたふ岩碇に浪かけてうきぬしづみぬ身をぞうらむる。

萌黄、緋威、赤威、色々の鑑のうきぬ沈みぬゆられけるは神南備山の紅葉葉の嶺の嵐にさそはれて龍田河の秋の暮井塞にかよりて流れもやらぬに不異。

(覺一本平家、四)

此文ヲヒロケツ卷ツ千度百度ヲキツ取ツシテ臥マロヒテヲメキ叫ヒテ悲ノ涙ソ流シケル

(延慶本平家、二、本)

一五八 「たりはつ」と「あり」との結合によりて成れるものにして意義は「つ」に似たれど、その用況し。これは良行變格に似たる活用形を有す。

「たり」の活用形次の如し。

未然形	連用形、終止形	連體形	連體形	命令形
たら	たり	たる	たる	たれ

「たり」の用例次の如し。

過を知りたらばそを補はむとつとむべし。

恰も穿に落ちたる野獸の身をあせりて上らむともがくに似たり。

花は見頃は過ぎたれどもなほ七分の匂あり。

これの連用形は下に複語尾をつづくるのみにして

待やすきものにおぼしたりきかし。

命令形は古代にありたれど、現今は用ゐることなし。

山城茄子は老いにけり。とらで久しくなりにけり。あこがみたり。さりとてそれをばすつへきか。おいたれ

くたねとらむ。

(源、朝、顔)

(梁塵秘抄、雜歌)

以上に説ける「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」の五は従来は過去の助動詞と稱せられたり。しかれども、そのうち「ぬ」「つ」の二は「なむ」「てむ」「なまし」「てまし」「ぬらむ」「つらむ」「ぬべし」「つべし」「ぬめり」「つめり」の用例に見る如く過去をいふものにあらずして叙述を確むるに止まるものなり。

又「き」「けり」「たり」の三は過去の助動詞といふこと殆通論の如くなりけれど、これも亦、過去とは何の意味をあらはすものなるか、決して知らるゝものならざるに止まらず、學者研究の結果も亦、その誤なることを結論せり。(日本文法論には特に之に關して詳論せる章あり。)これは過去の事を回想するものにして過去の事實をかきたるものにあらざるなり。

一五九 文語に於ける「き」「けり」「ぬ」「つ」の四は口語には皆亡びて、「たり」の變形せる「た」の一之に代はることとなれり。この「た」は活用形も不完全に、用法また限られたり。意義も或は回想に或は決定に共通して用ゐらる。

「た」の活用形次の如し。

未然形	連用形	終止形、連體形
たら	たり	た

「たら」はそのままにて條件をあらはし、又「ば」をつけても條件をあらはすことあり。

遊んだら歸れ。

見たら見たといふさ。

書いたらば渡しなさい。

「たり」は同様の事を列挙するに用ゐらる。

飛んだり跳ねたり騒いでゐる。

立つたりすわつたりする。

雨が降つたり風がふいたり静かな空が少い。

「た」の終止形の例

五年前に東京へ来た。

唯今かへりました。

ちよつと待つた。

昨日雨が降つた。

今そこへ来た。

「た」の連體形の例

尖つた山

犬見たやうなもの

これらの用例にて「た」が、所謂過去にあらぬことをさとるべし。ここにも西洋文典流の説明はさほど、効なきを見る。

一六〇 「けむ」は過去の事實を想像するものにしてその成立は「き」と「む」との結合に基づくものと思はれ、意義も亦二者の結合せるものを以て考ふべし。これはその活用は「む」に同じく、終止、連體、已然の三活用形を有し、文語にのみ用ゐらる。

「けむ」の活用形次の如し。

終止形 けむ
連體形 けむ
已然形 けめ

「けむ」の用例次の如し。

涙川なに水上をたづねけむ物思ふ時のわが身なりけり。

(古 戀 一)

變化の者にて侍りけむ身ともしらす

(竹 取)

先世の芳縁も浅からずや思はれけむ。

人々の心のうちさこそ嬉しくも又哀にもありけめ。

この「けむ」は文語にても普通文には殆ど用ゐず、擬古文和歌等にのみ用ゐらる。

一六一 「たし」は希望をあらはすものにして形容詞の「くしき」活用に同じき活用をなし、未然、連用、終止、連體、已然の五活用形を有す。

「たし」の活用形次の如し。

未然形 たく
連用形 たく
終止形 たし
連體形 たき
已然形 たけれ

連用形の「たく」は音便にて「たう」となることあり。

その用例次の如し。

(未然形の用例は古書に未だ見ず)

ハルカニ見送り奉り走付テモ参タク思ケレトモソモカナハス。

(延慶本平家三末)

此舟にうちのせ奉てのぼりたくは候へども、

(平 家 三)

きゝたしや宿をたどりてなくなみたわすれ水とや流れゆくらむ。

(月 詣 集)

イツクニテモ父ノオワシマサム所ヘソ参リタキ。

(延慶本平家六末)

その良行變格の語には連體形に附屬す。(但動作存在詞には附屬することなし。)その例
今日の後なるべし。

かくいはれて耻ぢざるものはなかるべし。
さることはあるまじ。

今兩雄共に闘はゞ勢必俱に全かるべからず。

天の力は無量にて、その秘密には際限あるべからず。

考察は長かるべく、決斷は速なるべし。

かく終止形に屬する場合と連體形に屬する場合との二様あれど、その大多數につきて終止形に屬するを本體とし連體形に屬するを例外の場合として本文の如く説く。

さてこの良行變格に限りて連體形より接するは特別なる現象なれど、その良行變格の連體形といふものはその形は普通の四段活用の終止形と同じ形なれば音韻の方よりいへば、かへりて普通の例といふべきなり。即ちいづれも「ウ」の韻の活用形より接するを以てなり。

なほ注意すべきことはこの類の複語尾を動詞の本體ことに二段三段の各活用につづくる時に誤り易き二種の傾向あり。一は

この所に塵芥すてべからず。

決して御心配かけまじく候ふ。

の如く連用形をうくるやうにすることなり。こは古くは鎌倉時代頃よりあるなれど、文語としては認めらるるものにあらず。又一方にては

この事決して忘るべからず。

以後かやうの事はするまじ。

の如く連體形よりうくるやうにすることなり。これは四段活用一段活用などは終止形も連體形も一なるが、上にいへる如く良行變格には連體形より受くるが故にそれらを思ひうかべて、知らず知らずかゝる誤を起すに至るものなれば注意すべきなり。殊に注意すべきは二段活用の詞なり。これ連用連體二様の誤を生ずべければなり。

又一段活用にては連用に誤る處あり。(これは終止連體同様なり。)

上一段 みるべし(正) みべし(誤)

みるまじ(正) みまじ(誤)

下一段 けるべし(正) けべし(誤)

けるまじ(正) けまじ(誤)

もつとも、上一段の連用形より「べし」「まじ」につづくるものは奈良朝時代より平安朝の初頃までは用ゐられしものなり。されど、今は之を用ゐるはかへりて破格と認めらる。

一六四 「べし」は形容詞「くしき」と同じ活用を有し、その本來の意義は推量をあらはすにあれど、轉じてはその事の可能又は適當なることを示し、更に轉じて義務の存することを示すに至る。

「べし」の活用形次の如し。

未然形、連用形 終止形

連體形

已然形

べく

べし

べき

べけれ

「べし」は本文にいへる如く種々の意義をあらはすものなるが、その根本の意義は推量をあらはすにあり。その例

古寺の庭に紅つややかなるは若楓なるべし。

これより一轉して可能の意をあらはせるものの例

以てその注意深きを見るべきにあらずや。

これより更に轉じてこれが適當なることを示すものあり。その例

事務をとるには瑣事たりとも仔細に吟味すべし。

これより再び轉じその對者につきてその事をなすがよしと勸誘するが如き意をあらはしてここに義務を指定する用をなすに至る。その例

人は必ず道徳を守るべきものなり。

この義務の存するを指定するものを世には往々命令をあらはすといへれど、それは命令の用に供せらるるにすぎずして本來の義務を示す意は依然たるものなり。

抑も語句の形式と實際の用とは必しも一致するものにあらず。文法はいづこまでも方式を主として論ずべきものなり。方式を顧みずしてたゞその用法意義をのみ論ずるときは何等の條理もなきに至るべし。

「べし」の連體形なる「べき」は音便によりて「べい」となり、連用形なる「べく」は音便によりて「べう」となることあり。これらは主として平安朝の語に存するものなり。

ほんいのいとしづかなるべし事のかたかべし事をなむいかさまにせましと思ひ侍り。(宇都保樓上、上)
 ひかへすべうもあらずあさまし。(堤 中 語)

「べかり」

「べかり」「べかりはべし」とありとの複合によりて成れるものにして良行變格の活用を有す。然れども、現今普通に用ゐるは「べから」といふ未然形のみなり。その意義は「べし」に准じて知るべし。

「べかり」は理論上よりいへば、次の如き活用形を有するものなり。

未然形 連用形(終止形) 連體形 已然形
 べから べかり べかる べかれ

然れども、終止形の「べかり」といふを用ゐたる例を見ず。その他も活用形の用例多からずして古くより「べから」「べかり」の未然、連用のみ多く用ゐられ、現今の普通文にては未然形の「べから」に打消の「ず」「ざり」を附屬せしめ「べからず」「べからざる」といふことのみ用ゐらる。その例

造次顛沛にも忘るべからざる訓言にあらずや。

縷々として絲網を放つこと幾千萬條たるを知るべからず。

學生たるものよくこの言を味はざるべからず。

これらのうち「べからず」といひて所謂禁制をあらはすことあり。これ「べし」の肯定義務をあらはせるものに對してその反對の義務を示せるものなり。

「めり」

一六六 「めり」は良行變格の活用に同じくして未然形なく、その意義は現實の推量をあらはす。

「めり」は古風なる語にして今日の普通文には全く用ゐることなく、ただ擬古の歌文に用ゐるのみ。その活用形は次の如し。

連用形	終止形	連體形	已然形
(行く)めり	めり	める	めれ

「めり」の用例次の如し。

立田川紅葉みだれて流るめり。

鶯の花をぬふてふ笠もがなぬるめる人にきせてかへさむ。

風のみこそ人に心はつくめれ。

「めり」の意は「べし」の推量に似たること本文の如くなるが、その推量の意は「べし」よりも一層軽く、略一種の肯定とも見るべき勢の思想をあらはす。即ちある事柄を現に見て、その實相を推定するにあり。余はかつて之を傍觀的に推定すといへり。

一六七 「らむ」は豫想の「む」と同じく、四段の不完全なる形を有して、終止、連體、已然の三活用形をなす。その意は多少の疑惑を含める推量をあらはす。

「らむ」の活用形次の如し。

終止形	連體形	已然形
らむ	らむ	らめ

「らむ」

「らむ」の用例次の如し。

秋はつる色のかぎりを見るなるらむ。

浮き寐ながらの草枕夢より霜や結ぶらむ。

まことにさこそは思しめされ候ふらめ。

「らむ」の意義は本文にいへる如くなるが、なほいへば、これは純粹の疑惑的推量といふべきものにしてその事實の客觀的存在如何に拘らず、自家が想像推量する意をあらはす。この點に於いて「めり」とは對角線的の反對なり。

この「らむ」は方言に「らう」となりて存すること既に概説にのべたる如し。

一六八 「らし」は形の上に變化なくして終止、連體、已然三形の用を存す。その意は「らむ」に似て傍觀的なる意をあらはす。

「らし」は活用の形に變化なくして用法にて三様となる。次にその例を示す。終止形の例。

さよ中と夜はふけぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ。

連體形の例。

此河にもみちば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし。

已然形の例。

ぬき亂る人こそあららし白玉の間なくもちるか袖の狭きに。

かく三形あれど、いづれも終止に用ゐたる例を見るのみ。而その「ぞ」の係に對するものは連體形、「こそ」の係に對するものは已然形たること勿論なりとす。

「らし」